特61
276

教訓文庫

道二翁道話

中澤道二翁著

44.11.4
發行所
大屋書房

子曰不得中行而與之必也狂狷乎。狂者進取。狷者有所不爲也と。夫レ人志操極高なれば。多くは行ひ掩ずして闕。亦徒に謹厚の者は。立テ已守レ節自ら是として。竟に聖道知ること少し。故に其志節。すでに道の至處に屆り。行ひ亦謹厚にして。言顧レ行行々顧レ言て。愷々爾なるはかたしとかや。されど學は言行一致にして。過不及無き地位を。要するを以て。その過たるは裁抑し。其不レ及ものは激厲して。日々進で止ず。終に中和の德を成就するの外なしとぞ。粤に予が友道二中澤翁は。篤く聖學に志し。先人堵庵先生に親炙し。奇を問ひ益を請て倦づ。一旦豁然として性理の蘊奥を開悟し。磋磨の功積りて。道を諸邦に。唱ふるに。其言卑近にして其意思深遠なるをもて。貴賤尊卑老若男女を撰

ず。皆此に感化せられ。羣集する者宛も市に歸するが如し。頃日浪速の社友八宮氏なる人。日々に其席につらなりて。其道話を筆記して五巻となし。此を梓に彫て。同志の輩に須臾せんことを謀りて。序を予に求む。予熟々その書を閲するに。其意味深長なりとへども。素より翁は平安の產。商家忙市の中に成長し。營生の暇少きを以て。書を讀み學べると云ふにあらづ。唯性理の奥旨に徹通したるのみ。其平常教諭するの話における。神儒釋老の言より百家衆枝。狂言綺語。閭巷の童謠に至るまで。見聞のはし〳〵記臆したるをもて。此を譬喩し。或ハ假借し用ひて。聖教の奥旨活潑的の眞理を示し。導けるを以て。其はなしをきゝ。此書を見る人。唯怖くは意味の玄遠幽妙なるに驚く。還て謹厚篤實の行ひを欠。或は教外別傳不立文字。また は書は聖人の糟粕等の語に附着して。行ひ餘力あれども自ら是として。聖賢の書を見ることを廢棄し。或ば三聖一致の大旨を得てば。浮屠と俗家と行ひを混淆し。或は釣深闡微の論を主張して。宿儒高僧を睥睨し。或は狂言綺言を玩んで。克已復禮の教なることを知らず。或は此書を懐にして安りに人を教示して。己が爲に學ぶの道なるを辨ざらんことを。此皆翁の本意にあらずして。予も取らざる處なり。希くは同志の人。此書によりて固有の性善を覺悟し。日をつみ年を歴て。本心の全徳を習熟し。君臣父子夫婦兄弟朋友の人の たる五倫の道を全ふ形に踐み。身に行ひ遂て。彼の狂狷過不及の二

つを抑揚して。不偏不倚中和の極至を致て。天人合一の地位に至らんと學びたまはば。實に我石門の徒弟と云ふべき歟。

寛政甲寅冬

手島堵菴男正揚識

道二翁道話

初編

浪華 八宮齋輯

近思錄曰。夫天地之常其心普萬物而以無心也ト天地の常とは則ち道の事でござります。天の心といふほ。一切萬物人間禽獸草木に至るまで。皆天の心なるゆへ。夜が明るとちう〳〵かう〳〵。梅の木に梅の花が咲き。柿の木に柿の出來るも。皆天の功用じやけれど。天は目に見へぬ。影形もなく無心なれど。平等一枚萬物に普くして。此やうにうごき詰じやによつて。一切萬物の造化するは。悉く天の働き。天と萬物と一體なるゆゑ。釋迦如來も孔子樣も。千石萬石の殿樣も。賤しい銘々どもも蚤も鯨も。犬も猫も雁も鴨も皆天の生じた土じや。其生じた土が形の通りしてゐるが則道じや。といふ事でござります。道とは何ぞ雀は

ちう〳〵。烏はかあ〳〵。鳶は鳶の道。鳩は鳩の道。君子其位に素して行ふ。外に願ひ求めはない。その形地の通り勤めてゐるを天地和合の道といふ。柿の木に柿の出來るも。栗の木に栗の出來るも。あい〳〵。と口舌言はす。たゞ素直に和合の道。此外に道はなあい〳〵。

人は天地同根同性なるゆへ。一切萬物を心として。其外に別に心はない學問といふは。其道理を明らめるのじや。君子之學は。廓然たる大公。物來りて順應する。心は虛靈不昧にして萬事に應じて跡なし。たゞ應ずるばつかり。主人に向へば主人ばつかり。親に向へば親ばつかり。花に向へば花ばつかり心に隔のない事は。鏡にもの〳〵移るがごとく。去れば跡なし。少しも疵は付ぬ。此心は平等一枚。孔子も釋迦も熊坂長範も銘々共も。芝居見て歎しい所ではかなしい。其かなしいは此方にはない。應するばつかり又うれしい事見ては嬉しい。其嬉しいは此方にはない。

應するばつかり又花を見て。花とは誰が花とは見たぞ。花見ぬさきには

たれが〳〵はない。順應するばつかり。此道理を合點したを佛家で成佛の相といふ。是を道ともいふ。道といふは順應するばつかり。去によつて。人は一個の小天地。天地の外に道はない。人は天を心として形は土じや。燒は灰埋めは土。上々樣方でも。御大名樣方でも。我々共も乞食も穢多も。一切萬物一體。犬も猫も。熊も魚も鳥も。草木はいふに及はず一切天の化したのじや。悉皆土の化ものじや。土に二ツはない御姫さまの土じやとて伽羅の匂ひもせず。奴の土じやとて尻からげてもいぬ。平等一枚土に隔はない。紫笛翁のうたに

『西行も牛もおやまも何にもかも土のばけたるいなり街道』

此席に並らんでござるおまへがた。此世有らん限り。心は居なり街道。殘らず土じや。土の化もの。同じ土を。權兵衛の太郎兵衛の。お源のお

さよのと塊たやうなものじやつらりと並らんだ人形や見世丸で土じや。

是が死で土になるの焼て土になると。いふやうなまどろい事じやない。此身此まゝ直に土じや。是は人ばかりじやない。一切萬物丸で土じや。夫で形地といふ。形とは形地といふ事じや。扇も扇の形地。見臺も見臺の形地。犬も猿も形地は土じや。柳も松も鳳も鴨も其外江河の鱗類。鯛でも蛸でも鯨でも。ごまめでも一切萬物殘らず。形地有ものは皆土じや。心は天なり形地は土。佛家では此形地ある所を。かりの世といふ。扇も今日扇〳〵と云はれて居るうちは扇のかりの世。やぶれて役に立ぬやうになると。風呂の下へほり込む。扇の火葬。茶椀も今日勤めてゐる内は茶椀のかりの世此形地有ものゝ無常なる事如レ夢幻泡影如レ露亦如レ電應作二如レ是觀一露の形地。まぼろしの此身。人はたゞ露の此身。幻の身なる事を明らめるを。神道とも。儒道とも佛道ともいふ。是を合點するのじや。寺〳〵の鐘の聲。諸行無常のひびき。死ぬるぞよ〳〵。夫をときの鐘とばつかり覺へてゐるゆへ。けふは日が永ひの短ひのと。何ぞ給銀

でも出して置たやうに。其やうな爲にこしらへたものでない人と生れ來たは何の爲に出て來たのじや。不足いひに來たのじやない。生死一大事の因緣。犬や猫とは違ふ。佛知見を開らかしめんが爲に。世に出現なされたの。明德を明らかにせんが爲に。世に出現なされたのじや。三千世界に人は尊び天上なるがゆへに。佛の大慈大悲のひびき。死ぬるぞよ〳〵大切な事じやぞ〇おどろかす鐘の聲さへ聞なれて永き眠りの覺る夜もなし。此無常をしらぬゆへ目が明と何がほしい。かゞほしい。どうしたい。かうしたい。春はどうしやう。秋はどうしやう。子供の行すへがどうならう。何をいふも金の事じや。金がなければどうもならぬ。人を突こかしても金をしてやろう。思ふやうにこけてはくれずハアスウ〳〵日がな一日八萬四千の地獄のくるしみ。皆目が覺ぬゆへじや〇はかなくも消るを露と思ふなよどんなものでも消て行なり露の親子。露の主從。露の夫婦どんなものでも死んで行なり。去りとてはもろいものじや口で

は皆言ふてゐる。アヽ夢のうき世じやと。口でばつかりいふて。體は金鉦のやうにかゞほしい。どふいふたが濟ぬ。こういふたが聞へぬと。朝から晩までがみ〳〵と氣をもんでうろたへ廻る。きのどくなものじや。露の身が合點が行ぬゆへじや此露の身を譬て。御嘲し申せうマア世界中のいきとし生るもの〻壽命。桃でも柿でも何でいふても同じ事じやが適々受がたき柿の形地はむすべども。柿になる柿はすくない。大方あだ花で散てしまう。風に散らされ。鳥に落され子どもに取られ。虫に喰わればら〳〵。あだ花で散るが多ひ。是も柿の木の事ばかりじやないぞへ。此身のあだばなる事を引當て見るがよい。此極まで首尾能くつとめ。どうやらこゝやら宿這入する樣に成てから。ころり。アヽはかないものじや嫁入の約束極り結納まで取て。向ふへ行一段に成てころり。又嫁入りして御目出たい〳〵といふ舌も引かぬうちころり。皆あだ花で散て仕廻ふ

毎年〳〵七月の精靈。佛前に新しい戒名が多ひ。梅の花が梅に成て梅干の壺へ納るまでは。大體や大かたの難行苦行を遁れて來ば。目出たう壺へは納らぬ。今日何屋何兵衛と成て三枚疊でも敷て居るは。大體有難ひ事じやない皆神代から樋で傳わりて來た。何屋何兵衛じや。すりや甚だ大切な事じや。たとひ貧乏なとて悔まぬがよい。勿體ない事じや。みなが貧乏辭がりて。にげあるくゆへ貧乏が付てまわる。是をたとへて見れば。鼠桶へはまつたやうなもので。急に上らんともがけば。そこらあたりへへばり付て。一向どふもならぬやうになる。もし過てはまつたら。これはせう事がないと心をおとし付て。ぢつと氣を靜むれば體のあたゝまりで。すぽりとひとり離れる。コリヤたとへじやぞへ又本眞に鼠桶へはまつて。きよろりとしてゐるは。ソリヤあほうじや取違へまいぞへ。貧乏も其通りで誰じやとてすき好んで貧乏するものはなけれど。天命なれば是非がない其かわりに。貧乏結構なものじや。人に

損かけられる氣ずかいけがない。盜人の世話もなく。水難火難の案じもない。スリヤ有難ひ天命の貧ぼうじやと思ひ。隨分大切に貧乏勤め守りたがよい。そうすると次第に貧乏をはなれる夫を急に遁んと。もがくゆへ往さわる所に貧乏が引付き廻り。終には貧乏と打死にせにやならぬ。もと貧乏いやがるといふは。此體が有ゆへじや。此體がなけりや悔み事はない。その上惡事も出來ず。愁ひ災難といふ事もない。去によつて心學を御進め申ます。本心を知るといふも外の事でない。體のない事を知るのじや。此身此まゝ體は有ながら世話にならぬ。第一死ぬるといふ世話がない。大體重寶なものじやない。永ひ末來といふも死んだ先きの事じやない。心の事じや。腸の中は。六十萬億那由多恒河沙由旬兩眼四大海の如しと。大きな佛さまじや。是が目に見へぬゆへ暗から闇。去りとては暗ひ〳〵佛法睫毛じやぞ。神道睫毛。儒道まつげ。あまり近ふて見付けざりけり。足が見へぬゆへ目が明くと。何

がほしいかゞほしい。どういふたが濟ぬ。こういふたが聞へぬと。ハアスウ〳〵〳〵皆此骸が有ゆへじや。ちつとでもよいものが身にまきたいのは。骸に直打がないゆへじや。その上にうまい物喰ふて遊んで居たい。皆小人の樂しみ子供あそび。たつた一色か二色の事で一生をあたふた〳〵腹の中がまつ暗がり。暗きより闇き道にぞ入ぬべし。いづくをさして御出なさるぞ。はるかに照らせ山の端の月。ちつと不審打てごろうじませ。此よふにいふて有てもきよろりくわん。塵に鐵砲打て見せたやうなもので。ねつから通じぬどふもならぬてに〳〵是此手の握たり開らひたりするは誰が仕業ぞ。是此通りに。びち〳〵〳〵天がはたらき通しじや。此ように天を出して見せても。きよろりが咪噌やつぱりおれがするおれが見ると。思ふてゐるゆへ。何いふも金の事じや金がなければどふもならぬ。是では詰らぬ。あれでは詰らぬ。何がほしいかゞほしいがやまぬ。あんまりあざとい。よいかげんに迷ふて置たがよい○うまれては

死ぬるものとは知りながら。猶うらめしき朝ぼらけかな死出の旅とは。いづくをいふぞ。死んだ先きに死出の旅の道法に不同がある。八九十里もあれば六七十里もあり。二十里三十里もあれば三里か五里もあり。又五丁か三丁もある。葉の上で死るも疱瘡暴瘡で死ぬるもあり。或は驚風顛肝腎虚脾胃虚内傷。皆ばう〳〵とあだ花で散が多ひたとへ七十八十の齢ひを保ちても。ホン〳〵とハアスウ〳〵のやまぬ内は皆あだ花のうちじや。是ばつかりはどうもねだりに行く所もない。子在ニ川上一曰逝者如レ斯夫不レ舎ニ晝夜一とゞまるものは一ツもない。出る息引息ずる〳〵。しばらくも止まる事はならぬ。線香の立てあるやうなもので。もの云ふてゐる内に消へ行。さつきにからおまへ方よつぽど灰に成たぞへ。さきほどの次郎兵衛ではない。近松門左衛門がおはつ徳兵衛の浄瑠璃に。あだしが原の道の霜一足ヅヽに消てゆく。夢のゆめなる夢の世をといふ文句面白い事じや。是もおはつ徳兵

衛の事ばかりじやない。世界中の人が殘らずおはつ徳兵衛じや。寝てゐる間も休みなし。出る息引息ずる〳〵一足ヅヽに消て行。あとへ戻るといふ事はない。夫もしらずに目が明くと何がほしい。かゞほしい。商賣繁昌。家内安全。子孫長久そくさい延命〳〵と祈る内にも減る命是ばつかりはど仕やうがない。七十まで生るものを。古來稀なといふて七十を古稀の賀といふ。尤八十九十までもゐる人もあれど夫は萬人の内に一人か二人かじや。先通例が七十稀なり。又七十といふも。よつぽど珍らしいありがたい天命じや。わたくしが巳のとしで六十七歳。是をマア七寸の線香にしてごらうじませ殘りはたつた三歩じや。便りないものじや去とては。本にはかないものじや。しかしめつたに力落さぬがよい。灰の中にまた何んぼ有ふも知れぬ。マアそれを便りにして。持てゝある世界じや。扨正月のしめかざり氣もはんなりとして。八十になる婆さまも活返た心地。あら玉の春をむかへて御目出たひ〳〵ばつかりじや

が。わしは今年の何月幾日に死るといふ事。知りたもの一人もない。なせにしらぬぞいな。おれが〳〵おれが銀じや。おれがものじや。おれがのじや〳〵と。いふてゐるが。どこがおれがのじや。肝心の死ぬる事さへおれが自由にならぬもの。是がどふなるもので。今年の元日に雑煮の餅十四五も喰ふたおやぢさまが。此間もころり此春から今日まで一年立ぬ内に幾人死だぞ是が世界中では何程の事やら。数も限りもない事じや皆銘々どもも其数の内じやぞへ。今をもしらぬはかない身の上。今でも御迎ひがござると。もちつと待ておくれはならぬ。ハイ〳〵いふて往にやならぬ。そのやうなあぶない骸を持て居よふより。いつそ死んで仕廻ふたがよい。死んで仕廻ふたら死ぬる氣遣ひがなふてよい或道歌に

『若い衆よ命おしくば死にめされ一度死たら二度は死なぬよ
平常往生能ウ御明らめなされませ。紀州若山朋友の辭世に
『心學のおしへの杖に助られ極樂へ行足のうるさよ』

我さへ殺して仕廻へば丸で佛じやぬと。極樂へ往ても佛さまがたに御近付がないと、ツイ投出されて本の地獄へ宿這入り。ハアスウ〳〵此席の御方々は。皆丸佛じや。一佛一體に成て。何ぞおかしい事いふとにこ〳〵笑ふばつかり。うまいものじや。丸で佛さまじや。微塵も我といふものはない。今ホン〳〵がどこにあるぞ。ハアスウ〳〵がいづくにあるぞ天地同根同性天照大神様とも同體じやけれど。此席が終りて門口へ出るがさいご忽ち活返りて。モウ何がほしいかゞほしいとさわぎかける。ちやうど蛇を竹の筒へ入れたよふなもので。竹の筒に入れてある内は眞直に成てゐる。其竹の筒を出るがさいご。何をいふも金の事じや金がなければどうもならぬ。春はどうしやう秋はどうしやうとのたくりまわる。竹の筒は敎へじや。おしへは此席の御まへ方即今只今の心の外に何が有るぞ。此外に道はないぞ。此外には生死もない。此所を能ウ決定して覺悟を極める事じや。

ものには覺悟といふ事がないとうろたへる。炎治はあついものなれど。熟ひとかくごしてすへれば子供でも合點してすへる。もし麁相で取落とびつくりする何ゆへ驚くなれば覺悟がなかつたゆへじや。是もはじめから合點さして。艾に火をつけて脊中の上から。ころ〳〵。何でもない事じや〳〵。此身もはかないものと覺悟して見れば。何にも驚く事はない。夫じやによつて。今をもしれぬ親じやぞ。今をもしれぬ御主人さまじや。大躰大事にせにやならぬ。それを澤山そうに思ふゆへみな罰があたつて不仕合な〇なでさせり大事にするもうづみ火のつめとふならぬうちでこそあれ。親子のあいだも。主從の間も。夫婦の間も。兄弟のあいだも一家親類の間も。朋友のあいだも。つめとふ成ては役に立ぬ。武士は尚以て死を極て置ねば。眞阪の時に役に立ぬ。楠正成湊川の討死佐藏次信主人の身替り。ぐず〳〵した事では間に合ぬ。あのとき世間へ外聞がわるひの。人に謗られたいのといふやうな了簡では出來ぬ仕業じ

や。兼て死を極めて置たのじや。或國の殿樣の御辭世に

『終に行ところをこゝにしめ置て世にながらへる身こそやすけれ』

御存生の內から石牌まで建置れ。世にながらへる身こそやすけれ。有難ひ事じや。百姓でも町人でも同じ事じや此死といふものを極めて置ねばうろたへる死を極めるといふはどふぞなれば。本心を知る事じや。本心に生死はない生死するものは迷ひの思ひの思惑ばつかり。其思惑が。本來の生れ付にない事を知るゆへ何んぼ思惑が有ても。ねつから生死の世話は入らぬ。此道理をしらぬと。めつたむしやうに死にとむながる。そこで。正月になると祝ひはやすじや。たゞ死にとむないばつかりで。ごまめの干物まで。おまめなやうに何んぞ御祈禱にもなる事かしらぬ。孕み子を引出し水に漬て醬油かけ。かず〳〵御目出たい。數多ふなるにあやかるやう。其樣に子が出來てどうするもので。たつた一人か二人の子でさへ難儀がり。春はどうせう秋はどふせう。子供の行末がどうならうと。小

言ばつかりいふくせに。それも目出たい事難有ひ事のかず〳〵ふへるやうとの義を祝ふてする事なら。心も形もそのとふりに。義を守り勤めたがよい。或發句に

元日やまたうか〳〵の始かな

面白い事じや。口ばかりで祝ふても。またうか〳〵のはじめかな。骸と着物ばかりが正月で。腹の中には何がほしい。かゞほしい。どうしたいこうしたいと。災ひのかず〳〵が殖るばつかり。又松は千と世の齡ひといふに。可愛そうに。松のやゝ子を引ぬいて。門口の柱へ釘で打付け。千とせのことぶき。御目出たい。松に成て見たがよい。松のはりつけじやが。あやかりでよいものか。皆死にとむないばつかりの御病氣じや。正月の儀式といふは大切な事そうな。或人のはなしに正月の式は大體神代のむかしを尊て。清淨潔白に身を愼しみ。正直質素の風義を學ぶのじやと有。その樣な事は棚へ上げて置て。そろ〳〵正月前からホン〳〵し

かける。今年の御禮には何をせにやならぬ。あわてかける。別而女中方など盆正月の御禮の衣裳で。氣違ひにならしやるのがある。且那殿も浮されて。いつ幾日が節で。日待の料理は何々。いつ頃が藪入りで。芝居行きの遊山のと。おごりとのらに氣をもんで。丁稚も手代も女子衆も。家内諸とも打つれて○またうか〳〵のはじめかな。あつたら事じや。それをきのどくに思し召て。一休和尚目を覺してやらんと。元日に大慈大悲の舍利頭。竹の先きに付て。京洛中の家々へ門口から。御用心〳〵肉氣なき此しやりこうべあなかしこ。これより外に目出度はなし。此通りじや誠に有難ひ御示じや。人は惡念妄想を去れば。此しやりこうべの如く。清淨にして。少しの穢れ不淨もなく。是ほど目出度人の道はないに凡夫は此心をしちずたゞ今日の名聞利欲にふけり。おごり高ぶりて何がほしいかゞほしいと。惡念の增長するを樂しみと思ふてゐるは。去りとては不便千萬な事じや。今日いかめかしくよそほひかざる其すがたは。

是此しやりこうべが衣裳をかけてゐるやうなものじやが何を目當に其やうにうろたへまわるぞ早ふ其心を明らめて。ホン〳〵を止めよとの御異見じやけれど。凡夫は心を明らめる事とはしらず。たゞしやりこうべが氣にかゝり。あた忌々しい氣違ひ坊主が來たといふて家々に門をしめたといふ事じや。其例によつて正月に表をしめると申ます此とき蜷川の新左衛門衣服を改め上下を着て一休を請招し其しやりこうべと盃した死を極めたほど目出度事はない。此露の身を能ウ覺悟したものじや。侍などは別て此死を極めて置ねばならぬ事じや或國に主君の怨を報はんとその家臣打寄りて始め制約したは人數二百八十余人とやら。それがだん〳〵千べりしてやう〳〵四十七人が。の擧れ。人と生れて人の道を勤る此やうな目出度事はない。此死を極めて置ぬゆへ目が明くと何がほしいかざほしいと。うろたへまわる。『はかなくも消るを露と思ふなよどんなものでも死で行也』

死んだはどんなものじや。ちやうど寢たやうなものじや寢た時何んぞ覺へてゐるか。何にもしらぬ。天地と一體といふも起きてゐるときの推慮じや。寢た時は何んにも覺へてはゐぬ。どんなものでも消てゐるなり夜るの八ツ時分には釋迦も。孔子も。熊坂長範も銘々共も乞食も穢多も猫も犬も猿も鹿も丸で虛空じや。消たと同じものじや。寢たときは三千世界が丸で虛空じや。是は乞食の消た虛空じやのと。別に虛空に塀切りはない平等一枚乞食の讀だ歌に

『寢る間のみ人にかわらぬ思ひ出をうき世に返す曉のかね』

夜が明ると今日がかりの世。見たり聞たり皆天地のかりものゝじやによつてかりの世永ひ末來とは心の事じや心は天地あらん限りの活通しで。いなり街道じや扨是までは骸の事是からが心の事じや或人問て曰く。三世とは如何。平を一ッ打。此内にあり得するや看々。三世とは此骸に對しての名なり。心に三世はない故に不可得なり。不可

得とは思案分別で合點する事はならぬといふ事じや。けれども是を小割して見れば。眼前に今といふものがあるゆへに三世といふ名が出來たものじや。手をうたぬ先きは未來。手を打た所は現世。打た跡は音が過ぎ去たゆへ過去といふ。三世ともにどこにあるぞ。過去も未來もたゞ今ばかり此今を會得するを本心を知ると云ふ。此今の外に何が有ぞ

『あすの事きのふの事に渡らずとたゞ今橋をわたれ世の人』

即今の今から見れば。先ほどの五ツ時分は過ぎ去て過去。五ツ時分の心今いづ方に有ぞ。故に過去心も不可得なり。後の七ツ時分は今からはいまだ來らず。明日も未來明年未來。未來とはどこに有ぞ故に未來の心も不可得なり。現在といふは即今見たり聞たりするばつかり。此外に何んぞ今らしいものが有るか。目といふも鼻といふも。言ふたばかりで直に消て仕廻ふ。夢まぼろしの如し。何んにも會得するものはない。たゞ見るも聞くも。一切萬物悉く影ぼうし。見たといふても出る所もなく。入る所もなし。聞くといへども取る事も捨る事もならぬ此ゆへに現在の心も不可得なり此今が取らへらるゝものじやない。前に在ルカトスレハ忽焉トシテ後に在り

『いなづまの影に先きだつ身をしらば今見る我に逢ふ事もなし』

今見る我はどふも取らへられぬ。見るも聞くも夢まぼろしなれど心は常住にして延びちゞみなし。法華に彼久遠を見れば猶今日の如しとは。何事じや。則心の事じや即今の。今見る我は。影もないものなれど今赤ひと見たもきのふ赤と見たも跡月赤と見たも去年赤と見たも十年跡に赤ひと見たも赤ひと見たにかわりはない。赤ひものを白いと見違へた事もない。是が本心に延びちゞみ大小長短のない事を彼久遠猶今日と云。いにしへも今もかわらぬ心なれどもどふも。つかまへ所もなくたゞ明らかなものと。知つたばかりで。此外にどふも。仕やうはない。さるによつ。心には生ずるといふ事もなく。また死するといふ事もなく。ま

た煩ふといふ事もなく。又年の寄るといふ事もなく。譬て見れば鏡にか
げ形はなけれども。たゞ明らかに移るばつかりで是が鏡の徳で。また心
に影もかたちもなけれども明らかに移るが本心の徳往古今來。此明らか
さにかわる事はない。此所は釋迦も孔子も熊坂長範も。又銘々共も同じ
事じや。天理におゐては少も私のない事をよく御明らめなされ。又も
のゝ音もその通りで太鼓はどん〳〵。鉦はぐあん〳〵。聖人賢人じやと
て。どん〳〵がぐわん〳〵とも聞へず。佛菩薩じやとて。ぐわん〳〵が
どん〳〵とも聞へぬ。どん〳〵ぐわん〳〵の外に何が有るぞ。此どんど
んぐわん〳〵の外には釋迦もなく孔子もなく天地もないぞ。といふと正
直な人は夫なら本心といふは。どんぐわん〳〵ぐわん〳〵の外に思案分別は入
らぬものじや。などゝはや一人前の思案分別をかためるが否さに。古人
是を誡しめて。ぐわん〳〵どん〳〵なるも更にあたらずと。しかり玉ふ
此やうに小むつかしい言はひでも大事ない事じや。先きほどもきのふも

去年も十年跡も千年萬年跡も過ぎ去たは過去といふ後ほども。明日も。
來年も。十年さきも。千萬年先きも。いまだ來らぬゆへ未來といふ。そ
ふ見れば年といふも過去未來月といふも過去未來日といふも過去未來時
刻といふも過去未來で。ことばつかりで一切が皆影ぼうし。ちよふど
水に畫を書が如く。かゞみに色相の移る如く。向へは移り。去ればとゞ
むる影もなし。此故に三世不可得といふ。夫なら何もないものかと思へ
ば眼前赤ひと見。あついと知り。つめたいと知る。是何ものぞ。古今來
替らぬ照々明々歷々たる物あり是を名付けて古の明德とも本來の面目と
も主人公とも本心とも。天とも。妙とも。名はたんと付てあるけれど。
皆心の異名じや。名は跡で覺へたがよい。急に入用は心の事じや。心は
影形もなく色香もなきゆへホン〳〵もなくハアスウもなく。何がほしい
かゞほしいもなく何をいふも金の事もなく地獄にこそ金の沙汰はあれ。
極樂には金の沙汰は入らぬ往古今來生き通しの變化ゆへ。佛家で無量壽

佛といふ。儒道では天といふ皆心の事じや。心の外に一切の書物。一切の經々に用事はない。三千世界の一切萬物。皆此天を心としてゐながら天をしらずにゐる事は。魚は水を心として。水を呑だり吐たりして生きてゐながら水を心とはしらぬ。けれど水を離れて生きてゐる事はならぬ人は天を心として。天を呑だり吐たりしてゐながら天をしらぬ。天といへばあたまの上の青ひ所とばつかり思ふてゐる。アノ青ひは限りのない色じや。則仁の色とも云ふ遠ひ所から此方を見ると青ひ。此方も青ひ中に這入てゐるけれど青ひは見へぬ。此やうにいふても合點の惡ひ人は天といへば此上に。まだ世界が有て。二階住居の有るやうに思ふてゐる此上には何にもない。日月星辰といへども何にもない虛空の天を行道なさるばつかりじや。是は混天機といふものを見ると日月の行道までが殘らず知れる。扨一切萬物人間禽獸草木まで。皆此天を心としてちう〳〵かわ〳〵。出る息引息ばつかりのかね合にてずつぶり。天につゝまれて

此やうに動きはたらく事。たとへば大海で魚のあそんでゐるやうなものじや此やうにしてゐるは大海の中へ籠を幾つも並らべて。其籠に權兵衛の太郎兵衛のお源のおしなのと名を付て。並らんでゐるやうなものじやソコデ人の腹の中も天。腹の外も同じ天なれど。腹の中の天は性と名付けてある。是は少と様子のある事なれば其わけは跡で知れる。それでマア性といふて居れど同じ天に違ひはない。けれども通用が性といふ。やつぱり心の事じや。此心を知れば性を知れば性を知れば天を知る。夫で天が心といふ事が能ヲ合點が行。扨此一切萬物が虛空天を心として雀はちう〳〵鳥はかあ〳〵。あんまり奇妙なものゆへ。又妙法とも實相ともいふ。實相といふは雀はすゞめで。すゞめでかあ〳〵が眞實の相。此眞相にうそはない。ちう〳〵いふものは法。ちう〳〵いわすものば妙なり。柿木に柿の出來るは法。柿を出來すは妙なり。一天四海皆歸妙法といふて妙を知らしてあるけれど。何んぼでも

此妙に氣が付ぬちつと不審打て御らうじませ。車はどこが車じやぞ。輪か輪建か輻か轂か輞か軫か長柄か榻か。何もかも一ツ〳〵離して見ればことぐ〳〵く皆名がある。どこが車じや考へて御らうじませ。眞木と車の穴との間に少しばがり寛ぎのある所へ。天が通ふて車の用を勤めてござる。是で天の御たすけの滿々てある事を御合點なされませ。あれがすき間なしに横槌のやうなものなら引ずりてあるかにやならぬ。それでは大體大驕なものじやない。天の御通行がないと皆横槌引ずり廻りてゐる。見とむないものじや。ちと嗜んだがよい。扨車のうごくは車の用。車をうごかすは車の躰用一致にして車の名あり。御まへの御名は源兵衛さま。どこが源兵衛じや目が源兵衛か。鼻が源兵衛か。耳か。口か。舌か歯か。手か足か脊中か腹か臍か尻か但し小便する御道具か。陰嚢か骸の皮か肉か骨か五臓か百尋か腹腸か皆それ〳〵に名がある。夫を一ツ〳〵除て見れば。源兵衛はどこにあるぞおれが〳〵。おれが源兵衛はどこ

じやな。此所を能ウ合點せうぞへ。大切な事じや。此何んにもない虚空の不可思議天の妙體から。形地をこしらへて。使ふてござるが妙。うごいてゐるが法。源兵衛がものいふは法。源兵衛にものいわすは妙なり。妙法一致にして天地眞實の相。是を法華に如レ是相如レ是性如レ是體如レ是力如レ是作因緣果報如レ是本末究竟等トアリ。斯の如く天地實相の此骸をおれがのじやくと。うそばつかりいふてござる。去によつて妙を離れといふて君子はこれを氣違ひじやといふて法もなく。法をはなれた妙もなし。妙法一相にして實相の名あり目は目の妙法で物を見る。耳は耳の妙法で音を聞く。鼻は鼻の妙法で香を嗅ぐ。舌は舌の妙法で味ひを知る。見るの聞くの嗅ぐの味ふの。知るのと所々で名はかわるやうなれど。難波のあしは伊勢の濱荻。ものゝ名も所によりて名の替りはあれど。一ツの心が觀るのじやによつて。聞て見や。言ふて見や。喰ふて見や。味ふて見や。嗅ひで見や。なでゝ見や。

いろふて見や。知りて見やと目で見るばかりが見るでもない。たつた一ツの天の心で一切世の音を観じ見るのじや。火事のとき太鼓がどん〳〵目も鼻も知らぬに耳が一番に見る。どん〳〵火事じや。夫から屋根へ上ると遠ひ近ひと目が見る。其時に耳はない休じや。耳は消てゐる。また目や耳で知れぬ事がある。肴のよしあし。是も大きにわるひは。目のいろでも知れるけれど。よいか。わるひかといふやうな肴は知れ憎ひ。其時鼻が嗅で見て。コリヤいけませぬ又何やら紙古くさひと鼻が見る。夫からさわひで目がきよろ〳〵めつさうな火燵に足袋が。くばつてあると目が見る。晴がりでもあまいからひは舌が見る。皆實相のはたらき心は妙なり。骸は法なり。心は天で目に見へぬけれど。法はからだの中に備りてある法は道じや。五本の指でも親指は親ゆびの妙法。小指は小ゆびの妙法。うごくは法。うごかすは妙。親指は親指の通りするが親ゆびの道小指は小ゆびの通りするが小ゆびの道。何んにもしらぬちいさい子でもアレのゝさんと親指つき出す子もない。何んぼ親ゆびでも。人ざし指の道は勤まらぬ。人さしゆびは人さし指の通り勤むるが人さし指の道。乞食ばゝの死しなでも南無あみだ佛といふて。にぎり拳出すものでもない夫々に備りた道の通り。法の通り斗する事ならぬ。もし小指が親ゆびのまねしたり。紅さしが高々ゆびのまねすると道に背ゆへ。五本の指がもがつき出すと家内大さわぎ。源平の大合戰も其道々に背たゆへ。諸々方々がもがついたのじや。一軒の内の納らぬも。夫々の道に背くゆへじや旦那は旦那の道がある御家様は御家様の道がある息子殿は息子殿の道丁稚は丁稚の道。其道々が間違ふと家内が。もがつく難義なものじや。夫といふが。みな別〳〵に心を持合してゐるゆへ目が覺めぬ。治郎兵衛は治郎兵衛の心。お源は。おげんの心と。銘々巾着に錢でも入て。さげてゐるやうに思ふてゐる。あんまりあさとひ。天地貫ひて一體の心といふ事しらずにゐる。三界唯一心とは何をいふたものぞ。文字は讀んだけ

れど何んな事やら合點が行ぬ。ゆかぬ筈じや皆別〳〵に心をこしらへてゐる御かげじや。腹の中に火の玉を手細工に建立して。何んのかの〳〵と小理屈いふてゐるのじや。先此火の玉のこしらへ始めを。能ふ吟味して御らうじませうまれた。時は何にもしらず。心が有るとも火の玉が心じやとも。何ともかとも思ふてゐやせぬ。天上天下唯我獨尊。天地と倶に寢越して。其折々の心ばつかり。天の心で育て上られ次第〳〵に成人するほど。見たり。聞たり。飛んだりはねたり。自由自在が出來るものゆへあんまり。甘過てツイうろたへ。出したものじや。此やうに動きはたらく。自由自在の出來る此骸は。おれがものでで。おれがでにするのじやと迷ひかけて。夫から天と別〳〵に世帶するゆへ。だん〳〵貧乏人と成り。何がほしいかゞほしい。何を言ふも金の事じや。金がなければどうもならぬと。不足ばつかり。我慢はいよ〳〵增長して。どふが濟ぬ。斯が聞へぬ。どうも此事ばつかりは。言はねばおれが此胸が。徹ら

れぬと氣を妄揺。其こたへられぬ胸の中の願主は。誰じやぞ。能ふ吟味して見たがよい。たゞ此出る息引息に。動もならぬと思ふばつかりの胸の中は。偏徹もなき。あばら骨かなじや。けれど是が思ひ付た僻といふもので。どふも仕やうのないものじや。夫で何となと。かとなと思ふてゐねば心惡ひ。其僻付た。もやく〳〵を引摧りて仕廻ふ神佛聖人の御教。何にもむつかしい事は入らぬ。我心を知るばつかり。一切經一切の書物も。皆明德を明らかにする。我心の所書じや。世間に書を讀人もたんとあれど。大方文字の沙汰ばかりで。肝心の心の沙汰をするものがない。此方の學文は文字しらいでも心安ふ出來る。心學と云て。心をまなぶのじや。學とは眞似ぶといふ事で聖人君子の御心を。及ばずながら。銘々どもの心に移して眞似るゆへ學といふ。我腹の中を誠にする心の吟味じや。おのれを責るが學文の大意。其己を責るとは。我心に立歸るばつかり。立歸りて見れば善惡の沙汰もなく。又文字の沙汰もない。上天之載

は聲もなく臭もなし。至れる哉。此至れるかなとは心の事じや。心は天地に滿々たれども。影も形もないものなるが。何を便りに此やうに。見たり聞たりしてゐるぞ。此所を能ウ考て御らうじませ。何にも外の事じやない。思案分別止にして。唯此まゝに。どふ見ても裏表なきこの心。來らず去らぬ面影の。君に引れて萬代や經んと。一休和尚も此面影には大きに戀煩ひをなされた。其筈じや此世有らん限りの無量壽と。契りを御結びなされたのじや。どなたも御合點かな。ソコデ蜷川新右衞門の末期に。引導渡してやらんと仰られれば。新右衞門むつくと起き。ひとり來て。ひとり歸るも我なるに。道教んといふぞおかしき。一休の返歌に。ひとり來て。ひとり歸るも迷ひなり。來らず去らぬ道を教へんと。爰が生死一大事の因緣大切な所じや。此を能ウ合點せにや。一休の辭世も聞へ憎ひ。死にはせぬよそへは行ぬこゝにゐる。たづねはするな。のはいはぬぞ。焉とは。どこじやぞ。來らず去らぬ。コレ此目に見へぬ

虛空の天じや。有難ひ所じや。一切こゝから助けぬいてござる。此茶椀も形地は土內外の虛空は天。此虛空の天が入用じや。此茶椀も形地ばかりで。ずん切りて千木のおもり見るやうなものなし。茶椀の用は勤まらぬ。內がくぼみて虛空の天があればこそ。茶を汲で茶椀の用を勤める。人も茶椀に助けられて用を調ふ。そうないと熱ひ茶が手にすくふて飮るものじやない。人は片意地な所もあれど茶椀は素直にあい〳〵と。日がな一日茶椀の道を勤めぬいてゐる。そのかわり夜分になれば。茶棚でぐう〳〵。ねつから滯りはない。うまいものじや。其時は茶椀といふ名もわすれ果てゐる。夫でも夜分火事か何ぞのときには。また起てはい〳〵いふて。かけまはるれど。腹も立チヤせぬその時茶椀の形地は破るけれど茶椀といふ名はひゞきも入らぬそこで茶椀の辭世に

『今破るよそへは行ぬこゝにゐる尋ねはするな御茶は呑れぬ』

来らず。去らぬ。こゝの所を茶碗めが能ウ合點したものじや。又燈し火も同じ事じや。明ウ燈りてある間は。ともし火のかりの世此火が消れば本の暗やみ。夫で燈火の辭世に。今消るよそへはゆかぬこゝにゐる尋ねはするなあかうはないぞ。古歌に

『ともし火の消ていづくへ行やらんくらきはもとの住家なりけり』

暗ひは。くらがりの心で則天。あかひは火の心で則天。心に影形もなく明暗もなく。無聲無臭といふこゝろはどのやうなものぞ。御工夫なさりませ。此やうにいふても遠慮深い御方は。其やうに。心安う性を知るの。心を知るのといふけれど。昔は人も上根に有たゆへ。工夫に工夫を徹し。明徳を明らめた人も有ふけれど。今は末世末代人の根氣も薄ふなつて中々我々如きが。性を知るの。來ませぬと。めつたに辭義する人があるものじやが。こゝを能ウ考て。御らうじませ。昔も今も。心にかわりのない事を。たとへて。聞しませう今爰へ燭臺に。蠟燭千挺ほど立ならべて。まづ一丁に。火を燈し。其蠟燭の火をだん〳〵と。次ぎの蠟燭へ移して廻るに。始めともした。蠟燭の火は昔とし。段々と跡で燈た火を今の世として。見るに明さに少しも違ひはない。是は去年の火で古ふて暗らく。是は今年の新米火で格別明りがつよいといふやうなこともない。といふてもまだ名や。形に迷ふて。夫でも火と人とは違ふと言ふてござるけれど。こゝを能ウ合點したがよい。火と人とは形地に違ひはあれど。火のあかひは火の心人の心の動くは人の心心は則天。天に二ツはない。此やうにわたし一人が言わけせいでも大事ない事じや。法華に十方佛土中唯有一乘法無二亦無三といふてあるは。心の事じや。佛さまに。うそはない。皆銘々どもの本心を明らめさそうばつかりにいふてある。慥な御證文じや。又佛さまが否なら。儒道に子曰參哉吾道以一貫之其外種々無量の書物數も限らぬ事なれば私は文盲なゆへ文字の事は甚不得手。あなた方で。能ウ吟味して

御らうじませ。すべて一切の經々一切の書物。心を知るの外に用事はない。そのまた知る心といふは。どのよふに知るのなれば。我心におれが見る。おれが聞く。おれがする。と思ふ其思惑のない事を知るのじや古歌に

『ほと〳〵ぎす啼つるかたを詠むれば　有明の月ぞ殘れり』

此たゞにさへ成たら。月ばつかり殘りて。有ぞ。此月は誰が見てゐるぞ月では遠ひ。最少と近ふして上ケませう。サア此扇は誰が見てゐるぞ。おれが〳〵の分別を山ほどこしらへて見ても。扇はあふぎ。又思案分別を止にして見ても。やつぱり扇じや。是でおれが〳〵の分別をするだけが。無益の費といふ事を能ウ御得心なさりませ。夫じやによつて。此おれが〳〵をさつぱりと除て。サア此扇は誰が見てゐるぞ。やつぱりおれが見てゐるでは役に立ぬ。何と能ウ染込だものじやないか。此おれがおれがの。天地の間尺にあわぬ事を。私も自得した事がござります。序に御

はなしいたしませう。近頃夏の事で御ざりましたが。其時の大暑。怪しからぬ事。きのふにまさるけふの暑さ。チト熱りを涼さんと裏へ出。堀溜りの水邊に。床几のあるを幸ひと。しばらく涼敷の御恵みに。暑さを忘れて居りました。時に床几の上へ。溝虫が一匹這ひあがり。何やら身を悶ると思へば。脊中に針のやうなものが出てある。見てゐる中に兩方へ分れ。羽根と成り。蜻蛉のやうなものに成て。いづくともなく。フウ〳〵飛んで行た。扨々ふしぎな。造化の御細工と感じ入る中に又一ツ疋這ひ上り。是も同じく脊中に羽根の形がある。其羽根を又兩方へ開かんと。身をもがけとも分れず。ソコデ私が了簡じや。どうぞ早ふはねを廣げてやらんと思ひ。紙入の楊枝を取出し。其羽根を分て遣たれば直に一間ほど飛び上ると見へしが。忽ち水中へ落入て死で仕舞ふた。何の入らざる世話の燒立。あなた任せに仕て置ばよい事を。此方に氣を急たばつかりで。無益の殺生いたしました。是で一切を考て御らじませ。皆我人

ともに時節の來るを待かねて。氣を急て無理するゆへ中途で敷尻て仕舞ふが多ひ又世間の聟取り嫁取りの取結びなどは別して大切な事じやぞ容體の能ひのや。身上のよいのを期にしておれが〳〵が手傳ふて一生を過事が有ものじや。女中方。初産の時など。かならず氣を急ものじやないぞ。心靜て時節の來るを。じつと待てゐるのじや。双すると腹の中と。外の氣と。合體するゆへ。心安ふ安産する。女中方は別して大事じや程に能ウ心得て居やうぞへ。又雪隱へ往た時も同じ事じや。無理に氣張るものじやない。あなた次第にしてゐると。心能ふ御安産なさる。在郷の子供が子守歌に。利功ぶるのは短氣と損氣。あほが身を持世を過すと謠ふてゐる。何と面白ひ事じやござりませぬか。阿法とは阿字の法に隨ふてゐるのじや。おれが〳〵のかしこは入らぬ。あなた任せにしてゐると。自然と身に幸福を得るといふ事じや。又主人に奉公する衆など。取わけ氣を急ものじやないぞ。たゞ〳〵あい〳〵と素直に。御主人任せ

にしてさへ居れば。仕廻ひは天地合身が俯る。夫を皆が氣を急て。中途で暇取り女房穿作。跡へも先へも往がたし。一生うろたへ難義の仕通し其外心中身なげ首〳〵。分散欠落行方しれず。物狂ひも狐つきも。皆おれが〳〵どの〳御手傳なされた御かげじや。一生身の災ひとなる。おれが〳〵のかゝり人に。早ふ暇遣つて御仕廻ひなされて。どふぞ我なしの本心を御明らめなさると。誠に天道次第あなた任せで助りぬいてゐる此身。天の與ふる樂しみは實に面白き有さまかな。生涯を有難ひ〳〵で御暮しなさる事でござります。此やうな果報ものがどこにあるもので。能う算用して御らうじませ

二編

道須臾も離べからず。離べきは道にあらず。此道々〳〵といふてあるが。何ぞ道らしいものが有か。道は朝から晩まで顯れ切て有けれど。心學の力がないとねつから見へぬ。道は上下に明かなり誰が起しもせぬけれど。夜があけると。ちう〳〵かあ〳〵。すゞめは雀の道。からすは烏の道。犬はいぬの道。猫はねこの道。鮒はふなの道。鰯はいわしの道。鯉は鯉の道。鮫は鮫の道。少しも道に違ふものはない。其外非常の草木に至るまで。柿の木は柿の木の道。栗の木は栗の木の道。柳はみどり花は紅牛おのれ〳〵が道の通りを勤め行ふて。少しも道に背くものはない。萬物一躰道の外に教もなく教の外に道もなし。人には人の道が有て五倫五常の外に人はない。そも〳〵母の胎内に。一滴の水がやどるや否や。道はしやんと備り切てあるけれど。かなしい事じや

「生れ子が次第〳〵に知恵すぎて佛に遠くなるぞかなしきじや。ちいさい時には。と〻様か〻様〳〵といふて付慕ひ。と〻様か〻さまがちつとの間でも見へぬとおろ〳〵して尋ね廻た。其筈じや。父母の外に心はないで。父母ばつかりじや。是は生れぬ先きから。天地自然のはへぬきといふもので。則是が道じや。夫が次第〳〵智恵づきて佛に遠くなるぞかなしきとは。其はへ貫きの道をはなれるゆへ。鬼となるこそ恐しけれ。其道に離るゝはどふしたものなれば。たゞ物事に執着するのじや。放心とは向ふへきよろりとこころを取放して。此方は御留守。夫ゆへ見るに取られ。聞に取られ。目が明くと何がほしいかゞほしいと。見るものさわるものに取られ切てゐるじやによつて。道は暫もはなるべからず。離べきは道にあらず。道とは何んぞ心の事じや。神道と言ふも心の事。佛道といふも。儒道といふも。心の事じや。儒道では放心といふ。佛家では迷ひといふ。放心といふよ

り。迷ひといふが子供衆や。女中方の耳なれてござるゆへ。迷ひといふが知れよい。扨此教といふは何んにも外の事ではない。此迷ひといふ事があるゆへに。聖人佛が此教を御立なされたものじや。此教じやとて神佛聖人の御作でもない。天地自然の道には迷ひといふ事のない事を御知りなされて。其道理を御教なさるのじや。迷はねば教は入らぬ。一切萬物畜類鳥類草木に至るまで。天より請得たる通りの道を勤め行ふてゐるゆへ。迷ひはない。たゞ氣の毒なものは人じや。それ〳〵の道を往ばよいけれど道もない所へ往ふとするゆへ。とつけもない事が出來る本途の道を行けば怪我はないに。磯道やいばらがきで。往かれもせぬ所へ無理に往ふとする。堀も淵もあるけれど其難所が目にかゝらぬ。危ひ事の天上じや誰でも知れた事の様に思ふてゐるけれど。知れぬじやて。知れぬ證據をいふて聞しませう。わしは今年の何月幾日に。死ぬるといふ事知つたものひとりもない。わしは今年の何月幾日に分散する。何月幾日に

逃落する身投する。首くゝる心中するといふ事知つた者一人も有りやせまい。知らにやこそ毎年〳〵色々さま〴〵の事が出來るじやないか。皆うか〳〵して覺悟がない故じや。君子は此覺悟をなさるゆへ。日々に新に競々。こわし〳〵の御愼が厚ひゆへ怪我がない。此怪我の本はといへば迷ひからじや。その迷ひをたとへて見れば。夏向き虻といふ虫が窓から。表からか。ついと這入て座敷の障子でポン〳〵と道もない所へ往ふとする。ポン〳〵いわしてゐる。明ひゆへ向ふへゆかれるかと思ふて。ポン〳〵と道もない所へ往ふとする。立歸れば何んの事はないに。其立歸る事を知らぬじや。聖人の教へは此立歸る事ばつかり。去年も江戸で十一才になる子が。前訓を聞て此立歸る事を知た子がある。其子が何心なう遊んでゐたれば。駕かきがはいはいゐうて窺かいて來る。其子何んにもしらずに居たれば。駕擔が息杖で子の脊中をしたゝかたゝいた。其子大きに腹が立たれど。イヤ〳〵〳〵發が。前訓で聞た。堪忍の所じやと。じつと忍らへ身に立歸りて見たれ

ば何んの事はない。腹立が止だ。夫から内へ戻りて。親御様に其立歸つた事を御はなし有たれば。親御様は大きによろこんで。全く前訓の御蔭でかやう〳〵と。人々にも風聽して悦んでござつた。其子一生災難の種は消て仕廻ふたといふて。私も悦びました。一切の事が立歸りて見れば。向ふに惡ひ事はない

「我よきに人に惡きがあるものか人のあしきは我あしきなり皆我身に立歸らぬゆへ主を恨み親をうらみ。終には家を失ひ身を亡す大事の事じや。皆銘々身に歸り見て腹の中に覺があらば。懺悔をなされませ。親ある人ならば。親のまへへ手をつかへ。主人ある御方ならば。主人の前へ手をつかへ。わたくしはかやう〳〵に存じ居りまして。御恨み申ました。どうぞ御了簡なし下されませとざんげして。御詫なされませ。懺悔の功德は無始の罪業消滅すると。佛様の御說き置れたにうそのない事じやほどに。身に歸り見て御詫なされませ。身に惡業さへなくば悔懺

は入らぬ事なれど惡業なしの人といふもないものじや。朝から晩まで見ると聞くと二ツから始る。五塵の內でも見聞の二ツを深く戒て有る目と耳とからホン〳〵が起る。能寢た時はホン〳〵はない。寐た時どこにホン〳〵が有るぞ。寐た時は丸で佛様じや。盜人が這入ツて何やかや。引擔て去におるけれどもしらんかして見ぬ顏してござる。有難ひ事じやぞへ。無心無念の本躰じや。とつくりと拜でござうじませ。此時は三千世界もなく。天地もない實相無漏の大海じや。乞食の讀だ歌に

「寐る間のみ人にかわらぬ思ひ出をうき世にかへす曉の鐘

寐た時何が有ぞ釋迦も孔子もない。能ばつかり。十萬石も百萬石もない。玉樓金殿もない。熊坂長範もない。犬も猫もくう〳〵藥やも。穢多も乞食も。くう〳〵は同なし。金銀財寶も。宮もある。或は親子とも寢てゐる。母親もあり。乳呑子もあり。外からは見ても。寢て居るものは何んにも知らぬ。物の見事に消てゐる少もおれが

〳〵はない。天地同根同性丸で我なし。虚空同躰此時始而知衆生本來成佛なる事を能ふ考て御らうじませ。是尊ふとき御姿じやぞへ。扨目が明くと。うき世にかへす曉の鐘。かねがごんと鳴ると直に今日の上が道じや。雀はすゞめの道。烏はからすの道。ちう〳〵かあ〳〵。柿の木に柿が出來。栗の木に栗が出來る此外に道はないぞ。神道といふも佛道といふも儒道といふも此事じや。觀見法界草木國土悉皆成佛と。天地の間に成佛せぬもの何がある。禽獸草木に至るまで悉皆成佛。各性命を正しうして。その分限に隨ひ君子其位に素して行ふ外を願ず。商賣があはぬといふて。春咲ずにいた梅もなく。米が高といふて顔しかめた。鷄もなく。節季に錢が足らぬといふて欠落した犬もない。難病平癒の爲に西國四國廻る狸もなければ。不仕合で從弟の親類尋ね廻りてかゝりに行蝮蛇もない。皆天命に隨ふて。分外を願ひ求めざるゆへ。一切世話入らず成佛せぬもの何がある。人ばつかりが成佛せずにゐる。此やうな情ない

事がどこにあるもので。實相無漏の大海に五塵六欲の風は吹ねども隨緣眞如の浪の立ぬ日もなしと目が明くと隨緣といふて。見るにつけ。聞につけ。何がほしいかゞほしいと迷ひ出す。哀しい事じや皆目が覺めぬゆへじやぞへ。此迷ひを立歸らそふばつかりの教へ立歸ると丸で道じや。立歸る事を知らぬゆへの教じや。佛家で火宅といふも。又八萬四千の地獄といふも此ハアスウ〳〵の事じやほしい。どふしたいこうしたい。春はどふせう秋はどふせう。子供の行末がどふなろう。何をいふも金の事じや。金がなければどふもならぬ。此事が。三年前に氣が付たら今の難儀はせぬものと。死だ子の年まで數へて跡へもホン〳〵。先へもホン〳〵。是を八萬四千の地獄といふ。極樂といふは。たつた一ツで助かるばつかり。立歸るばつかり。立歸りて見ると。むしろの上も。極樂世界。又立歸る事がないと。玉樓金殿も。ハアスウ〳〵苦しみ朝から晩まで八萬四千の地獄廻り。縮緬羽二重にま

かれて。結構な座敷で給仕さして御めしを喰ひながら。青ひ顔してわしがやうな因果なもの〳〵。皆ホン〳〵の過ぎたのじやぞ。虻めがあんまりホン〳〵して。ホン〳〵草臥にくたぶれて。後には仰向に成て。ぢり〳〵まいしてゐる。此等はまだよいのじや。今一段しきりが來ると。ハアスウ〳〵といふ柏子に。火の中へほいと飛び込で仕舞ふやけどせにや合點が行ぬ。愚人夏の虫飛で火に入る。火宅のくるしみ皆おのれが手に飛び込むのじや。こわひ事じや西行の歌に

「來て見ればこゝも火宅の內なるに何住よしと人のいふらん

明神樣の返歌によしあしと思ふ心をふり捨てたゞ何となく住ばすみよし此住よしとはどこの事じや外にはない。皆銘々の胸の中が住よし樣し親子兄弟夫婦もともに一家親類睦まじう家內和合住よしくらし。此住よし樣をしらぬかへ。たゞ何んのかのと互に口舌いひ合ふて住憎ひ火宅にしてゐる。勿躰ない事じやぞへ。もふよいかげんにホン〳〵して置たがよい

「鳴子をば己が羽風におどろきて心とさわぐ村雀かな

「傀儡師胸にかけたる人形箱佛出そふと鬼を出そふと

仕よい樂な事を嫌ふて。仕憎ひ苦るしい方を。たのしみと思ふて氣を張て勤めてゐるが。小人の常じや孟子曰不仁者可ニ與言一哉安ニ其ー危一而利ニ其菑一其ー亡樂ニ所ニ以亡一者一とあり是が小人の樂とする所是非もない事じや。皆災ひを利と思ふて我身亡す事を樂しみとしてゐる。是をたとへて見れば盜人めが家尻を切る時に。內の樣子を考へ。どうぞ目を明ねばよいがと。自身も惡いといふ事は能ふ知ッてゐるゆへ。ふるひ〳〵しをる。どふやらこうやら首尾能ふ切負せた。ヤレうれしやと悅ぶ是がこれ皆災ひを利として身を亡すゆゑんのものを樂しむといふものじや。扨夫から又そろ〳〵忍び入て。銀戶棚にかゝり錠の儼てあるをひぬくり廻し。どうぞ知れねば。よいが〳〵と震ひ〳〵是もとう〳〵壞放して。

ヤレ〳〵嬉しや〳〵。皆災ひを利とするのじや是から門へ持出すをどふぞ知れねばよいがと。差足扱足そろ〳〵表え首尾能ふ出たヤレ嬉しや。此時おのれが首のころりと落てあるもしらず。ヤレ〳〵うれしや〳〵と我身を亡すゆゑんのものを樂とするのじや。是が盜人ばかりの事じやないぞへ。高利を取てはヤレうれしや。疵物を首尾よう賣付けてはよしよし。人目を首尾能ふ掠てはヤレ嬉しや。向ふの難義は不構此方の勝手さへよければ先ッよし〳〵。すつき り災を利として。身を亡ゆゑんを樂しみとしてゐる。皆磯道や堀の中へはまるのじや。それを痛はしう思ふて。ヤレ立歸れソレ磯道じやソレはまるぞといふ神道佛道の教へ聖人君子も涙こぼして御世話なさる則是が教へじや聖人の教へは子孫長久の道より外はない。小人の目から見れば甚だ淋しい夫ゆへ此大道を往人がない歌に

「人多き人の中にも人ぞなき人になれ人人となせ人

君子の大道は行人がすくない兎角磯道や堀の方へは行人が多ひ其筈じや賑かで連が多ひ其又がけ道には。色々様々のものが並らべ立てある。先づ一番に。鍋燒具やきすつぽん汁。うまいものばつかりじや。その上美しいとふろう髮の藝子やら。舞子やら。わん〳〵どんどんと賑かにして呑や謠や一寸先きは暗の夜。わい〳〵の わいとさ。一向やくたい。一寸さき所じやない。丸で闇じや。ソコデ不忠不孝身投心中首くゝりと。段々直打の高ひ磯道へころり〳〵と落て行知れた事じやけれども皆此がけ道を好もしがる。皆ホン〳〵から起る其ホン〳〵のもとは見ると聞くとの二ツから。故に君子はその見ざる所を戒しめ愼しみ聞ざる所をおち恐る。此やうにいふと。芝居も見る事ならぬか。茶屋へも行事ならぬか自由な事じやない。君子の大道はおほやけにして。せばいのじやない。酒も飮だがよい遊所へも行がよい樂しみに行所にしたものじやもの其程

〳〵に樂しむがよい。それをくるしむが間違ひじや。皆此方の用ひやうが惡ひゆへじや。聖人の道は和するが道じや。和するといふは其分限を越ずして。ほどよふ〳〵執行ひ世界と中よしで暮すのじや。夫で常が大事じや。たゞ常を愼しみ恐るゝが肝要じや。皆能ふ云ふ事じや。ふつと出來心で大きな災難に逢ふたなど。出來心といふがどこに有もので。三界唯一心。天何言四時行百物成ト此心がついやちよつと。手細工に商賣には精出す。親達は養ふ。此外に數は入らぬ。別に聞事はない。是でよいと。我ばつかり合點して。ちやんと。貫木入てゐる人が有ものじや。是がどふもならぬで。孔子でも。釋迦でも是でよいといふ事はない。心の駒に手綱ゆるすな。戰々競々日々新亦日新なり。是でよいといふ

事はない。それに手綱なしの駒に乘りあるくゆへどこまで行ふもしれぬあぶない事じや。道は須臾も離るべからず。引留る手綱がないと。どのやうな事が出來もしれぬ。じやによつて。常に稽古しておかねばならぬ本心を知らぬと。可愛といふては取られ。憎ひといふては取られ。御衆は取わけ。此可愛といふに。取らるゝが多ひ。どこの國のものやら知りもせぬ人を大切にして。住吉へつれて參つたり。妙見山へ通し駕で連て參つたり。遊山船で花火燒て見せたり。其仕廻には勘當請たり。欠落したり心中したり。首くゝりしたり。是等はあんまり取られ過といふものじや。よつて心得ねばならぬ大事の事じや。何んぼ御歷々樣方でも此道がないと取られやすい。傾城とは城傾とやら云て。昔から何んぼも家國をかたむけられる。皆可愛に取られたり嬉しいに取られたり。憎ひといふては取られたり。北條時代の鹽治殿。ちつとのあいだの堪忍が出來なんだ。たばこ一ふく呑む間引留むる手綱がなかつた故。一家中はち

り〳〵ばら〳〵で難儀する。高で口論とて。口での言ひ合ひ。たとへ人中でどれほど地面かゝされたとて善惡邪正は天地に明らかな事じやに惜しい事じや。じやによつて。常が大事じや。常に大事を極めておかねばならぬ。銘々皆腹の中に心中も。身投も首くゝりもある。孔子も釋迦も骸のある間は。皆腹の中にある。夫ゆへ此出來心を靜る爲の敎じや。日々新に戰々競々戒しめ愼めこわし〳〵弘法大師の歌に

『法性の無漏路と聞けど我すめば有爲の浪風立ぬ日もなし
隨緣眞如の浪の立ぬ日もなしと。時々の因緣にふれて。ツイひよい〳〵と。出來心愼しまねばならぬ。大切な事じや。此前京に冬の事で有たが。夫の留主に。友達が遊びに來た。女房は何に心なふ。火燵で仕事してゐる。又友達も夫が留主なら。早ふ去ばよい。寒ひ事じやと。いゝつゝ上る女房もじだらく。夫が留主じやと。言へばよいに。火燵の火がよいちよか〳〵と出來心。こわひものじや。ほくちやの火なぶり。常に用心せにやならぬ。恐しい事じや。所へ夫が戻つて來た。扨それからが出刃庖丁ざんまい。切つたり突たり。丁內そうどう大きな事が出來心じや。始め友達が內を出る時。何んの氣もないけふは八兵衞の所へ往て間男して仕廻に出刃庖丁で突合せうと。思案して來たでもない。門口這入るまでもまだ。火燵へ當るまでも。其心はなかつたけれど。ツイ出來心。大事のものじやよつて。常を愼しまねばならぬ。皆安樂なからホン〳〵が起る。何がほしい。かゞほしいも。道がないゆへじや。道は結局不自由な所にあるものじや。甚だ貧窮な人の。今日の世渡りに追ひ廻されてせう

と御あたりなされといふ。友達もじだらくもの。ツイ火燵に當たものじや。是がこれ。兩方に立歸る心のないの。じだらくばつかりで。爰までは出來心もないが。彼火燵にあたりて。一ツ二ツ噺する內。ツイ手がさわり足がさわり。ちよつとふとも〳〵へ足の先きがさわるや否や。直にちよか〳〵と出來心。こわひものじや。ほくちやの火なぶり。常に用心せにやならぬ。恐しい事じや。所へ夫が戻つて來た。扨それからが出刃庖丁ざんまい。切つたり突たり。丁內そうどう大きな事が出來心じや。始め友達が內を出る時。何んの氣もないけふは八兵衞の所へ往て間男して仕廻に出刃庖丁で突合せうと。思案して來たでもない。門口這入るまでもまだ。火燵へ當るまでも。其心はなかつたけれど。ツイ出來心。大事のものじやよつて。常を愼しまねばならぬ。皆安樂なからホン〳〵が起る。何がほしい。かゞほしいも。道がないゆへじや。道は結局不自由な所にあるものじや。甚だ貧窮な人の。今日の世渡りに追ひ廻されてせう

事なしに。道を行てゐる人が有ものじや。年寄り親に女房子で家内五人
是を男の足一本で其日過ぎ。大根〳〵といふて。日がな一日賣りあるき。
日暮に戻りて草鞋もぬがす。是嗅見や先づ今日も二百文。扨々有難ひと
おしいたゞき。ソレ米買やれ是は薪代ソレ油ソレ味噌代と其々にちわり
て渡し。どふぞ明日も日和ならよいがと。夜食も喰ふて寐た所は極樂。
一日の草臥で夢も見ずぐう〳〵と寐た所は萬貫目持も莚の上も同じ事何
んにも。替つた事はない。扨目が明くと草鞋しめはき。今日も御日和樣
有難ひと。又荷を引かたげ大こん〳〵。何んぼよい普譜の家を見てもテ
モ結構な家〳〵と見たばつかり。此やうな家に暮したいとも思わず。大根〳〵
ねつから取られる氣遣ひげはない。又友達が向ふから來る。權兵衛どこ
へ友達が今日は休んで坊主めつれて開帳參りソリヤ。能ふ參りやる。參
つておじや。ヲイ〳〵早ふ仕廻や。うまいものじや。扨權兵衛は情出す
かして。坊主めにもさつぱりと着せてヲヽ出來した〳〵と思ふばかり。

さのみ浦山しいとも思はず。大根〳〵の外には何んにも願ひ望みはない
ねつから取られはせぬ。又どのやうな好色深ひ人でも。向ふから美しい
とふろう髪が來る。テモ美しいと見たばつかり。あれはどこの娘じやと
ねぢ向ひても見ぬ。大根〳〵と今日に追廻されて。ひつとつも取られる
事はない。きやうとひものじや。それがモウ下櫃に米が一ッぱいも有や
うにたると。モウ何がほしいかゞほしいあの島がよいの此着物ではゆか
れぬのと。ホン〳〵しかける。是じやによつて常が大事じや心得ねばな
らぬ。此常の有難ひ事。能ふ御合點なさりませ。或は腫物でも出來るか
時行病ひにくるしむ時はどのやうにいふぞ。どふぞ此痛すこし助つたら
何思ふぞい。ソレ常を願ふじやないか。どふぞ今一度本服さして下さり
ませ。此くるしみを助つたら何思ふぞい。皆常を願ふ。夫がちつと本服
してヤレ嬉しやといふがさいご。モウホン〳〵する。此前米が二百五十
文した時の事を思ふて御らうじませ。諸々方々の大騒動。やかましい事

で有た。米屋は米を賣らず。酒屋は酒を賣らず。諸商賣とも。しばらく商賣取引惣やすみ。その時は日本國中の人々が何を願ふたぞい。どふぞ今一度安ひ米喰ふて死にたいと木の芽や草の根まで尋廻りて。皆なきの涙可愛ひとり娘を賣て喰ふやら。諸道具をかぶるやら。あけても暮ても米の事ばかり常はものもいわぬ小便取りまでに申し作方はどふでござりますな〳〵とねんごろに。孫やつた在所の人が來たやうに。毎日〳〵深切にどふでござる。米の相場を一向しらぬ衆までが五穀成就〳〵の願ひより外はなかつた。是で常の有難ひ事能ふ御知りなさりませ。此時世界中の人が米の有難ひ事を知り。御冥加を思ふやうになると。天地の御機嫌が直り。秋作も能ふ出來米が安ふなると。扨々有難といふたばつかりで。モウ何がほしいかゞほしい。下櫃に米が一ぱいになると。此米は惡くさい臭がするの菜がないと。めしが喰へぬのと。ホン〳〵しかける早ふ忘れたものじや。施行の粥を貰いあるいた事はわすれて。耕ぢり

めんで髪結ふたり板しめの袖口を牛の舌のやうにによろ〳〵出して。ホン〳〵するはあんまりじや。是が女中の事ばかりじやない。世界中の人が天地の融通の御施行で今日まで命を繋で來た事をいつまでも忘れまいぞ。物覺へがなふて氣の毒じや。極樂好きの極樂嫌らひ。地獄嫌らいの地獄ずきといふものじや。何を呑したらよかろうぞ。序に御披露申ます。此間承りました。結構な妙藥でござります。是は何んぼもためして見た御方々がの墨をつけると奇妙になほります。毒虫に螫れたるに。烏賊ある烏賊を料理する時すみの袋の破れぬやうに出してもらひ糸でくゝりて。蔭干にして置く冬向干ひたらば。睡にてうるおし付ればよし。亦病犬に咬れたるにもよいといふ事でござります。今一ツ妙藥やけとのくすり。是は胡瓜をおろしてつければ。早速平癒す。是も久しく圍て置には胡瓜を小口切にして。盞茶碗の類に入てぐるりを張て。氣の脫ぬやうにして置けば。水になる。其水を付れば忽ち平癒すどなたも能ふ覺て置て

御披露なされて下さりませ。扨此火傷に付て火宅のはなし。序に御噺し申ませう

先ッ今日の有難ひ事一ッ〳〵身に立歸りて考て御らうじませ。一日ひもじいめ寒めしらず雨露にも濡ず暮すといふは大躰有難ひ事じやない。御代太平の御恩此上に何か有ぞ。此有難ひ事しらず目が明く〳〵と何がほしいかゞほしいと。ホン〳〵するは。皆やけどしてゐるのじや。そのやけどが積り〳〵て火宅の苦るしみじやによつて。日々のやけとの内に早ふ御直しなさるがよい。扨此噺しは前方實に有た事じやといふて。或知識に承りました。是は現在無間の業といふて。甚だ有難ひはなしでござります。下京邊に有たといふ事で御座ります。嫁と姑と中の悪ひの世間に何んぼも有事なれど。是はよつぽど珍らしい中の悪ひのじやといふて。子供はあり去にも去れず。居にもゐられず。くるしみ通し日々の業が積り〳〵てます〳〵中が悪ひ朝から晩まで双方からの責あい。夫ゆへ二三

日も親里へ去んで見ても。二人の子供がか〳〵様〳〵と跡をしとふて泣さけぶ。子ゆへの闇に責られ戻りて見れば。婆さまに責られ盆も正月も節句も亥の子も休みなし。互に責つ責られつ。七月の十六日でも亥の内は休みなしに火宅のくるしみ。死ぬにも死なれず。どふもこふも仕やうがないといふて。一二年の内に死にさうな婆様でもなし。世にいふ是が金槌婆様といふのじや。世間に親殺しの主殺のといふ事のあるは前世の敵同士の報ひのといふけれど。そのやうな事でもない。性は善也悪ひといふ事は誰も知つてゐるけれど。互に立歸る事が出來ぬのじや。夫ゆへ腹の中に日々〳〵塵埃が積り〳〵てのハアスウ〳〵。其所を佛様は因縁とも因果ともいゝ。聖人は天命といふて恐れてござる。みな善悪ともに因縁に寄といふて。腹の中からおいで〳〵してまねき寄たのじや。是じやによつて悪ひものには付合ぬやう。随分心を清淨にして日々に新に戰々競々と恐れ愼むが子孫長久の御祈禱じや。扨此嫁は去ぬにも去なれず死

ぬにも死なれず。どうもこうも。仕様のないやうに成て來たソコデこわひものじや。婆さまを殺して仕廻ふ氣に成た。ばゞ樣殺せば親子四人が助かる事と心を極めた恐しいものじやないか。飼畜犬に手を喰はるゝとは此事。臣其君を弑し子其親を殺すといふも一朝一夕の事にあらず。くるしみに苦しみを重ね迷ひにまよひを重ね。無間地獄の底に落入ては壁の中へ塗込れたやうなもので跡へも先きへも行がたし是人の事じやないぞへ嫁姑ばかりの事じやないぞへ皆銘々腹の中にある事じや。ホン〳〵が過ると色々樣々の事が出來る。欠落分散心中身投首くゝり。皆ふいふいと出來心大事の事じや。心中する人の在所とて別に一村あるものでもない。盜人の生ずる國とて盜人ばつかり仕込でゐる。國も有ものじやない。皆銘々腹の中ちつとか。やつとか。持合せがある日々に新に愼しみがないと。ツイふい〳〵と出來心によつて常々心得ねばならぬ。嗜まねばならぬ。人の無ひ所へ這入ればどうやらに。小氣味がわるひ。是は業

の持合のないものじや。夫も腹の中に少しでも業の持合があると。よい所へ來たと思ふ大事の事じや。今の間男殿も其通り夫の留主の所へ往たら。ツイ戻ればよい。女房もじだらく。つたばつかりで。命仕廻ふた。是が無間地獄の釜こげといふて犬も喰やせぬ。あつたら事じや互に業の積り〳〵ての事じや。嫁が姑を殺す氣に成たも。はじめわづかな事からじや。不返事が火宅のはじまり「よしの川其水上を尋れば葎の雫萩のしたの露はじめは纔の露しづくから。後には船さしても渡られぬ大川となるこわひ事じや嫁は一途にどふぞ知らぬやうにして。殺したいものと。色々工夫して念比な醫者殿の所へ往て。どうぞ私に毒藥を下さりませ醫者どの聞て夫は大切な事じやが。マア何にさつしやるぞ。ソコデ彼嫁がかやう〳〵と一部始終のわけを。打明しお恥しい事ながら。親子四人が助かる事でござります。どふぞ御慈悲に毒藥を下さりませといふ。醫者殿

も吐嗽つき。夫はきのどくな事じやと。漸く思案し成程心得ました。いかにも毒薬進せませうが。然しわしがいふ事能ふ聞しやれ。天命の生ある人を私事の恨を以て殺す時は。そのかわりにそなたの身に報ふて子供が死るかこなたが氣違ひになるかせにやならぬ夫も氣の毒じやによつて三十日があいだこなたが行をせにやならぬが合點か。夫もむつかしい事じやない。たゞ婆樣に一ト言も口答へする事ならぬたとへまた逆さまな無理を言はしやつてもたゞあい〳〵と素直にして。ちよつとでも腹立さす事ならぬ。此三十日の内にこなた一生の孝行を取越て勤めねばならぬ夫が出來よふかハイ〳〵イヤモウばゝ樣さへ死で下さる事なら三十日はおろか。五十日が百日でも勤めませう。ヲヽよし〳〵夫さへ出來れば氣遣ひはない。モウ今日去にしなから土產でも買て去んで機嫌取らしやれ。コレ何言はしやつてもアイ〳〵合點か假にも腹立さす事ならぬぞ。ハイ〳〵畏りましたといふて立別れ。扨歸る道にてばゝさまの御

すきの御やきを買て冷ぬやう。眞ぶところへ入てあたゝめ內へ歸る。ばゝ樣內に待てござる。戻つたら何で淦ふ〳〵と思ふてござる所へ嫁はいつもと違ひにこ〳〵して。戻りて來た申ばゝ樣只今歸りました。是はおみやでござります。あたゝかな內に御上りなさりませとさし出せば婆さまこわひ顏して竹の皮包み引たくり。この賣買の高ひ時分澤山さうに錢かね遣ふてもらいますまい。此錢で大根葉でも買や明日晝の菜が有るに。ヱヽ世帶しらずであるわいと呵れても。たゞハイ〳〵ばつかり。本にもう御夜食あげる時分と茶もはんなりと入れて其片手に婆さまの御好の胡麻みそ酒しをたつぷり遣ふてこしらへ。サア御上りなされませ婆さまはぢろ〳〵見て。コリヤ何んぞいの榮耀らしい喰ふてよくばこなた參れ。こちらいつもの通り香のものゝ刻だのでよごんすと。膳棚から引出し夜食喰ふて。又たばこ盆引よせくすべかける。嫁は子供のめし仕廻ひ。そろ〳〵片付ケ。ほひにばゝ樣一日そのやうにし

て御ざつて御退屈にござりませうちつと御肩さすつて上ゲませうと。そろ〳〵撫廻る。ヲヽ是何さつしやるぞいの。そのやうにしてもらわいでも大事ごんせぬ嫁は。ハイ〳〵といふばつかり一言の口答もせず。美しいものじや。御明上ゲたり。線香たてたり。婆さまの着物疊んで小供寐させ片付廻り。婆様モウ御やすみなさりませぬか。御寐間いたしませうと。いつちあたゝかな所へ蒲團敷て。サア御やすみなされませ。ばゝさまいつもといこう勝手が違て來てヲヽあの人わいのこちらはまだ寐所しもらふほどにはござんせぬと蒲團引かぶりてころりと寐る嫁はハイハイいふて裾押へたりたゝきつけたり。枕もとへたばこ盆に火を入れ。枕屏風引廻し。ちと御足さすりませう。イエ〳〵こちらゝどこへも歩行せず何んにもだるい事ごんせぬ。ハイ〳〵高が三十日何んとなと口舌おつしやれ追付鬼婆思ひ知れと心の内には思ふても表邊は隨分大切にするも我身の畏さじや扨翌日朝もとふから起き飯ごしらへして奥から口まで奇

麗に掃出してばゝ様モウ御起なりませぬか。婆さまいつも寢所からやいなふて苛りかけるに。今朝は寢過してびつくり。目を明き嫁にせんを取られそこら。見廻しても何んにも言ふ事がない。夫で。アイ今朝は頭痛がするけれど起にやならん。起ませうと。ぐず〳〵起て手洗を遣ふその間に嫁はちやんと飯ごしらへいつもの所へ座ぶとんしきだばこ盆に火鉢も直し場取りして。待ている婆さま手洗をつかひ〳〵も何ぞ見出して言ふ〳〵と思ふても何にもいふ事がない。扨不拍子なものじや苦々しい顔して。めしを喰ふ嫁は婆様の給仕を仕廻ひ棚もとして髪を撫つけ申婆様私はちよつと妹の所へ往て參りませう。婆さま一ツ調子上てどふなと。御勝手になさりませ。ハイ〳〵いふて嫁は又彼醫者殿の所へ往てきのふからの次第かやう〳〵と。委細に物語すれば醫者どの聞てそれでよし〳〵。扨藥をこしらへて置ました進せさつしやれと。奇麗な重箱にあん餅二三十斗入れて。此内に彼が仕込である急に驗の見ゆるやう

にすると目立て惡ひ。自然と病氣で死なしやつた樣にないと跡で小言が出來る。きのふもいふ通り高が三十日の間じやほどに迚もの事に婆さまの足納さつしやるやうに力一ッぱい心を盡し後で殘念にないやうに隨分に孝行にさつしやれ。コレ何言はしやつてもアイ〳〵〳〵合點かハイハイ畏りました何から何迄いかゐ御世話でござりますと。重箱提て立歸りばゝ樣只今歸りましたといふても。婆樣こわひ顏してうそ吹てござる。ばゝさまの顏が鬼のように見へ持てござるきせるが鐵棒の樣に見ゆる。こゝが大事の所じやと。手をつかへこれは妹の所からあなたに上ゲましてくれといふておこしましたちと。御上りなさりませと。指出す婆さまも滿更惡るふもないやう。引よせて一ッ二ッ喰ふて跡は佛だんの下へ入れて置るゝ。嫁はサア仕てやつたと悅び夫から猶々心を盡し氣を付ケ其後は毎日〳〵色を替へ品をかへて土產物に事よせ退屈さつしやる時分には酒の酔して進ぜたり。或は茶をはんなりとして餅を燒たり庭へ下りさ

つしやると。草履を直し杖をあてがひ腰をかゝへ。三度の御めしには何んなりと婆さまの好のものをこしらへ是もたんとすると氣に入らぬゆへ少しヅヽこしらへ。機嫌を取り。寢起には撫さすりハイ〳〵〳〵といふて介抱するものじやによつて。さしもの婆さまいつそやくたい。コリヤ何ん事じや此やうにしられては何にも腹立る手がゝりがない樣に成て何んにも用がない。仕やう事なしに佛檀で佛さまばつかり淰りてござる。看經しい〳〵もどふやら此間から拍子が違ふてあじいな氣に成り。ハテ合點の行ぬアノ嫁には何ぞ魔でも見入れてはいぬかと不審立ながらもためし見るに。毎日毎夜のかいほう殘る所もなく親切に氣を付て呉るゆへどふやらわやくいふものは自身ばつかりの樣に成て來た。ソコデ婆樣も尻こそばいやうでつく〳〵思案し。ハテめんような事じやアノ如才のない氣ではあの人に何にも惡ひ事はないが。どうしておれはあの人が憎ひぞと。そろ〳〵目が覺かけて本へ立歸りかける。サア爰が大事の所じや。

地獄の罪人も黒がねの帳の消る時節がある。是から成佛の段じや。此時婆さまの本心の光明が霏りと始て顯はれかけて。有難ひ事じやないか傀儡師胸にかけたる人形箱佛出うと鬼を出そうとまゝじや。嫁は一途に三十日の高がくゝりて有ゆへ。いよ〳〵張込で孝行にする。婆さまはいよ〳〵はづかしう成て。ハテ心得ぬあの嫁がどこが悪ひぞどふ見ても。悪ひ事は少しもないのに。是まで何んで悩んだ事じやぞ能ふ思ふて見れば。いか様わしは大きな業人じや。末期の水を。汲でもらふも。あの人より外にはない其上可愛息子につれ添ふ大事の嫁を憎んだは何事ぞと。ころりと了簡が入れ替た。有難ひものじやぞへ性は善也。人々己に貴きものを持合してゐるけれど。大事の御月さまを黒ん坊が隠した。向ふへばつかりホン〳〵して立歸る事しらぬは。皆黒ん坊の業じや婆様の本心の光りが出て來ると。能ふしたものじや今度はそろ〳〵婆様の方から嫁御の機嫌取てござる。是こなたも此寒ひのにちやつと仕廻ふて。早

ふ火燵へ當らしやれいの。嫁はハイ〳〵わたしは何にも寒ひ事はござりませぬ。おまへさまが寒ひ時分に御ひへなされたら。御持病が發りませう婆さまが。イヤ〳〵わしは此間から大分心もちが能ふござる。案じて下さるなと嫁姑のむつまじさ。きやうとひものじや嫁の心はうそじやけれど。骸の勤が本眞じやによつて婆さまほた〳〵して。次第〳〵に嫁がかわいく成て來た。夫からしわん坊の婆さまが自身の入れ物にたくり込で置たものを。取出しては嫁にやつたり喰したり正直なものじや。嫁は何いふても。ハイ〳〵私は若ひ骸の事。おまへさま御不自由のないよふになされて下さりませ。イヤ〳〵そふじやござらぬ。年寄が物たくわへて何にしやうぞいのと。婆様段々心持が面白ふ成て來ると乘が來て。簞笥の引出しからも色々のものを取出し。是こなたの下着がきつう損じてある。是をマア着やしやれと。おしげもなくずつか〳〵婆さま急に大氣にならつしやつた。能ふしたものじや。心持さへ嬉しうなると。何

んにも欲はない皆心の事じやぞへ心さへ足納すれば直に極楽

「足納をするとせぬとの胸の中地獄もあれば極楽もあり

此頃は婆さまの顔付がにこ〳〵と嬉しそふに成て来て。嫁の顔色の悪ひを案じてコレこなたは。此間からきつう顔色が悪ひのどこも悪ふはないかや。今頃ふて下さると。子供の難義は知れた事じや。おれは大體迷惑な事じやない。食事でも味じなくば。何んなりともこしらへておませう程に。随分頃わぬやうにして下されやと眞實眞身我子の如く嫁が可愛成て。後には田もやろ畔もやろに成て来た。扨つまらぬものは嫁じや。胸算用がぐわらりと違ふて。是はマア何んの事じやぞい。一向わけの分らぬ様に成て来た。ハテめんような事じや。あの婆さまには何んぞ取付てゐやせぬか知らぬ。あんまりで合點が行ぬ。是までははへぬきの鬼ばゝの様やうに思ふてゐたが。此頃の様子では世間にもよつぽどまれな佛婆さまじや。アノばゝ様を殺そふとは去とては勿體ない。ヨウ爲が

當らなんだ事じやと。嫁御も又目が覺て来た。有難ひものじや

「雲はれて後の光りと思ふなよもとより空に有明の月

「よいものを生れ付には持てゐれど皆ホン〳〵にかすめ取らるゝ

是が能ふしたもので。初めは嫁の心の内には婆様を殺す氣なれど。骸の行ひが孝行の仕業じやによつて。婆様が佛にならしやつたものじや。是で能ふ御合點なさりませ。口でどのやうに言ても。心もどのやうに思ても骸に行はねば役に立ぬ。何でも身に勤めねば利益がない朝夕おのがなす業は大事じや

「何事のおはしますかはしらねども忝じけなさに涙こぼるゝ

此度は嫁御が本眞に目が覺て来て。コリヤこうしてゐる所ではないと直に醫者殿の所へ走りて往た。申どふぞばゝ様の死なしやれぬ薬を早ふ下さりませ。醫者殿聞てそればどうも合點の行ぬ三十日詰合の療治まだ廿日にもならぬにどふする了簡じやぞいの。イエ〳〵どふのこふのは

ござりませぬあの佛さまのやうな婆樣を。御恨申たは何んの事じやぞと
ふぞ。先日からの御藥の消るやうな。御藥を早ふ下さりませ。醫者殿樣
子を得と聞きさ。そんならこなた婆樣を殺す氣はもふないか。勿體ない〳〵
何んのうそを申しませう醫者殿。涙をはら〳〵と流し。出來さしやつた
〳〵。能ふマア其心に成て下さつたのう。氣づかひさつしやんな。何に
も毒は進せませぬ。こなたの突詰た心から殺そうとまで思ひ詰さつしや
つたは。よく〳〵の事であろうが。然し双方に怪我のないやうに仕やう
はないかと。色々工夫し。或知識に此事を尋たれば。それは一大事の事
が出來ふもしれぬぞ。かやう〳〵にして見よと差圖によつて其通りを。
進めましたが首尾ようまいりて。御互に御目出たひ。尙此末が大事じや
ほどに。隨分大切に孝行さつしやれとたがいに悦び。心も解合て其醫者
殿とも今に念比にせらるゝよし。承りました。此やうな恐しい事も有
ものじや。しかし有難ひはなしでござります。此醫者殿が智識で有たゆ

へ。兩方に怪我がなかつた。そうないとどのやうな事が出來ふも知れぬ
こわひ事じや是で能ふ考て御らうじませ。よい事はうそにしても。極樂
は本眞また惡ひ事はうそにしても。罪は遁れぬ嫁姑の事ばつかりじや
ない。皆銘々身の上にも。此ような事は色品替て。何んぼもある事じや。
たとへ向ふからどのやうな無理非道を持かけても。高が三十日の氣に成
て。向ふの望の通りしてさへやれば。三十日かゝぬ内に首尾よふ相濟
ものじや。それを勤めても見ずに。どうのこうの〳〵小言ばつかりいふ
て。暇にあかして苦るしむ。わつけもない事じや。又どのやうにしても
中の直らぬのは。やつぱり此方の腹の中の鬼の業じやと御明らめなさつ
たがよい。此嫁御の如くよい事はうそにしても極樂は本眞となる。其か
わり惡ひ事は虛言にしても。地獄は本眞じや。わたしはうそに盜みいた
しました。心にはさら〳〵盜する氣はござりませぬと。どのやうにいひ
わけしても。罪は遁れぬ。首はころり。じやによつて。此眞妄の二ツを

能明らめねば。天地の間に。身を入るゝ事はならぬ。故に道は暫くも離べからず。時々刻々に心を用ひねば。いつの間にやら無間の業が積りつもりて

「氣もつかず目にも見へねどいつのまにほこりのたまる袂也けり

うか〳〵してゐる内に袂のくそが溜るわづか此手の出し入れに赤ひ袂のくそや黒ひ袂のくそや千才茶のたもとのくずやいろ〳〵さま〴〵。心中身投首くゝりのくそが溜る。恐しい事じや無間の業とは。此出る息引息に溜る。たもとのくそを吟味する事でござります。腹の中から本心が。夫うそじや。よしにせい〳〵といふてゐれど。何んとなと理屈を付て。骸の勝手の方へ引付るゆへ。色々様々の袂のくそとなる。去によつて離べきは道にあらずと

天命之謂ゝ性。率ゝ性。之謂ゝ道。修ゝ道之謂ゝ教。（これをせいといふせいにしたがふこれをみちといふみちをおさめへといふ）

天の命とは。天の命令といふ事じや。其天の命令の通りを身に行ふを性にしたがふといふ。此性といふは。天より賦與して。吾れ人稟得たる本心の事じや。譬ば天を大海の水にして見れば。人の身は其大海の中に。籠を幾つも並べた様なもので。其籠の中の水も天なれど。人の身に稟得た所では。其名を性といふ。それで天が腹の中へ往來なさるを息といふ。その息ある中を命としてゐる故。一切萬物皆天の命にあらざる者はない。其命に率ふが道じや。道とは何ぞ。夏になれば暑ふなる。冬になれば寒ふなる。誰が世話もせぬに。冬の中から梅が咲く春は櫻に桃柳。秋は楓が紅葉する。夜が明るとちうちうかあ〳〵。烏は烏の道。雀は雀の道。柿の木に柿が出來る。栗の木に栗が出來る。素直

に口舌言はず。天命の性に率ふ。和合の道。その道の通り勤て。少しも性に背くものはない。道は上下に明らかなり。世界中の鳥が夜が明ると起る。どふしたものじや。皆鳥の起たやうに思ふてゐるけれど。ねつから鳥の起るのじやない。皆天命の性に率ふ道の通り。萬物一躰すこしも道に背くものはない。鳶が烏の眞似もせず。馬が牛の眞似もせず。昔から柳は綠に花は紅の一向宗。杜若のむらさきが。今年は千才茶に咲て見よふと。雜行した事もない。椿の花の口紅が藍媚茶で笑ひもせぬ。女中がた能聞ふぞへ。春さき鳥が一番子二番子と云て産むけれど。早産も敢揚ゲ婆もいらぬ。桃の花の咲も實の成も世話入らず。一切萬物道は盡し切ッてある。たゞ世話のかゝるは人じや。夫故教によらにやならぬ。先ヅ朝目の開たはどふしたものぞ。不思議なものじやぞへ。ちつと不審打てごらうじませ。皆吾でに開たやうにおもふてゐる。じやによつて。もちつと〳〵といふて辭儀する。夫でも本心は正しいものゆゑ。イヤ〳〵

起キにやならぬ〳〵といふを。私心の身勝手めがもちつともちつと直切り小切りする。それで胸がもいやくやもいやくやするけれど。とう〳〵私心めが。本心をたゝき付ケて夫なりに又一と寐入り。やう〳〵と四ツ時分に起キてア、今日は氣色が惡ひ。誰が氣色惡うしたのじや。惡ひといふこと自身モ知ッてゐながら能ウ止めぬ。何ンと世話なものじやないかそれじやによつて。敎に依らにやならぬ。盜人も惡ひといふ事知ッてゐればこそ人に隱してしをる。その惡ひと知りながら能ウ止めぬ。是を人面獸心といふ。形は人なれど心は鳥けだものじやといふ事じや。誰でも本心には惡ひといふ事能ウ知りてゐるけれど。無理にしてゐる事が何ンぼもあるみな生ながら心は畜生道へ宿這入りしてゐるけれど。しらずにゐる。難儀なものじや。あの鐘馗大臣の繪に。其側に鬼が小サウなつてゐる。是が君子の腹の中じや。本心の鐘馗大臣が正しいゆゑ。私心の鬼めがちいさうなつて。はい〳〵いふて這ひ屈でゐる。聖人でも君子で

も。骸のある中は私心がなければならぬ。故に君子は戦々競々と御慎みが厚ひ。日々に新に劒を磨てござるゆゑ。其劒の光に恐れて鬼めが小サウなつて頬出しする事がならぬまた銘々共の腹の中は鬼めが大キウ成て本心の鐘馗大臣が小サウ成てござる。其筈じや。ねつから劒を磨といふ事がないゆゑすりこぎのやうなものじや。何ンぼふり廻しても。摺子木じやによつて。ねつから恐怖はしおらぬ。ソコデ鬼めが大キウ成て。おれが〳〵といふて。家内一ツぱいに成て。胡厄言ひ次第じや。是がこれ天命の性に率はずに。人欲の私に率ふてゐるのじや。今のもちつと〳〵めが大将に成り居ツたのじやしや。夜寝しなに風が吹く。風呂の下の火の用心はと本心が氣を付るを。骸の私心めが不肖皮着て。ハテもうよいわいなで仕廻ふソコデ寝入ても。心が安堵せぬゆゑ。夜がな夜日と火事の夢やら。突落さるゝ夢やらでおそはるゝ能ウしたものじや。道は天より稟得てゐるけれど其道の通りせずに性に背くゆへ。迷ひだらけ。心こゝにあらざれば。化ものが出たりされたり。幽霊に取付れたり。轆轤首に笑ひ殺世界中の人の顔が鬼のやうに白眼やうに見へたり一家親類の顔が鬼のやうに見へて一生うろたへ仕廻ひ難儀なものじや惣て化ものに出逢ふたといふは。其化ものは向ふから見せるか。此方から見るのか。能ウ考て御らうじませ。幽霊が火をふくやうに見ゆるは。いつぞや。向ひの内義が。産の持ごもりで死だの。どこそこの婆さまが頭痛で死にやつたの。誰某が身投たの。首縊たのといろ〳〵のものを腹の中に持合してゐるゆへそれを引當に此方から算用して詠めてゐるのじや其やうなかしこい了簡を除て能ウみれば。浴衣のかけてあるが。風で動くのじや。心こゝにあらざれば。見れども見えず。聞ども聞えず喰へども其味ひを知らず。向ふの了簡も知らず。どういふたが濟ぬかういふたが聞えぬと。此方の算用ばツかりを當にして。ぼい〳〵ぼやいてゐるのはみな。化物に出合ふたのじや。能ウ氣をしづめてとつくりと向ふの人

を能ウ見たがよい。高で骸に着物のかけてある人がものいふてゐるのじや。其外には火を吹ものでもない。皆此方の思惑ばつかりじや日月の須彌を遶り給ふを人間は晝夜を數へて年月をはかる。一切萬物の一動一靜するを見て。實に生死のあるものとするは。天の流行なる事をしらぬゆへじや。能ウ目を覺して本性の究りなき所より見れば。乾坤といへども鴉の巢を見るが如し。やツぱり浴衣のかけて有たのじや丁ど雪隱などへ往た時に風と壁の干破た所を詠て見ると。鬼の顔の樣にも見へたり。又女の首のやうにも見へたりすることがある。是が皆我腹の中に。かねておにのかほやをんなの首を持合してゐる故。それを干破た所へ宛がうて詠てゐる。獨狂言の此作者はたれじやぞ。能ウ吟味して御らうじませ。夏になれば風を悦び寒ふなれば頭巾を冠る。此化物を捉へて見ればまぼろしのごとし

「引よせて結べは柴のいほりにてとくれば本の野原也けり

何にも形のあるものじやない。森羅萬像皆幽靈じや。其證據にや陽氣は出ぬ。夜の八ツ時分には皆消て仕廻ふ。何にも執着ものでも。噛付く物でもない。是で能ウ御合點なさりませ。化ものといふも幽靈といふも。みな我思惑ばつかりじや。扨また轆轤首といふも考て御らうじませ。男の轆轤首といふはないものと見へる。兎角女には多ひものじや。寐てゐる間に。何處までも首が延る。こはひものじや。大坂の首が堺へ往たり。京の首が江戸へ往たり。長崎へ往たり。其外國々在々へも首が往來する。恐しいものじや。年寄てはあまり見ぬものじやけれど。若ひ時はちよこ〳〵出合ふものじやほどに。どなたも御用心なさりませ。美しいびいどろのやうな顏に。かねくろ〳〵とつけて。人を見るとにこ〳〵〳〵笑ふと。首筋もとからぞつとしてふるひ付く。そうすると。どうぞ一夜さあのとうろう髮〳〵と何の事もかのこともう忘れ果て。たゞぶら〳〵と立煩ひじや。夫から後には。親の事も主

人のことも。商賣の事も。夢中に成て。とう〳〵家も身上も笑らひ殺さるゝ首の化もの。どうぞ一生の内にあはぬ樣になさりませ。こわひものじやぞへ。扨狸が陰嚢引被せおると。眞くら闇に成ツて。跡へも先へも行ことならぬ。難儀なものじや。此陰嚢をかぶせられまいと思や。常〳〵心懸て用心せにやならぬ。それはどう用心するのなれば。もし借錢して奢てゐやせぬか。藏のうちの簞笥長持に。歩をかいてはゐぬか。日合の出る金で旦那樣〳〵といはれてはいぬかと。折〳〵吟味してみぬといつの間にやら。どいと陰嚢引かぶせおる。其時は跡へも先へも行事ならぬ立往生じや。算用なしにめつたにポンと。生ながらみな干物じや。これが本心知らぬ御かげ能ウ考て御ろうじませみな敎じやわいナ。一切。敎にあらざるものはない。身にたち歸りて見ると。佛法腱毛じや神道も儒道も腱毛じや。あまり近ふて見付ざりけり。善と惡ひは腹の中に能ウ知ツてゐる。惡ひと知らば直に止めたがよい。夫が神道。夫が儒

道佛道此外にみちはない。此道に由ぬがゆへに惡ひと知りながら能ウ止めぬ。盜は惡ひ事じやと知りながら能ウやめぬ。此盜といふと。盜人の事ばつかりのやうに思ふてゐるが間違ひじや。天命に背くは皆盜人でござりますぞへ。大江山の酒呑童子も羅生門の意張氣童子も。皆盜人の劫經たのじや。本は同じ人なれど。なぜ盜人といふなれば。先づ一番にこの骸を盜だものじや。天命の此骸で。己が自由を働く故盜人といふ。酒呑では遊びくらし商賣不精で仕事嫌ひ。のらつぽの天上ろくな事は思ひ付ぬ酒呑童子といふこと。幾ツ何ン十に成ツても。わけもない子供のやうなもの故童子といふ。人に角のはへたのじや。角といふは。角のある人の事じや年中丸裸で虎の皮の褌してゐるも同ンナじ事ぢや。虎の皮の褌は股ぐらばつかりに張込でゐる故。身に災が絶ぬ。むかしは此鬼めが山奥に住だけれど。今は大分町稼してゐるほどに。御油斷なされます

な。段々子をへり付て鬼の卵子がかへりかける。又此鬼の角の生かゝりどなたも御ろじやつた事があるかいな。いまこゝへ出して御めにかけるどなたも近付に成て置なさりませ。朝起しなに。もちつと〳〵いふたり。又人が呼んでも返事せなんだり。少と氣に入らぬ事があると頬をふくらしたりするは。みな鬼のなりかゝりじや此頬をおり〳〵なで〳〵御覽じませ。此頬のかはが強ふなると。皆鬼になりますぞへ。こわいものじやどふぞ此鬼の成人せぬ内。早ふ殺して御仕廻ひ被成が肝要じや。そうないと。八萬四千の地獄を連て歩行おる。一生が間胡亂にやならぬ。難義なものじや此鬼を降伏するはどふするが好ぞ。或人明惠上人に問て曰。佛法の大意如何と尋たれば。上人答て。有べきやうと仰られた此六字の假字のうちに一切の御經が備つてある。有難ひ御言葉じや。天皇のあるべきやう武家は武家のあるべきやう。百姓は百姓の有べきやう。町人は町人のあるべきやう。手代は手代のあるべきやう。丁稚は丁稚のあるべきやう。丁稚が丁稚の有るべきやうにないと中年からうろたへ出し仕舞は巾着切となる。犬は犬の有べきやう。猫は猫の有べきやう。此あるべきやうにさへ在ば何にも教は入らぬ。神道も儒道も入らぬ。極樂も地獄もいらぬ。天子のあるべきやうになし子のあるべきやうになかつたゆへ。萬民途炭の苦み。武將の有べきやうにないは。平の清盛。相摸入道。天下を失ひ。下萬民の歎き。旦那が旦那の有べきやうにないと家内脩らず。一家親類大騒動。むかしの大合戰も有べきやうになかつたゆへじや。武士の有べきやうは。小野九太夫とやら砥左衛門。大石何某また士のあるべきやうにないふて。同んなし家臣なれど。是は又銘々家業士の道を忘れ。たゞ慾ばりて身の奢を極め。主君の恩義を捨て逃あるき。末世末代の恥ざらし。慙しいことじや。此人は彼もちつと〳〵の弟子に成たのじや。生々世々地獄の釜焦。わづかな樂みを期にして。萬劫辛きくるしみを受る。一切

の書物。一ツ切の經文。皆天命の性に率はしめん爲ばつかり。有べきやうが三教の大意じや。

日〳〵のつくりし罪は塵埃南無あみだ佛は等成けり

六根清淨。内外清淨。はらひ給へ清めたまへ。日々に新たに。又日に新たなり。なむあみだ佛は等なりけり。夫に腹の中には汚ひものを入れてなむあみだ佛〳〵。どふぞ御助け下さりませと。念佛申し〳〵阿彌陀樣を眞顛倒。直に地獄へ突落すのじや。勿體ないことじやぞへ。能ウ目を覺して御らうじませ。

花は花紅葉は紅葉其儘に言はで教る我法のみち

夜が明ると今日が法の道。生死の道。天地のみち。ちう〳〵。かの〳〵猫のにやん〳〵。犬のわん〳〵。蛙のギヤア〳〵。蟬のミイ〳〵。草木。皆是大日所變じや。大根〳〵。茄子〳〵迄みな御說法じや。騒しや峰の嵐や磯の波これみな法の御聲なりけり

法華經の心を知らば世中の賣買ふ聲も法を說なり

朝から晩まで日々に新たより外に道はない。神の道が人の道。人の道が佛の道。君子其位に素して行ふ。外を願わず。きよろ〳〵他所見ることはない銘々の受取前を勤めさへすればよい。

さしあたるけふのことのみ思へたゞかえらぬ昨日知らぬあすの日

あしたはまた來やせぬ。たゞ今日の天命を太切に勤むるのじや。君子に三ツの畏れあり。天命を畏れ。大人を畏れ。聖人の言を畏る。此天命とは何所の事じや。天命といふ名を知つたばつかり。みな干物の天命で役にたゝぬ。びち〳〵活た天命を知らぬ。腹の中に少しでも惡ひ事は惡ひと知り。善事は善と知る。此やうな慥な天命を。身に備へて居ながら。地獄も極樂も向ふばつかりに見てゐる。向ふに用はないわいな。教は皆我身に立かへることじや。又あんまり。去年死だ孫のことまで思ひ出して。うちの坊が去年ゐれば明て五ツ。アヽ可愛さ

うに。惜ひこと致ました。今比はさいの川原で小石を集め。一ツ積では父戀し。二ツ積では母戀しと。積上ゲては鬼に崩され。泣てゐるであろ地藏へどふぞ御助ケなされて下さりませと。泣たり口説たり迷はぬ子まで迷わする。むかし和泉式部は小式部をさきだてし時に。

假に來て親にあだなる世をしれと教て歸る子は佛なり

と詠れたり。これでこそ親も子も成佛じや。マア鬼はどこにゐるぞ。是から吟味して御覽じませ。みな腹の中に。さいの川原も。地藏菩薩も建立してあるぞ。泣たり笑ふたり。白髪のはへた迷ひ親仁。迷ひ子が泣き〳〵つかむ螢かな。白髪のはへた故郷。明德佛性の本宅へ歸る道筋を忘れながら。泣き〳〵つかむ螢かな。何がほしいかゞほしい。何を云も金の事じや。金がなければどふもならぬと。道草ばつかりに日を暮す。あつたら事じや。皆天命の恐しい事を知らぬゆへじや。天地の間に天命の重ひ天上があるけれど。知らぬ人が

ある。知りてがすくない。天命の重ひ天上とは何ンぞ。御法度を謹而可守事。親の云ひ付。主人の言付。何を仰られてもあい〳〵と。親の命を恐るゝのじや。則人の道じやの。

あい〳〵と返事よければ眤じく心に不足あれば不返事

此太切な天命を聞損なふてゐる。勿體ない事ぢや。二三度も呼して返事する。其不返事は誰がいふなとおさへてゐたぞ。又何か不足ではらの中が强張て有たぞ。あんまり結構過るゆゑ。もつと我まゝに驕られぬ。といふて腹の立のじや。御上の御觸は天の御啻。大慈大悲の天命。莚のべゝが着せとむない。どふぞ福の神にしてやらふとて。御世話なさるもしらず。何ンのかのとこゞとばつかり。己が慾深ふて商賣の暇な事は言はずと。世間が詰ッたの詰らぬのと。役にもたゝぬことばつかりいふてゐる。皆不返事じやぞ。勿體ない事じや。罰が當りて不仕合になけりやな

らぬ。君子は天命を恐れ。上を上とし下を下とす。堯舜の道は孝悌のみ。此外に立身出世の道はない。扨此天命〳〵といふに。大分間違ひのあることじや。茶碗を一ッ棚へ上げるにも。やり放しにして置くゆへ。ちよつとさはりても落る。直に破れる。ハア是も天命。何の是が天命であろ放心したのじや。夫にまた此やうに寢むたいも天命。此樣に酒の飲たいも是も天命じや。惡所狂ひして酒を過し。夜露に打れ。永々濕を煩ひ。あげくに鼻がころり。ハア是も天命。仕舞には身上仕舞ふて菰をかぶり。是も天命。そのやうな天命がどこにあるもので。皆我まゝ氣まゝの天命じや。此間の心中。女は十九男は廿三。アヽ天命じやな。暗らひものゝいふ事じや。生れた時は天の丸無垢の人で有た。御歷〳〵も。我々も。熊坂の長範も。生れた時はホギヤア〳〵。熊坂じやとて鼬のやうに鳴もせまい。皆仁義禮智の性を以つてせずといふ事なし。同ンナじやゝ子でつふりてん〳〵や。てうち〳〵あはゝ。何ンにも替ッた事はない。

生れ子が次第〳〵に智惠づきて佛に遠く成ぞ悲しき

子供の時から惡ひ遊びの友達。六道したり。穴市したり。大口いふたり虛言いふたり。惡友惡因緣に引張れて。佛に遠く成ぞ悲しき。あつたらことや。夫にまた人の能ウいふ事じや。あの子は生れつきに肝癪がある イヤ蟲のわざじやのと云。誰があた面倒な。肝癪蟲や。奢虫や。身拙首絞まで添て。生付る親が。何所にあるもので。よい加減に迷ふて置たがよい。イヤ私は運の惡ひ生れ付キじやのと。分解もない事ばかりいふ。運の惡ひと言は。聖人の敎に隨はぬほど運の惡ひ事はない。スツキリみな己が我まゝ氣まゝを。親の所爲にして仕舞ふ。何ンと冥加ない事じやないか。此皆聖人の敎を聞ぬ夷國の風俗なり。此夷國の余類のものが。我國にもあるまいものでもないといふて。神佛が敎を立て御世話なさるのじや。學問の道他なし。其放心を求るのみ。放心とは我まゝ氣まゝさせぬやう育るのじや。子を育るといふても。犬や猫を育るやうに物喰し

て大きうさへしたらよいと思ひ。少しも教ゆるといふ事もなく。喰たがるものを喰し。着たがるものを着せて。坊よ幼よとねぶり廻すばかり。ソコデすねたり。不忍かはいたり。するを大分知恵付きましたといふて悦び。横着な事いふたり。友達とたゝき合などするも。氣丈者といふて譽そやす。半分は親御様が手傳ふて御苦勞に與るのがある。是等が夷國の余類の衆といふものじや。我神國ではかやうな事がいやさに。近來前訓を說て。子供衆の內から御進めなさる事じや。先入主となるといふて幼少の時に覺たことは。善惡共に一生の主となる。大體太切な事じやない。骨が强張てからは教が入にくひ。ころばぬ先きの杖じや。倒てからは役に立ぬ。家も潰れて仕舞てから役に立ぬ。つぶれぬ內から子孫長久の教が大事じや。是に付ておどけ噺がある。皆目覺しに聞ておくれなされ。或所の子息殿が。商賣不情で夜溜り日溜り。酒飲だり。のら〳〵遊びくらし。親御は次第に年がよる。子息殿は次第に强ふなる。難義な

者じや。父御は氣をいため通し。寢ても寢られず。寢所でぽつしりとひとり言。アノ獄道めはまた戻らぬか。毎晩〳〵外を家として出あるき。何になる積りじや。中〳〵あれでは。我等がゆくする。どのやうなめに逢ふも知れぬ。母御も氣のどく。是非もない事じや。足本の明ひ內に了簡を極めずば成ますまいと。御夫婦相談して御座る所へ。表の戶樞。ごろ〳〵と音がする。御夫婦ながらじつと寢た顏して御座れば。子息殿は酒機嫌で鼻歌ぶし。ひよろ〳〵足で。父御のつむりに蹉。御赦されませといひつゝ。段階子へ上る。中程で手で戴く眞似して二階へ上る。母御が是いまのを見やしやつたか。父御がヲヽ知ツてゐる。あれ程酒に醉ておるけれど。おれが天窓に蹉き。御赦さりませと。手で戴く眞似して二階へ上りおつた。まんざら親の太切な事知らぬでもない。母御がされば。いのあれが。心に何とも思はぬば。アゝ御赦るされませは出ぬ筈じや。明日でも急度あれが了簡の所を聞て見さつしやれと。親の慈悲は有難ひ

物じや。ソコデ明日に成て。子息殿は四ツ時分に起き。食喰ふて又出かける所へ。父御がコリヤ用があるとき。仕舞ひはどうする積りじやぞいと呼付け。其様に外を家として出ある置たが。併しゆふべ二階へ上りしなに。おれが天窓に蹉き。御赦さりませといふたが覺てゐるか。夫ならまんざら親の太切なこと知らぬでも有まい。其心なら向後志しを改め。ちつとは親の氣を痛めぬやう。性根を入替よと呵り付れば。子息殿聞て。フウンゆふべ蹉たは。おまへの天窓で有たか。夫なら大キナ間違ひじや。わしは又悪ふ心得て。酒徳利かと思ふて戴ひたといふた。此やうな大間違ひがある。此間違ひが世間に大分ある事ぢや。おれが〳〵といふてホン〳〵するは。皆酒徳利戴ひてゐる株じや。親御様の長壽は格別有難ひとも思はず。家屋敷から諸道具に辭儀してゐるが何ンぼもある。又女中方など内の身上の潰れる事も搆はず。呉服屋の香具屋のと云ふに義理立て。世間へばつかり氣を張

て御座るがある。皆酒徳利に辭義してゐるのじや。天命に背く大間違ひ。是を手細工の天命とは自然にして遁れぬ所の事じや。帝王と生るゝも天命。則天の命令じや。孔子も天命。釋迦も天命。百萬貫目持も。拾萬貫目持も天命。武家と生るゝも天命。町家と生るゝも天命。併盜人ばかりは天命じやない。此天命を私に移しかへる事はならぬ。暗がりでせにやならぬ。暗がりでする事に證據がある。人の知らぬ様に暗がりでするから天命はない。ろくな事はない。世の妨となるか。人を害ふか。そのやうな天命はないけれど爰に一ツ不審があるむかし。唐土に盜跖と云て。三千人の人欲の大將に成て。一生富有で歡樂に暮した大盜人がある。是は世間並の盜人と違ふて。大家小家を撰まず。其家の主人の行跡を兼て能聽合し。仁愛厚く正しき人の家は目をかけず。たゞ貪欲にして。無慈悲なる人の家を目がけ。非義非道なる様子を見定め。大勢徒黨して亂入り。金銀財寶を奪ひ取り。山林幽谷に引籠。其貯のある間は樂しみ暮し。皆無になる

と又不忠不孝の家を尋て。財寶を奪ひ取る大盜人じや。其替に心の正しき人の物は。箸隻も取リヤせぬ。なせなれば取られぬ。取る事がならぬ心の正しき人の物は。天命の守りが強ひゆゑ。無理に取れば忽ち天の網が下る。是が能ウしたもので。不義不道なる人のものは取りよひ。なせなれば。貪欲の人といふものは。遲かれ遠かれ。天命下りて。其家を破却する。其財寶なれば。甚取り易ひじや。どうでも其道理を呑込でした者やら。此盜跖は一生無難で歡樂に居して終たといふ事じや。是を以て見れば今日でも。道もない財寶を集る家には。いろいろさまざまの憂ひ災難が起りて。財寶をみな無にせにやならぬ。スリヤ今でも盜跖が徘徊すると見ゆる。此盜跖が住家は何所ぞ。若腹の中に屈でゐやせぬか。銘々吟味して見にやならぬ。大事のことじや。何ほど一生歡樂に暮したとて。千載の後まで盜跖の惡名は遁れぬ。何ンと悲しい事ではないか。まつて何時腹の中の盜跖が飛び出やうも知れぬ。油斷はならぬ。御互に用心せにやなりませぬ。扨其外は出家も天命。醫者も天命。此方の仕業じやない。釋迦も孔子も天より性を稟得た證據にや。腹の中が暖ひ。釋迦如來も此あたゝかみがあればこそ。五十年の說法。此あたゝかみの外に說法もない。釋迦もない。萬物一躰。犬も猫も。鼬も鼠も暖ひ。鳥も鳶もあたゝかひぞ。水中の魚までも。冬向き水には。氷が張詰てあれど。其中の魚の腹の中まであたゝかい。蔭。此暖みが去ると。花も實も出來やせぬ。草木花咲き。秋實のるも。暖みの御も狐も。牛も狸も活てゐる。平等一枚。三千世界が此あたゝかみを。心としてゐる。腹の中に圓炭はいけてはないが。不思議なものじや。一佛一躰。二佛はない。此一物を儒道では性といふ。道ともいふ。佛家では無量壽とも。名はさま〴〵に呼で有れど。何にも別の物じやない。皆此あたゝかみ一物の事じや。影も形も。目も鼻も無い物なれど。萬物一躰の主。一ツ以て之を貫く。有難ひものじや。此萬物一躰を。惡ふ心得て

屎も味噌も一ッ躰じやと思ふは間違ひじや。此一佛は清淨潔白にして。すこしも穢のない事が。萬物の上に有ッて一ッ躰じやといふ事。じやによつて。一切萬物の形の上に。うくる草木はをのがさま〳〵。春雨のわけてそれとはふらねども。米屋にうけては米商賣。酒やにうけては酒商賣。紙屋にうけては紙商賣。烏にありてはかあ〳〵。雀にありてはちうく。梅の木に梅が出來。柿の木に柿が出來るも。うくる草木はをのがさま〳〵。

岑の松谷のかしは木いかなれば同じ嵐に音かはるらん

風は平等一枚の。風にかはりはなけれども。まつにあたれば颯々の聲。茅にあたればはら〳〵のをと。波にあたれば。どう〳〵の音。かぜに色香はなけれども。うくる所によつて音かはるらん。其當つた所を因緣ともいふ。因果ともいふ。

白露の己が心をそのまゝに紅葉にをけばくれなゐの玉

蓮の葉に置ばもへぎの玉。枯葉にをけばこげ茶の玉。しら露に赤ふなふの。白ふならふのといふ。智恵才覺はない。これで天命に私のない事能ウ御合點なさりませ。萬物一體。徹塵も私心のないゆへに。三千世界が無心境界じや。

大哉乾元萬物資始と易に說れた。其有さまを譬へて御話し申しませう。此まへ京都四條の納涼で。商人鑑といふからくりの見せ物が有ッた三四間程の舞臺をこしらへ。其上にづらりと家をこしらへ。人形をならべ。米屋酒屋扇屋鍛冶屋と。てうど疱瘡見舞のびん〳〵の人形のやうに臺の下で一本の眞木を廻すと。惣〳〵の人形が一時に動く。餅やの親仁が餅を搗。米屋は米を踏。酒屋は酒を量る。扇子屋は扇子をかち〳〵する。其大勢の人形はとんてんかん〳〵する。煙草屋は煙草きる。鍛冶屋はしこ〳〵が悉く。動くからくり。是が乾元萬物資始といふ。一體の眞木。一本の働で。三千世界が一切其まゝに。一以て之を貫く。無心境界。天命で

生てゐる。此天命に率ふて。見たり聞たり。思ふたり知るといへども。我思案分別で知るにもあらず。

難波津に咲や此花冬籠分別なしにさくや此はな

梅の花が咲く〳〵と。こちには忘てゐるけれど。山吹の花が咲き。御替りも無ひかと見舞ひに見へる。さや豆の時分には生鰹がきて同じ鍋で契りを結ぶ。うまひものじや。これを深ひ因縁と云ふ。茄子が出來ると西瓜も出る。おなじ時節に生れ合して顔見合す。是は多生の縁といふ。柿の木に柿が出來。栗の木に栗が出來。鳥のかあ〳〵雀のちう〳〵。世界と一緒に夜が明たり。日が暮たり。萬物一體ひとり狂言。只氣ありて動ぐばつかり。皆是天の御直細工じや。それゆゑ一休和尚の歌に。

風は息虚空は心日は眼海山かけて我身成けり

一切天の働であんまり自由自在が出來る故。ツイおれが此目で見る。を

れが此耳で聞く。おれがするおれが迷ひ付ケた癖と云ふものじや其迷ひを取てやらうと云ふ神道の教。佛道の教。何ンにも替つた事は無い。此外に教は無い。此道理をとつくりと合點すると。腹一ッぱい分別して。山ほど迷ふてゐる。其迷ひぐるめに。迷ひたふても迷ひやうがない。十方世界。森羅萬像。無心境界に成て。此時始めて知る。天地と同根同性なるが故。五臓の神君安寧なりと目が覺る。何と天の所爲は大きなものじやないか。けれども此天が。ツイハ見へにくい。ソコデ蜆貝に一ッぱいほどなことを。どうのかうの〳〵ト小言いふてゐる。是を天にあはぬと云ふ。其小言の溜りが天地の間に納め所が無い故。朝から晩まで死人擔け廻りて。どうせうぞいな〳〵と相談に歩行のじや是を譬へて見れば。一ッ本の眞木の廻るに隨ふて動く人形の。糸に間違ひが來ると其人形がぎつくりしやくりして。働が無調法に成り。何所ぞで糸が切ると餅屋の親仁が餅を搗〳〵ころりと頓倒る。米屋の男が米踏〳〵ころりと

こける。天の眞木一本が廻ると。十万世界。一切萬物。人間禽獣。江河の鱗類。草木まで。動きはたらくからくりゆへ。天から〳〵じや。加賀の千世の發句に。

千なりや蔓一すぢのこゝろより

此スウ〳〵の息が切れると。此間まで張合してゐた人がゆふべころり。昨日までもの言てゐた人が先程倒。何ン時糸が切れふも知れぬぞへ。心なさりませ。何ンと脆ひものじやないか。皆御用財寶を藏に積とも此息の引れぬ時は何となるべき

其内をれが〳〵と我ばつかり立る人は。どふでも内證の糸に間違ひが多ひゆへ。切れやうも早い。無理に引切るのじや。天が首を東のかたへ向ケさつしやると。どつこいと西向く。天が手を向ふへ延さつしやると。そんなじやないと引込める。糸が切れる筈じや。此身此まゝ天のまゝのものを。我まゝにする故間違が出來る。じやによつて天命の此息に。間

違ひの出來ぬやう。養生に無理はないか。商ひに無理はないか。不忠不義。不孝不悌には無かと。日々に新たに。時々刻々に新たに。吟味せにやならぬ。元直は幽かな。スウ〳〵で脆ひ物じやけれど。また二十貫目三十貫目の重荷を持運びするも。此スウ〳〵の糸で釣上ゲてあるのじや影も形も無ひ物なれど。又強ひものじや。夫で佛家では金剛の性體ともいふ。此天の命にさへ率ふてゐれば一切萬物トント世話いらず。夫〳〵に道はシヤンと備り切ツてあるものじや。

草も木もをのが心と知れば只一ツに盡す道の廣さよ

禪正曰凡學問の師匠は日夜にあり。四季の移代るに。草木の綠。枯葉の有さま。昨日はきのふの有さまを見て。己れらが五體に及ばして見るときは。法界一如にして悉く明らかなり。此法界とは心の事ぢや。心は天が鼻と口とから出這入してござるゆゑ。心に暗がりも明りもない。爰は君子も小人も同し事じや。けれどもこゝろを明らめた人と。明らめぬ

人とは大分損得のある事じや。夫を譬へて見れば。暗がりで火を燃さずに。説話するやうなもので。淺黄やら。萌黄やら。扇子やら。煙管やら見へ分らぬ。ソリヤ口でいふても知れてあるけれど。今一越不自由な所がある。是が性に率ふと。率はぬとの違ひじや。先ヅ此性の尊ひ事を。能ウ御合點被成ませ。日月天に懸り行道なさるも。性に率ふてござるのじや。天の五星二十八宿。其外目に見えぬ微塵の如き。星様までも皆性に率ふてござる。天地の間に性に率はぬもの何があるぞ此肉眼では見えにくい。天眼を開ひて見よ。日月より尊ひ所がある。日月にも親御様があるぞ。其親御様がツイハ目には見へぬ。是が尊ひ天上じや。此尊ひ天上には無聲無臭方所方角もなく。虚空と同じ事じや。何ンにも影形はなけれも。ふしぎなものじや。肴やが通れば腥いと知り。太鼓が鳴ればどんと知る。萬事に應じて跡なし。もとの虚空でなんにもない。死人にも目も耳もあるけれど何ンにも見へぬ。どん〳〵は聞えぬ。即今此やう

に活てもの云ふてゐるものは何ものじやぞ。考て御覽じませ。是が直に天の性ぢや。此天のおもひが。三千世界一ツぱい詰り切りてあればこそ夫を心として此やうに動き働く。是を周徧方界といふ。何ンと大キな物じやないか。此上に何の不足があるぞ。有リヤせまい。してみればモウ能イ加減に足納してをれが〳〵を。離して仕廻ふたがよいじやあるまひかい。此やうに云ふても。御まへがたやつぱり。一寸の虫に五分の魂ゐを能ウ忘れぬ。難議なものじや。みな幼少から覺込んだ癖と云ふもので是非もない事じや。能ウ考て御覽じませ。其割にして見ると。四十尋の鯨は二十尋の魂ゐで。人は五尺の骸に二尺五寸の魂ゐと云はにやならぬそれでは半身かなはぬ中風病じや。魂ゐが腹より上にあれば腰から下は御留主。腹より下にあれば。臍から上は痿て。何にも役にたゝぬ。心は其やうな小サイものじやない。骸の百增倍有ても間に合はぬ。三千世界外迄詰り切ツてあればこそ。長崎へ往てもはたらかれる。江戸へ往ても

目も見へる。耳も聞える。天地の外まで一ッぱいの心ならこそ。自由自在が出來たものじや。けれど目には見えぬ。是が日月の親御樣じや。此日月の親御樣に御近付にしたいばつかりで。名がたんと付てある。名は敎の爲じや。萬や太郎兵衛樣どこでござります。是から五軒め。ハイ忝ナウ御座ります。ソレ名が無ければ敎られぬ。夫と名も無しに。わしが行く所は何所で御座ります。ねつから知れるものじやない。內へ去で問ふてごんせ。といふより仕やうはない。敎の爲の名じや。其名に迷ふて迷惑する。誠の所に名は入らぬ。ソコデ一休のうたに

釋迦といふ徒者が世に出て多〳〵の人を迷はするかなあんまり御釋迦樣が。御慈悲深ひ余りに。どうぞして此日月の親子樣に近付にしてやりたいと思召て。色々樣々と。物に譬へ。名によそへて。敎な御立なされた。其敎の名に迷ふて胡亂るものが多ひ。吉田の兼好八歲のとき此名に疑ひを起された。申シと〳〵樣。と〳〵樣やか〳〵樣の。

か〳〵樣は何ンといふへ。祖父樣祖母樣と云わいの。その祖父樣祖母樣のとも樣かも樣はなんといふへ。曾祖父樣曾祖母樣のとも樣かも樣は何ンと云へ。曾祖父樣鶴の祖母樣と云わいの。其鶴の祖父樣龜のばゝ樣と云へ。大方龜の祖父樣龜のばゝ樣と云わいの。其龜の祖父樣龜のばゝ樣の祖母樣のとも樣かも樣は何んといふへヲヽモウあの子わいの。わしは知らぬわいの。モウ名がない。名のある間は迷はれるけれど。名が無と迷ひたふてもどうも迷われぬ。そんなら何も無いものかと思ひなさんな鶴の祖父樣も。龜の祖母樣も皆出所がある。日月もみな親御樣がある。此御方樣には御名もなく御形もない。夫ゆへ無念無心の本佛は。無形を以て體とする。不思議が體なり。思ひ議るべからずといふ字じや。木像畫像といふも。また形があるゆへ世話が多ひ。火事のときのけてやらねばならぬ。此また不思議の尊體は。火に入ても燒ず。水に入ッても腐ら

ぬ。墨壺に入レて置ても黒ふもならぬ。砥かけても薄ふもならぬ。何と云ふたもので有ふな。能ウ考て御覧じませ。其姿の大サが。六十萬億那由多恒河沙由旬。兩眼四大海水の如しと。大キナ佛様じや。あんまり大キナで目に懸らぬ。思慮分別もとどかぬ。不思議の尊體。算盤にて千萬年勘定しても。分量の知れぬ大キナ佛なれども。虱の陰裏の中にも。芥子の粒のうちにも。一ツ盃に滿て。そして小サウもならぬ。祖父祖母の骸だに有ッても皺もよらず。娘や子息の骸だにも一ツ盃つまつてあれども。伽羅の油の匂ひもせず。年もよらず若ふもならず。生れぬ故に死もせず。此佛の我々も同い年なることを。能ク合點すれば。神佛聖人も。一切萬物。銘々共も。猫も猿も心としてゐる。萬物一體。孔子の御心じやとてびいどろのやうにもない。熊坂のこゝろじやとてマッ黒で。圍炭のやうにもない。惡ひ事するは。我勝手でするけれど。腹の中に惡ひと知ッてゐるは。此親御様が御合點なされぬのじや。

傀儡師胸にかけたる人形箱佛出そうと鬼を出さうと地獄餓鬼畜生あしゆら佛菩薩何になろうとまゝな一念一休和尚小僧の時に。或侍が地獄如何と尋ければこなた衆が夫を問ふて何にするぞ。ちよこざいな人と。持ッた扇子であたまをピシャリと扣く。侍こらへかね。ニックイ小僧と反打かける。ソレ〳〵それが地獄じや。侍ソット手をつき有難き御示しといへはソレ〳〵それが則極楽じやと仰られた何を出そふとまゝな一念じや。即今の此一念が大事じや。此一念ぶつ〳〵浮ム念じやとて。何ンぞ見るか聞かせにや出來るものじやない寒いとか暑いとか。痛いとか憎イとかや。一念うかむとふつ〳〵と消へ消へするばつかり。何ンにも跡も形も殘るものじやない。それを段〳〵珠數繋ぎにして。なぶりものにしてゐる。惡ひ癖じや。ヒヨット憎ひと一念浮むと。その跡からどうしたら。あいつがこまるであらうぞ。かふしたら難義して。詫言に來るであらふ

かと。向ふへばつかり。ホン〳〵迷ふて行。其跡から段々と消てあるもしらず。ないもせぬからつぽの珠數繋ぎの念に絡ひつかれて。ハアスウ〳〵。是を自縄自縛といふ。たはいもない事じや。一念迷へば獄卒鐵杖を振揚る。一念了解ば聖衆蓮臺を傾ぶくと云ふて。三世の諸佛が禮拜なさる。一念開くとは。念を捨て我身に立かへる事じや。何ンにも六ツカ敷事はない。たんなうするばつかり。

何見ても何を聞ても有難や此仏佛の有ん限は
麥の出來るも。米の出來るも。雨の降るのも。風の吹のも。東から御日様の出さつしやるも。ちう〳〵かあ〳〵も。大根〳〵茄子〳〵も。時の鐘の聲も。我たつた一人への御馳走と。足納して見れば。誠に胸の極樂世界じや

足納をするとせぬとの胸の中地獄も有ば極樂もあり
有難や我本尊を開くれば森羅萬像彌陀の全體

一切萬物たつた獨への御苦勞と。足納してみれば。向ふから無理いふて來るの迄有難なる。此様に無理な事言ふたり。したりすれば。人が憎むほどに。かならず無理なさんすな。御まへの身代りに。わしが憎まれて進せますといふのじや。扨々有難ひと。御禮申さにやならぬ。能ウ御心得被成ませ。わしは御まへの身代に命を捨て御異見申すのじや程に。隨分御愼被成ませとの御敎化。此身代の御光明は拜みにくひ所じやけれど。能う合點して御覽じませ。心中身代投首くゝりまで。皆我身代に命を捨て御助け下さる御恩德。扨も〳〵有難や。忝けなやと。足納したとて。誰も呵るものはない此心が即佛といふことで。心と佛と衆生と此三ツに差別はない。同じ事じやといふてござれど。イエ〳〵所詮我等風情中々及び絶た事じやと。ちやんと門入れてゐる。夫でも佛様は氣が長ひ夫其心を身に立歸りて見よ。其儘直に佛じやわいやいと。いふてござれど片意地もの。イエ〳〵私どもがやうな凡夫何ンとして〳〵と。め

つた無性に辭義して逃廻る。其筈じやかげでは。ハアスウ〳〵。ばつかりじや。

何見ても何を聞てもなさけなやたゞ煩惱に身を任す故

何がほしいかゞほしい人の役じやないぞへ。たゞ今日の天命の性に率ふて。善心を起して見たがよい。有難ひ事ばつかりじや。雨露にも濡す。一日空腹め寒ひめしらず。此上に何があるぞ。玉樓金殿も寢た時は一枚敷。百千萬石の御殿樣でも。千石萬石も上られぬ。御腹に一ッぱいじやスリヤ銘々共も同じ事じや。何にもかわつた事はない。萬貫目持の御隱居樣が佛壇に向ひ。有難ひと思し召一念も。銘々共が有難ひと足納した一念も。有難ひに二ッはない。御姫樣の有難ひのじやとて。梅花の匂ひもせず。乞食老婆の有難ひのじやとて。砂まぶれに成てもない。たゞ有難ひ中からでなければ。善心は起らぬ。身に立歸て御覽じませ。大體果報な身の上じやない。扨日月の親御樣に。名のたんとある事は。皆敎の爲じや。是も序にたとへて申シませう。私が名は道二と申シます。此道二と云ふは通名で。其道々から呼ぶ時は。色〳〵樣〳〵の名が付てある先ヅ私が悴から呼ぶときは。私を親仁樣といふ名がある。女房からは夫といふ。又こちの人ともいふ。親の道からは。私を悴と云ゝ兄からは弟といひ。弟からは兄貴〳〵といふ。君の道からは臣といひ。家來からは主君といふ。道といふ名は惣名で。それ〳〵の道からは色々と名がかはる。吾れ人固有の本心を。金剛にたとへた所からは。金剛經と云ふ。目には色を視。耳には音を聞く方からは。觀音とも。普門品とも云ひ。蓮華に譬て說ときは。妙法蓮華と云ふ。又は彌陀と名をかへ。其道〳〵からいふ時は。此經より外に尊ひものはないと云ふてある。其筈じやつた一ッで同じ代物じや。扨此經と云ふは。常といふことで。常とはとつとむかしの聖人や。佛菩薩二敎置れし言も。また是から後の世に聖人佛菩薩が出さしやつて說かれても。今ある御經や。四書五經に少しもか

はらぬ。どの様な聖人佛が出て説ふとも。親に不孝にせよ。主人に不忠せよとは教へぬ。諸の惡を作るな。衆善を行へと説給ふが。諸佛の通戒なり。みな三教共に本心に率ひ。五倫の道を勤め行ふの教なり。是が萬古不易。常住の御經なり。然れども御經、いへば六ツかしく。聞えにくいごとに無上靈寶。甚深微妙。無類飛切の御經がある。そしてちんぷんかんの聞にくい事ではない讀さへすれば分解も知れ。忽に御利益がある。殿方様へも私が授けませう。能く持なされ。

一親子兄弟夫婦を始め。諸親類に親しく。下人等に至るまで。これを憐むべし。主人ある輩は。各々其奉公に精を出すべき事。

是即今日の天命此外に人の道はない。尊ひ天上じや。何ンと經は尊ひものじやないか。此有難さを身に立かへりて知るのじや。聖人神佛の教も皆心の譬喩。八千余巻も一切の書物も性のたとへ。それで何の如し。彼のごとし。此如し此如しと云ふは。譬喩といふ事じや。誠の事は口で

言れぬ。文字に書れぬ。蓮師の歌に。

法華經は寢亂髪にさも似たりとくにとかれずいふにいはれず

口で言ふとモウ違ふ。砂糖を舐れば甘い。蕃椒喰へば辛い。此辛い事知らぬ人が問ふてござる。申シとうがらしのからみどんなものでござります。ハイとうがらしの辛み。どうも口では言れぬが。辛ひをたとへてみれば。舌がぴりぴりするやうな。ソレ知らぬ人には譬て言ふて聞すより外にしやうはない。夫で辛は舌がぴりぴりするやうなと覺てゐる。又外の人に問て見る。申シ蕃椒の辛味どんなものじやへ。されば蕃椒喰て辛ひは。頭がくわつ〳〵として。涙がこぼれるやうな。ソコデ辛ひは頭がくわつ〳〵とすると思ひ。又舌がぴり〳〵するやうな。ハテめんやうなと迷ひ出す。ソレ口で言へばモウちがふ。人に問ては間にあはぬ。佛様の説法も其様なもので。色々様々と譬てある。其譬に取付。名に迷ひ形に迷ふて。うろ〳〵迷惑する。其人に蕃椒喰すと直

に知れる。成程からいは此事じやと得心する。本心知るも其通で。喰て見ねば本眞の味ひが知れぬ。夫を喰ても見ずに。どうのこうの〳〵と迷ふてゐるのじや。小言ばつかりいふてゐる。ぴり〳〵とくわつ〳〵と迷ふてゐるのじや。誰でも骸の片付は知つてゐる。焼けば灰。埋めば土。知れた事じやけれど肝心の片付が知れぬじやによつて。骸が邪魔に成て。みな難義するどふぞ是一ツは知ツて御覽じませ。是が錢金のいると云ふ事ではなし。本心を御知り被成た御方が能々善い事ならこう。手間暇闕て此やうに御世話なさる事じや程に。是ばつかりは知ツて置たがよい。何にも六ツケ敷事じやない。我に我のない事を知るのじや。是が人の腹の中を知るのではなし。我手に我腹の中を吟味するのじや。とつくりと腹の中を僉議して見ると。本心と私心とふたつあるやうで甚だ紛しいものじや。此わからぬあいだを天邪子といふて。山へ行ふと云ふと海へ行ふと云ふ。川へ行ふと云へば里へ行ふといふて。うろつかしをる。天を邪に見てゐる故。

天のよこしまのことといふ。一家親類知音の中に。貧窮で難儀な人を。少々づゝ見つぎ施し救はんとすれば。よしにしたがよい。其様にしては節季がつまらぬ。第一癖に成てわるいといふておさへる。如何さまこれは尤な事じや。隨分始末して物のいらぬやうに家内を見集め治めねばならぬとおもへば。氣がつまつてたまるものじやない。折には酒も飲。芝居も見たり。遊山にも行。氣を養ねば病が起る。命有ての浮世じや。たとひ錢金が出來たとて。世間で乞食のやうにいはれて。生てゐる甲斐もない事じやないが。イヤイヤそふではない。世間からどのやうに言たとて。貧乏の足しにはならず。兎角錢金さへ出來たら。何時顔を張ふとまゝじやと。腹の中のせり合ひ。兩方ながら尤らしい樣にもあり。どちらが本眞じや。とんと分らぬ。與勘平じや。我がおれが。己が我がと。化され通しじや。芝居でする與勘平は。狐でも忠義のものじやけれど銘〳〵どものは人欲の與勘平じやによつてだましぬきおる。ぴりぴりで御

座りますの。くわつ〳〵でござりますの。何にもしらぬが虚空じやの。天斗で我はないのと。しやべりぬきおる口松じや。難儀なものじや。本心の與勘平はもの言はず。何ンにも言やせぬ。しらんかしてあほうのやうに見ゆれど。衆理を具て萬事に應ずるゆゑ。ねつから世話いらず。ソコデ人欲の與勘平に。とんと用がないやうに成てくると。何の間にやらじみ〳〵と消て仕廻ふそうすると。本心の與勘平ばかりに成て。今日我身に備たる道が太切に成て。主人や親が有難く。銘々の宗旨〳〵は尚有難ひ事が知れて來ると。莚のうへも足納して。我家業が大事になり〳〵彌子孫長久の御祈禱じや。結構なものじやぞへ。人は此ホン〳〵さへ止むと。ハアスウ〳〵もないやうになり。大酒飲だり。勝負事したりする事が。役に立ぬといふ事が知れる。大體有難ひものじやない。此又勝負事はさする人がある。せにかねたんと持ながら。慳坊の柿の實。慈悲も情も知らぬ。石部金吉かなさいぼうと云ふ人があるものじや。其やうな小

人に金銭たんと持すと。欲に欲を積累ね。埒もないことおもひつひて。賣〳〵買〳〵。世界の咽じめ。夫から首紐と種々無量の難儀が出來る。金硝目に入ッて腦をなすとて。金ほどよきものはなけれども。金の粉が目にいると旨目になる。小人の金持は。金が却て毒と成る

欲深き人の心と降雪は積るにつけて道を忘るゝ

足ることを知る心こそ寶船物の數〳〵積置ず共

夫を數〳〵積貯たがるゆへ。何を云ふも金の事じや。金が無ければどふもならぬと。ハアスウ〳〵。皆肝症だちの病と成て。人のするほどのことが氣にいらぬ。そういふ立煩ひは本復が出來難ひ。町家でも百姓でも少〳〵の貯が有ると。天にも地にもないやうに思ふて。めつたに高ぶり。己は金持じや。傍寄〳〵と言てあるきたひ。おかしい病じや。どのやうにしたとて。町人は町人じや。鍋錢でも文錢でも。一文に斗通用は出來ぬ。凡人夏の虫。飛で火に入る。火宅の苦しみ。皆ホン〳〵が過

る故　頓死頓病、欠落身なげ。首くゝりもや。

暗きより暗き道にぞ入ぬべし遙に照せ山端の月
古への明徳を。天下に明かにせんと思ふならば。先本心を知るべし。知ることを致せば。意が誠になる。意が誠になると。人と和合の道が調ふ和合さへすりや。家内安全。子孫長久。此外に教は入らぬ。天下泰平の外は學問も入らぬ。

家内安全

心だに誠の道にかなひなば祈ずとても家内安全
子孫長久の學問じや。天下泰平の外に誠はない。誠は人の心なり。誠の外に人はない。虚言は我身を調伏してゐるのじや。金銀財寶たからとするに足らず。楚國には寶とすることなし。惟善もつて寶とす。さま〴〵の教はあれど惡を止め善をするより外に道なし善をするとは。別にたくんでする善は役にたゝぬ。たゞ今日の己れ〳〵が道を全ふ勤めてゐるが。善を行ふてゐるのじや。

道といふ詞に迷ふことなかれ朝夕をのが爲業と知れ

夫をみな名に迷ひ形に迷ひ。所書ばかり讀て。向ふへは行ずに。子曰。何屋何兵衛〳〵。何の益もない事じや。一切の經文一切の書物は。我本心を知る所書じや。明徳を明らかにせんが爲の楷梯じや。屋宇へ昇るにの上で長ひ楷梯をぶらぶらふり廻して。あぶない事じや。怪我人が出來ると言ふも聞ず。鼻ばかりたかふして。子曰。何屋何兵衛〳〵。所書ばかり讀でゐる。そのかたはきでは釋迦如來が强ひの。阿彌陀樣が勝じやのと。自慢するを。神道者は聞て。あら勿體なや。我神國を汚す夷狄の法。拂ひ給へ淸めて給へと鈴振立る。又一方では。法華は箒でたゝかれる。門徒は門を鎖められた。淨土は錠をおろされたと。名ばかりでせり合してゐる。肝心の本家ばきよろりとしてござるに。何の爭ひじや。

わけが知れぬ。

さつぱりと埒の明たる世中に埒を明ぬは迷ひ成けり

役にもたゝぬ論を止めて。たゞ今日の天命を太切に勤め行ふが。性に率ふ。之を道と謂ふ。或書に。神道の正直を以て。佛の戒行を保たば。儒の五倫五常は。守てゐるといふものなり。

かくしたるよりあらはるゝはなしすこしきなるよりあらはるゝはなしゆへにくんしはそのひとりをつゝしむ

莫レ見乎隱一莫レ顯乎微一故君子愼其獨一也　中庸一章ニ

すべて物事隠す事ほど早う知れるものはない。その中悪い事ほどはやう知れる。悪事千里といふて忽知れる。こわいものじや。和泉式部の歌「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるゝ。此香やは隠るゝとは。こちには知らずにゐても。何の香。かの匂ひと。香が來る〳〵といふ事じや。是をたとへて噺しませう。少し尾籠なはなしなれど。堪忍してお聞なされ。或茶屋の座敷で客がおやまと火燵に當りて遊んでゐる。時に氣の毒な事じや。出ものはれもの所きらはずとて。お山が放屁をすつとした。其くせ音のせぬのじやによつてひどい。お山もはつと思ふた。けれどさすが勤なす身じや。鏡袋から伽羅を出して。そつと薫てまぎらかさんとする。其側にゐる座頭が鼻をひこ〳〵して。申シどこそ

此邊に木薬屋は御ざりませぬかへ。お山が何としてへ。座頭がハイどふやら木薬屋に糞取やうな嗅がいたしますといふた。天地は明らかなものじや屁を放ば屁の匂ひ沈香は沈香の匂ひと香が來て説法する何と明らかなものじやないか。隠れたるより顯かなるはなし。隠す事はならぬ。是じやによつて腹の中に埃を溜て置ずと。どなたも早ふ懺悔して御仕廻なされ。懺悔とは。腹の中の洗濯。悪人も首切れて仕廻へば。罪が亡びて成佛する塲の明たものじや。飯喰ふ跡の棚本仕廻ふやうな事してゐるのじや。去によつて君子の腹の中は日々に新に掃除がよいので清浄な。此君子の腹の中をたとへて見れば清浄な白紙のやうなもので。其白紙にちよつと兎の毛の先ほどでも。墨が付と忽顯れ見える。明らかなものじや。又銘々共の腹の中は。第一不掃除で日々の埃が溜り牛部屋か馬部屋のやうに成てある。ソコデ猫の屎やら。鼬の屎やら。積上て有けれど。大栗な埃が有ても。格別目立もせず。ごもくとも穢とも思はず。夫が常

と成て暮してゐる。是が本心のあるじがないゆへ。明屋同前詰らぬものじや。いかんとも仕やうのないは佛なき堂へ參た心地なりけり近所から塵埃捨に來る。子供が逢合傘書たり。べかこ書たりして。犬までが雪隠にする「つれ〳〵草に。主なき家にはきつね梟やうのもの。所得顔に住なれて。こたまなんど。けしからぬ事も出來ると。何事が起ふやらしれぬこはひものじや。滄浪の水清らばもつて我纓を洗ひ。濁ばもつて我足をあらはんと。在郷の子供が謡ふを。孔子が御聞なされて。小子是聞。水が濁らば足をあらひ。清ば冠の緒を洗ふ自ら取之と御示しなされた。何ンと有難ひ事じやないか。本心好の所へは寄來るものが道の咄ばつかりする。誹諧すきの所へは。誹かいの噺しばつかり。淨留理好きの所へは。寄たがるものが淨留理の事や。芝居のはなし。ばつかりして皆此方の腹の中のものが寄たかる。能ウしたものじや。潮戸門の奇麗に掃てある所へは。めつたに犬が小便もするものじやない。又じだらくで不掃除

な所へは。色々さま〴〵の塵埃捨に來る。夏向飯がくさると虫が涌。アレモ飯のわるうならぬさきに。どこぞに飯のくさるのはないかと。虫が涌て待てゐるものでもない。是で能ウ御合點なされ。わざはひも災難も外から來やせぬ。皆腹の中から御出〳〵して招きよせたのじや。權兵衛惡いやつ。ゆふべ能寢てゐるものを。能イ智亡市があるこいといふてつれてゆき。寢むたいめしてころりと一貫。今日はいつそ野怪じや。休にして芝居見に行。惡いやつじやと。向ふばつかり恨んでゐる。向ふの惡ひのじやない。此方の腹の中に智亡市を持合してゐるゆへ御出〳〵した事はしらずに。權兵衛ばつかり惡ものにしてゐる。是が腹の中に智亡市のない。正しい人の所へ。今夕ちよぼいちがござります。御苦勞ながら御出席下さりませと。どふまあ僞はづかしい言て往かれるもので。皆腹の中の事じやぞへ。又女中方など鏡に向ひ身仕廻ひなさる。鏡に用はない皆此方の用事ばつかり。髭はゆがみはせぬか白粉はまだらにないかと

夫を吟味するのじや。ソレみな此方の用事で有ふがな。神佛に向ふてもその通り。向ふに用はない。此方の心に不淨な事はないか。不忠不孝はないか。商賣に無理はないか。人に難儀をさせてはいぬか。子孫斷絶するやうな事をしてはいぬかと。我心身を神前の御鏡に向ひ。にこ〳〵すればにこ〳〵する。こはひ顏すればこはひ顏がうつる。鏡は神の中略にて。中の我を取れば則神じや。我正直の心をうつして。どうぞ今日人の道を間違さぬやう。親類緣者と怨恨を結んではいぬか。家來をむごうしてはいぬかと。節季に不足錢拂ふてはいぬか。惡銀をよい銀にして遣ふてはいぬかと。腹の中を吟味して。不淨な心を萩ひ給へ清め給へと。鏡に移して改め愼しまば祈らずとても家内安全息災延命。子孫長久の御祈禱じや。銘々どものやうな小人は。此裏道から向ふばつかり期にして。どうぞ此たびの買物。利潤得さして下さりませと。神佛を媒か。取上婆のやうに思ふてゐる。暗

いものじや。夫じやによつて主人のものを私してはどうぞ知れませぬやう。千貫目もある所から私を跡取りに所望致しますやうな所はござりませぬが。扨私は大分借錢がござりますし。どうぞ催足致しませぬやう御守りなされ下さりませ。いつそ先の人が死だら。猶勝手で御ざりますし。目を明て魘てゐるやうなものじや。暗いものじや。今日の天道には恐れず。書出しと掛乞に逃廻る臆病者。不忠不孝の借錢は。土に成ても。水に成ても償はにやならぬ。けれど夫ぐるめに稼ひ給へ清めたまへ。其外様々の願ひ事。何もかも一緒に打込で。いつそ一束にして諸願成就。あんまりあつかましい。コリアあなた方の事じやない。皆私が腹の中の懺悔じや私は若いときから大不行でこんな事ばつかりいふて。神佛をなぶりものにしておりました。勿體ない事じや〳〵。今でも其やうな鬼めが腹の中にうろ〳〵して居りますゆへ。折〳〵降伏するので御ざります。其相伴じやと思ふて御聞なされて下さりませ。夫なら神佛は寄願を叶へ

さしつしやらぬものかと思ふが。中〳〵そうした事じやない「千早振神も願ひのあるゆへに人の値偶に逢ぞうれしき此神も願ひのあるゆへとはどふじや。てやりとふて〳〵どふもならぬ。夫が神佛のねがひじや。神佛は一切衆生の願ひが。かなへへあれば何でも叶へて下さる信心とは我心身を誠にするのじや。けれど誠がない。皆うその願ひじや「祈りても驗なきこそしるしなれ人の心にまことなければたゞ此方に誠がない。願をかけたら願ひ方の心も骸も。願の通り勤るのじや。身に勤めにや役にたゝぬ。立身出世がしたくば。主人大事親大事。是ばつかりでもよい。立身出世するのに違ひはない。家内安全も商賣繁昌も子孫長久もさへすりや。何でも成就するに違ひはない。此やうにいふと又親御のない御方が我等はどうせふ孝行の仕どころがないと思ふてござろが。そう

じやない。親御は一世といふて。天地あらん限り心が一世じや。さるによつて此身が直に親御様大事にかけよ。父母の御遺體じや。和論語に。藤の朝綱の曰双親むなしといへども。我身直に父母の遺體なれば事々物々父母の行ひにて。茶を飲もめしを喰ふも。父母の御行跡なれば。一言一行も欺く事なし。故に我常に一息のあいだも。我心にする事なしとあり。大體大切にせにやならぬといへば。又早合點の御方が有て。成ほどそうじや。此身が直に親父様じやによつて。わしが酒を飲たいと思ふが直に親父様の思召じや。是を上ますが孝行じやといふては呑。此やうに仕事の仕とむないは御兩親の御退屈なさつたのじや。といふては休み。又博奕が打たいと思ふ。是則父母の遺體なれば直に博奕を打が孝行じやと思ふてござる御方もあるものじや。夫では仕廻に菰かぶりて。野倒死せにやならぬ。大事の親御様方に。菰かぶらすと孝行とはいはぬ。身體髪膚これを父母に受敢て毀ひ傷らざるを孝行の始めといふ。身を立て

道を行ひ。名を後世に揚て以て父母を顯すは孝の終也と。夫に菰かぶりてたまるものか。此間違があるものじや親を大切にするといふ噺に付て或所の親御様が晝寢してござる其鼻の端に蚊が留りてゐる息子殿是を見て大きに腹を立て。大事の親父様の鼻を喰ふ盜賊めと。側なる割木を以てぴしやりとたゝく。蚊は逃て。親御様の鼻ばしらをたゝき砕てのけたらちもないものにして仕廻ふた。此やうな事がある事ではなけれど。面白い噺しじや。世界の難儀といふは此やうな事から始る。よひ事でも悪い事でも。一遍に片よる時はみなこんなものに成て仕廻ふ。むかふに期こしらへて。もとめてする事は役に立ぬ。人にものを施せば。其身の功徳に成と聞て。盜しても施したれば功徳になるやうに思ふ。心得違ひが出來る。こはひものじや。教によらにやならぬ。そふないと買物は無理に直切。賣物は高利を貪り。人の汗あぶらをあつめて家内を養ひ大きな顏して年忌法事勤むるは。皆親先祖の鼻ばしらをたゝきくだいてゐるのじ

やぞへ。去によつて此體に少しでも不實な事があると。直に親御様方を地獄の釜へ突落すのじや。胴欲な事ではないか。五刑の類ひ三千。罪不孝より大なるはなし。故に日々に新に戰々兢々と。たゞ此身に誠を勤め行ふより外に人の道はない。鏡にかげのうつるがごとく。白眼ばにらみ笑へばわらふ。鏡に少も私心はない。是即鏡の徳。夫に白眼付て鏡を見るに。笑ふ顔の移るのは鏡の化ものといふものじや。不忠不孝して も仕合よく。不養生しても息才延命の諸願成就する神佛なら。化ものといふものじや。跡で小言が出來にやならぬ。兎角向ふに用はない。たゞ此方の勤めに有事じや聖徳太子の御歌に

「極楽ははるけきほどゝ思ひしに勤めていたる所なりけり

と有難い御歌じや腹の中にむさいもゝないやう

「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん

故に君子は其ひとりを愼しむ。前方江州高宮といふ宿にて。道話の御ざりました其時。提灯屋の長八といふ人が前訓を聞て。此獨を愼事を勤められまして御ざります。是は親御様が後妻を入れてから親子喧嘩が始り四五年程も。往因が切て有たのじや。それが前訓を聞て扱々有難い事じや。いかさま人と生れて此やうに親子一生不和で暮すといふは人の道にはない事じや。犬か猫の様に親子咬合するとは何の事ぞ。さてゝあさましい事と。始めて目が覺た。夫からとうゝ詫言仕負せた。是が向ふかまはず一生の間詫言仕通しの行じや。だゞ我ひとりをつゝしむのじや。又親に詫言するは。借錢の詫言とは違ふて大體仕よひものじやない。けれど心學の力がないと。其詫言仕通しの行が出來憎ひ。此本心を知るといふは有難いもので。人は天地の活てゐるのじやといふ事が慥に知れる故意もなく必もなく固もなく我なしに成て天窓のきり〳〵から爪先まで。天何をかいふや。四時行はれ萬物生々するばつかり。堯舜の道は孝悌のみ。此外に少しも我はない。我がなければ出過といふ事がない。夫で親

子の間が調ふたものじや。「いさかひは實に山びこのこたまかや我しづまれば向ふ音なし能くしたものじや。本心をしると何にもいふ事がない。たゞ今日の天命が請取前じやといふ事が知れて有ゆへ落付て今日を暮らす。有難いものじや。夫に肝心の我心を知らぬものは。當どなしの旅するやうなもので。わが落付所を知らぬ。たとへば道中にて駕借て先乘たはよい。扨駕かきが申し旦那樣どこまでやりませう。ハテどこと事はないわい。ヲリヤ知らぬどこまでなとやれ。ソコデ駕擔が。ハイ〳〵〳〵いふてあちらへ昇て往たり。こちらへ持て行たりしてもねつから行先がしれぬ。夫で駕かきもうろ〳〵乘人もうろ〳〵。とんと天竺浪人。雲介もかゝり合。難儀なものじや。人は孝悌忠信といふ落付所がないと。朝から晩まで當所なしの長旅。雨が降といふてはうろたへ。日和に成た。米が下るといふてはおどり。斯いふものがはや出したといふては錢かねをへらし。芝居は何々をする遊山にも行にやならぬ。網打にも行にやならず。しか〳〵斯錢もふけがなふては濟ぬ。何ぞよい事はないか此やうに世間が暇では孤が難儀するの。狸の喰ものがないの。何をいふも銀の事じや。金がなければ遊んで暮されぬ。思ふ樣に奢れぬと。明ても暮てもうろたへさはぐ。旦那どの〳〵落付所がないと。家内諸ともあてどなしの長たび路。欠落分散ぼつ立らう賑やかな渡世じや。孟子の曰人の道あるや。飽までに喰ひ暖に着て。逸居して敎なきは禽獸に近し。鳥けだもの〳〵。御中間じや。其鳥獸でもおのれ〳〵が家業を情出すやう。節季に斷いふた鳥もない。雀や鳩がつゐに商賣が合ぬといふてかほを顰た事もない。狸や狼が袖乞に出た事もないじやによつて。此衆たちに敎は入らぬ。朝から晩までおのれ〳〵が道を守り。雀は雀。烏は烏し ちう〳〵かう〳〵と精出して勤るやらつゐに烏が請人に預けられた汰沙もない。たゞ忠孝の二ッを。あの衆までが進めてゐるに。去とてはしぶといものは人じや。夫ゆへ御世話なさるのじやによつて敎にやならぬ。又

此長八殿の朋友が五六人もある。其衆達は禪法を聞彈つて。おれが〳〵といふ鼻高連中じや。皆能ウ御心得なされや。此禪法といふは至て大切な事じや。夫は悪ふ聞廢るととつけもないものに成て。耳取て鼻かむやうな事ばつかりいふて樂としてゐるものがある。ソコデ長八殿がどうぞ此方の道へ引入んといろ〳〵様々世話すれど中〳〵合點せぬ世話すれば する程。先の鼻が高ふなる。夫でも長八殿は上根に。折々見廻ひ機嫌をとり此方から禮をあつふすれども後には途中で逢ふても。ものをも言はず不禮をなす却て人中で恥しめるやうなことなどある。さしもの長八殿もほつと情つかし大きに腹立て。私へ御相談じや扨此度御影で。本心の有難ひ事を存じましてアノ衆中は年來の朋友でござりますゆへ。何とぞ此方の道へ引入んと世話をいたしさま〳〵進めますれど一向取あへず。却て無禮を致し。人中で嘲弄致ます何とも此段心外に存じますがかやうの時はいかゞ致しますが。能ござりますと。御尋ねじやソコデ私が申ま

すは。能物を合點したがよい。此方からは禮を盡し。誠を以て尊敬するに却て憤りを起し嘲るとはソリヤ片輪といふものじや。其片輪者を相手にして腹立るといふは。此方が片輪者の弟子入するといふものじや。何の其片輪者の爲に腹立て遣らいでも大事ない事じや。先此方から禮を厚ふすれど。向ふから不禮をするとも間違。夫が向ふに取られてゐるといふものじや。此本心を知るといふは外の事ではない。其所を自得するのじや。高で向ふに用事はないと吟味するのじや。故に君子の學びどころは此ひとりを愼しむばつかり。常は君子も小人も同じ事何にも替た事はない。石川五右衞門じやとて白眼詰にしてあるくものでもない。けれど物事節に當ると節にはづれるとのちがひで。君子と小人がわかる。譬ば今日其日過の人が。大こん〳〵なすび〳〵といふて賣あるく間は。皆節に當てゐる。君子に賣しも其通り。同じ事じや。コレ大根と呼ぶハイ大根なんぼ。といふから節

にはづれる。大概拾文に賣りてよいものを三十でごんすといふ。なせなればひよつと。向ふが二十位にも買ふかと思ふて節にはづれるソコデ買人も十文に直ぎりてよいものを。六文にさんせと節にはづれる。夫から大根賣がむつと節にはづれて。貴樣達に大根は性にあはぬわいのといふイヤ何といふ死にぞこなひおやぢめ。重て此町内で大こん賣す事ならぬと大に節に放れる。夫から双方惡口の言ひ合。何の役にたゝぬ事じや。能合點して見たがよい。高が五文か三文の事で大根一把眞中に置て。歷々の男が節に放れる有さま。何と是が女房子に見せらるゝ姿かい。よつぽど恥かしいものじやぞへ。是も大こん直ぎる時ばかりじやない。平常何ぼも此やうな事は有ものじや。親御樣が呼ばしやる。ハイといふて往ばよい。今少と用がござりますと節に放れる。年寄は氣がみぢかい。用があろとマア來いやい。と言しやるソコデ口の内であた面倒なと節に放れる。夫から段々節に放れる。工合剛いものじや。佛家では此節に放

るゝを地獄と云。又節に當るを極樂といふ。則中庸の中じや。又至善の地とも云。心の本體じや。上天の事は聲もなし臭もなし。目にもろ〳〵の不淨を見ずといふて。心にもろ〳〵の不淨を見て。分別こしらへて迷ふて見ても。鳥は黑し。鷺は白しどのやうに迷ふていても。水は寒し。火は熱し。又分別迷ひを止めて見てもやつぱり火は熱し水は寒い同じことなら。迷ひの妄想をやめて心に不淨を見ぬときは。高間原に神とゞまり八百萬の神達を神集にあつめ給ひ。神議にはかり給ひて。たばこを呑ふと思ふと。いつの間にやら吸口が口の側へ來てゐる何の事もなふたばこ呑んでゐる。又天窓が痒い直に手が行て掻てゐる。右の手に用があると左の手が勤てゐる。手がもちつと待ておくれは言はぬ。左右互ににらみ合。氣がねなし。君に順ふ臣なれば。心に何ぞ思ひ出して斯したいと思ふ。直に手足が働てゐる。體用一致瞿密隔なし。身と心と合一にして天地自然の御相。是則今日の道。道

は即今の上に明らか也。今日は結構な御天氣樣でござりますハイ左樣でござりますと同じ事を言てゐる。言ぬ先から。よい天氣じやけれど。思はず知らず言ふてゐるは。今日天地の此姿の通りを說法するのじや。夫が無心無念の本佛の御說法。少しも思慮分別なしで節に當りてある。世の中の賣り買ふ聲も法を說也。三千世界が常說法じや。又雨の降日。今日は天氣でござります。誰も相手にする者がない。アノ人は間違ふてゐるさふな。天地が御合點なされぬゆへ。どこへ持て行ても通用が出來ぬ。又何ぼ知れた事じやとて。ちつと顏形の不出來な人を見て。おまへ樣の顏はきたない顏じやといふて見たがよい。知れた事じやけれどどんなものでも。腹立る其筈じや。天が人の心じやによつて天を惡口したり謗たりするゆへ。どの樣な惡なものでも腹立る。盜人を盜人といふは知れた事なれど腹立る。穢多を穢多といふも同じ事じや。けれど小人を小人といふては腹立ぬ。我事ではないと思ふてゐる。おまへ

の顏をきたない顏じやといふてゐるのじやけれど。何とも思はずにゐるじやによつて形では不義不道を行ひながら。心にはわしはよつぽど慈悲善根を施し陰德を積ものじやと思ふてゐる。盜人が形では盜してゐながら心の內ではわしはよつぽど利口な者じや此やうな結構な事をしらずにゐる。世間の人はぬるいものじやと思ふてゐると同じもので是が心を以て形の役とし。家來が主人を使ふて。丁稚が座敷に居り。旦那殿が豆腐箱提たり。たばこ盆の除掃するのじや。家內が犬の獄器のやうに成てわけがしれぬソコデ神佛聖人樣方が氣の毒に思召て。敎を御立なされて。此心と形と一體なる事を能合點せよ。夫から其一體なら心も形も引さらへて。直に天の功用なる事をしらしめ。去によつて人には微塵いさゝかも私心といふものゝない事をしらしめ。生れぬ先から天の靈明我に備りて有事をしらさん爲に古の明德を天下に明かにせんと欲するが故に。春に成れば梅がさく。秋になれば柿が出來栗の木に柿も出來ぬ。人は孝

悌忠信のみ。此佛知見を開かしめんが爲に世に出現したものじや。うろたへに出現したものではない。夫に子が出來たといふてはうろたへ。金もふけたといふてはうろたへ。損したといふてはうろたへ。譽られてはうろたへ。謗られてはうろたへ。見るにうろたへ。聞にうろたへ。佛目を覺せ。いかなるか是が本來の面目。親に孝行主人大事。いかなるか是古の明德。其親を親として其長を長とす。雀はちう〳〵烏はかあ〳〵。是何ものが啼ぞ。又何ものが啼すや。不審付て御らうじませねつから此方細工じやござりませぬわいな。此前蜘が巢を作るのを見ましたが。アノ蛛が巢を造るに。高い所からぶらりとさがりて風まちしてゐる。時にどちらからぞ風が吹く其風に隨ひてチヨイトひつ付き其糸を便として段々とかけて廻るが。蛛の腹の中にあのやうに。何丈も〳〵糸が有でもあるまひ。けれど巢をかけんと思へば。何が糸になるやら。ずる〳〵〳〵とあの通りに出來るは。不思議なものじや。其糸の後足でチ

ヨイ〳〵とかけて廻る鹽梅浮めたものじや。曲尺も墨汁も持てはゐぬが。寸分違さぬ去とては蛛はかしこいものじやと。蜘ばつかり譽てござるがアレガ蛛の智惠才覺で。出來そふなものかいな。誰が使てゐるぞ考て御らうじませ。花壇には牡丹の盛。何んと見事な事じやないかと。牡丹ばつかり譽てござる。菊の花盛。さても奇麗な事じや。色々の花くらべ。どふして此やうに出來るぞと菊ばつかり譽てござる。ねつから菊の根や株ばかりでは出來ぬ天地の父母の晝夜御苦勞なさるゝ事はならず。おれが作つたおれが咲した。おれが〳〵「前方冬鳥の巢といふものを見ましたが是はきやうとい細工じや。小サイ籠のやうなものじやが。草の根のやうなものを髮の毛の樣なものを集めて編だものじや。水の上に浮んである地からはへた草を便りに編付たものゆへ。風が吹てもながれぬ用構がしてある。けしからぬ細工ものじや。アレガ冬鳥の思案分別で出來るものじやない。細工人は天地にたつたひとりじや。考て御らうじま

せ。私も此スウ〳〵の息ばつかりで。腹の中に虚空じや。はなしが仕込んで有ものではなけれど。何ぞ言はふ思へば。此やうに。うだ〳〵はなしております。蛛の腹から糸が出ると同じやうなものじや。何が此やうに言ふてゐるぞふしぎなものじやござりませぬか。此身のはたらき目鼻の細工。見たり聞たり誰がするぞ。死人にも目もあり。鼻もあるけれど何にもしらぬ。どふしたものぞ。考て御らうじませ即今目をふさげば暗闇此くらやみは誰が見てゐるぞ。骸中がくらがりを見てゐるか。くらがりが體を見てゐるか。目をふさいでゐても。何ぞ音がすると一番に耳が見る。どん〳〵太鼓じや。ゲリ〳〵鼠が下櫃かぢるのじや。にほひがすると目も耳も能う見ぬ事を鼻が見る。其役々の請取まへ。少しも違はぬ晴の藝。人間業とはよも見えじじや。又あぢわひは舌が見る。腰のあたりが痒と腰が見る。手が往て何やらひねり出す。ヲツト堅い是は盤じやと指が見る。一切心で見るゆへに。聞て見や。喰ふてみや嗅で見や。

言ふて見や。仕て見やと。世界の音を觀じ見る。娑婆示現觀世音大悲一體衆生を利益すと云此本文は何と言ふたものぞ。三界唯一心の功用で見るも。聞も。思ふも。云ふも。此娑婆世界一觀世音の示現なさるゝのじや。其見ると聞を提婆めがおのれがものにして。何がほしい。かゞほしい。どうしたいかうしたいと。悪業を積かさね。生身地獄に入るといふて生ながら大地引裂て。地獄に落入たといふ事じやが此生ながら土の中でホン〳〵する。提婆はどこにゐるぞちつと吟味して御らうじませ。體は土の小高きもの其中から何がほしいかがほしい。春はどうせう秋はどうせう。何を言ふも金の事じや金がなければどうもならぬ。人を突倒しても金をしてやらふともがきくるしむ。此提婆は生々世々地獄釜焦。浮む事はならぬ。去とは不便な事じやないか。どうぞ大慈大悲を起し。成佛さして御やりなさりませ。何にもむつかしい事じやない。三界唯一心といふて。天地の間にたつた一ツの誠を御知りなさるのじや

「傀儡師胸にかけたる人形箱佛出さふと鬼を出さふと
三界にたつた一ッ誠から觀音を出さふと提婆を出さふと。御望次第。好次第じや。其誠が天地も産出したものゆへ。天地の間に二ッもなく三ッもなく。目もなく鼻もなく。影も形もなきものなれど忠信孝子の噺しを聞ては。感心あまりて涙がこぼるゝ又不義不道の噺しを聞ては何となく忌々しき心生ずる。是ほど慥な性は善なり性に順ふ人の道じや。此外に敎は入らぬ神道も佛道も此外にはない
「聞わくる心の中の誠こそ敎によらぬさとりなりけり
此誠の通りをせぬをうそといふ。うそは天地が御合點なされぬゆへ。其うそが誠になるまで。天地の間をハアスウ〳〵くるしみ廻る地獄道。誠は天の道也。誠は物の終始也。誠なければ物なし。是を人面獸心といふ。誠は人の心なり。顏形に用事はない。心には男女の差別もない。人は心に天然と五倫五常の道が備つて有ゆへ貴きの至り也。此道にかけるが

人でなし。神といふも佛といふも心の事。聖人といふも顏形の事ではない。心の事じや。主人大事親大事も心の事。百姓といふも心の事。商人といふも心の事。町人といふも心の事。侍といふも心の事。侍じやによつて刀を差か。刀を差ゆへ侍といふか。差れぬ。去によつて侍といふも心の事。坊主じやによつて衣着るか。衣を着るゆへ出家といふか。出家といふも心の事。心の事じや。心の外に名はない。名の外に心もない。女中方何ぼ器量がよふても。衣裳が能ふても兎角大事は心の事じや。是をたとへて御咄し申ませう。結構な蒔繪の重箱に。綾綸子のふくさをかけて。其帛に種々樣々のめづらしい模樣。縫やら。箔やら色どりて。見るほどの人が目を驚かし。是見やしやれ此やうな見事なふくさ。此やうな結構な重箱内は何んであろぞ虎屋の巾頓か小倉で有ふと明てみれば馬の屎。エヽきたな。惣〳〵が胸が惡ふなつた。何ぼ帛や重箱が能うても馬の屎じやい

かぬぞへ。又本綿の洗濯風呂敷に。重箱の縁もかけてある。扨もきたない。中は何で有ふぞ。ハテよしになされむさくろしい。しかし何やら甘さふな一ッおあがりなさりませ。コリヤきやうとい。爰へも御くれと惣〳〵が味ふて見て。コリヤたまらぬと。重箱のきたない事も。木綿の風呂敷も打忘れて。も一ッおくれじやと。何と能したものじや。とかく中の代もの次第じや。上の町のおげん様。器量はよし風俗はよし。つまはづれのぢんじやうな事。どこに一ッいひぶんなし。衣裳もたんとあるげな夫はきやうといものじや。あのやうな子を嫁にもらふは。大きな仕合じやと評判まちまちじやが。うす〳〵聞ばどうでも親御様方に。ちと不返事なそふな。夫に御氣が短ひやら。折々ぶり〳〵が出るを母御様が機嫌を取てござるといふ事じや。どふでも仕事は余り御すきじやなさそふな其かわりに芝居が御すきかして簪に役者の紋を付てござるげな。イヤモウ其やうな馬の尿はマア止めにいたしませうと。とんと相談が出來ぬ。

又横町のおしな様。少々ふとり肉。脊はひくいけれど。色が黒い。形もかうとにして御ざるけれど。親御様方への事がよいといふ事じや。内外の衆や出入衆の話しに。能く御氣が付といふ噂じや。夫はきやうといものじや。いつそ其御子に極めませうとチヤント相談が極まる。是で能ふ御得心なさりませ。是も女中方ばかりの事じやないぞへ金銀財寶家藏味噌部屋までに引包まれ。旦那様の御後室様の。御寮人様のとおかみ尊みはやされても馬の糞じやいかぬぞへ。旦那様といふも心の事。御様といふも心の事じや。名は旦那様でも心が旦那様でないといかぬぞへ。似せ物は通用が出來ぬ。重箱やふくさに用事はない。中の代物が大事じや。孟子曰人々己に貴きものあり。夫に皆似せものを摑して置ゆへやかましい。勿體ない事じや。此貴きものを佛家では。己心の彌陀。唯心の淨土。法華經に五百由旬の寶塔が大地から涌出ても。多寶如來が内にござらねば。何にも役に立ぬ誰も證明するものがない。先

づ寶塔とは何ぞ此形の事じや。此體はどふして出來たものじやぞ。一滴の水が母の胎内十月の間に鼻が出來目が出來耳が出來。口が出來手足が出來てとう〳〵建立成た此寶塔じや。是は誰が立たのじや親の細工ばかりじやない。是が親の細工ばかりで出來るものなら世界中に片輪者は一人も出來ぬはづじや。尻の大きな女中や鼻のひくい者はいないはづじやマアして御らうじませ。出來はせぬ。二人が一所へ寄て。またしやんせや。斯すれば鼻すじが押通るイヤかふすれば目もとに張りが出來ると。其やうに自由に出來るものじやない。こしらへる時は兩方互に無心境界少しでも手細工は叶はぬ天命じや。天命に違ひはない。貧乏も天命金持も天命。貧乏を歎く事もない。天命の貧乏じや。又たとひ富貴なとて。奢高ぶる事もない。我智惠才覺で金持になれるものなら世界に貧乏人は一人もないはづじや。皆天命なる事を能うあきらめ。自身一人前の願ひ望みをさつぱり捨て〳〵。たゞ今日から一日ぐらし。御先祖の御影で先づ

雨露にも濡ず。一日ひもじいめ寒いめもしらず三度〳〵の御飯いたゞいて。疊の上に寢起する事は扨〳〵有難い事と。一ツ〳〵味ふて見たがよい。何が不足なぞ。大體果報な身の上じやないぞへあんまり結構過るゆへ。ホン〳〵向ふばつかり見て。肝心の我乘てゐる結構な蓮華を踏はづして落るものが多い。あつたら事じや。此蓮華ふみはづして落る事を。たとへて御話し申ませう。丁稚のやぶ入親方がヤイ長吉。明日は一日隙をやる程に芝居を見てこい。ハイ有難ふ御ざります。サア嬉うて〳〵夜も寢られぬ夜の明るを待かねて手水をつかひ。にぎりめしをこしらへ。香の物入れ。竹の皮に包み。間ぶところへ入て。門口を出た時の嬉しさ。天へもあがる心地じや。扨芝居へ行て。うつゝぬかして樂んでゐる。時刻もうつれば御腹が大ぶんさびしう成た。世間もそろ〳〵中食時分。爰でこそ懷中の竹の皮を出さんと思ひ。向ふを見れば銘々に辨當開き。いろ〳〵の煮しめもの其側で丁稚どの。どうも竹の皮のにぎりめし

は出し憎ひ。扨々恥かし事と我乗てゐる蓮華を踏はづして落る髪が大事の所じや。此丁稚どのも。もちつと先までは此了簡ではなかつたに。かわつた事な。なぜ此やうに成たのなれば。我蓮華をはづれてよその蓮華に目が付ゆへふみはづして落たのじや。こはひものな。此が丁稚の芝居ばかりじやないぞへ。能う考て御らうじませ。銘々どもは朝から晩まで踏はづして落通しじや。扨又向ふの内から辨當持て來た人は。又向ふ茶屋から場を取。中食は勿論酒肴まで取寄てゐる人を見て大きに羨み。此やうな所では内から持て來た辨當が出される物かい。責て茶屋から酒なと取たがよい。あた外聞の惡いと踏はづして落る。其又向ふ茶屋から何もかも取よせて見てゐる人は。場中を見廻し桟敷に毛氈花麗に。酒肴や。ら吸物やら本膳やらお山やら中居やら取よせて樂んでゐる人を見て咽乾かし。イヤモ芝居を場で見る程窮屈なものはない此後から桟敷にする。其かわりに。是から内を始末して年忌法事も止にする。斯言ふ場所で。

見とむない。世間の外聞にかゝる事じやとホン〳〵〳〵踏はずして落る又桟敷で見てゐる衆は。どうでも桟敷は氣詰りな。茶屋へ取寄る歟。内へ取寄て見るがよい。其次手に此方の身上もたゝき潰して貰ふたら一向氣が發散して宜らふと。向ふへばつかりホン〳〵〳〵氣を張て。我蓮華を踏はづして落るのじや。是が芝居の事ばかりじやない。皆我助りてゐる。蓮華をしらず兎角人の商賣が好もしく。あれか宜らふか。是がよからふかと。よそ見ばつかりしてゐる。何にも外を見る事はない。今日我身に請得た天命が則蓮華じや。米屋は米が蓮華酒屋は酒が蓮華。紙屋は紙が蓮華。百姓は田畑が蓮華。皆銘々の商賣が蓮華じや我天命の蓮華でなければ。たすからぬ。きたないたとへなれど雪隠虫を御らうじませ雪隠虫は尿が蓮華じや。斯言ふはおかしいやうな物なれど其證據があるアノ尿虫を可愛そうに。同じ虫に生れながら。松虫や鈴虫は結構な籠に入て重寶せらるゝに。其方は不仕合せものじやな。扨々惡臭い虫じやと水

で洗ひ。結構な座敷へ段子の蒲團をしき其上に置てぐるりで名香燒て嗅したら雪隱虫何と思ふで有ふな。鼻をひこ〳〵して。扨々悪くさい嗅がする近所へ糞取は來やせぬかと。あちらへにげ。こちらへにげ。〳〵と逃まはり。とふ〳〵雪隱へこけ込で。ヤレ〳〵嬉しや極樂じやといふて悦ぶ。夫を久しう蒲團の上で馳走すると術無がりてツイ死で仕廻ふ。何でも我請得た天命でなければ安心せぬ。どなたでも左樣で有ふが。どのやうなおもしろい。花見遊山に樂しみ。或は結構な座敷で山海の珍物珍味。種々の御馳走に逢ても我内へ戻ればヤレ〳〵嬉しや。極樂じやと安心する君子其位素而行外を願はずといふて。我分外を願ふことはない。たゞ身に備りたる天命の蓮華踏はづさぬやう。我身に立歸りて今日の有難事をしるのじや。其上が天命まかせ

「樽も櫂も我とは取らじあま小船たゞ浦々の風にまかせて

天道次第あなた次第で樂になる。何にも不自由な事はない。麥も出きる

米も出きる。夏になれば西瓜眞桑瓜秋になれば柿の栗のとて飯のたしにもならぬ物まで。天道は愛たてない。いぼど世話やいて少しも恩にきせる心はない。其御仕送りに預りながら足納するすべ知らずに。結構な座敷でふとんの上にあがり。色々のものぐるりに並べたて。青い顔して何喰ふても味がない。是モ〳〵胡麻入てなもんな。わしがやうな。因果なもの〳〵どうぞ御助けなさつて下さりませ。其上がどう助けらるゝものでも。一生有難いといふ事しらぬ生得といふものじや。どのやうにしても笑ふ事の出來ぬ顔は難義なものじや。是じやによつて隨分ちいさい時から。嬉しい〳〵さし付たがよい。うれしい〳〵さし付た子は成人しても愛比敬て人づき合が能い。鼻〳〵ばつかりさし付た子は。我ぶりで人のする事が氣に入らぬ。ソコデ腹立るが仕事じや。ちつと心が叶はぬか。少し我了簡に合ぬ事があると。扨も〳〵いやな浮世じや。もはや此身に秋果た早ふ極樂參りさして下さりませと。鼻の先きの極樂しらづに。まだ極樂

が有かと思ふて。どうぞ助けて下さりませ〳〵

「六道の街に迷ふぞあはれなり身は極楽の眞中に居て

極楽の眞中に居るものが。どうその上が助けらるゝものじやぞよいかげんに迷ふて置たがよい。もし佛様があすの晩迎ひにやるとおつしやつたら。イエ〳〵まだ〳〵ずつと先の事で御ざりますと。辭義するのじやぞ。先ヅ極楽の佛様とは何を言ふたものじやぞ。とつくり吟味して有ふが。達者な内から佛様に近付に成て置たがよい。そうないと。極楽で付合が出來ぬ先生の子守歌に。内の佛にやまだ〳〵はやい。門の二王に先ヅなりやれ。マア佛様より人に成たがよい。今日の人の道を全ふ勤めた御方様方を。佛様とも神様とも聖人とも君子とも。跡から名を付たものじや皆名は跡から。惡人といふも。善人といふも。横着ものといふも。盜人といふも。其人々其勤行ふ通りを跡から送り號を付たものじや。而見れば極楽はいづくに有ぞ。極楽も睫毛。地獄又いづくに有ぞ。地極是此

睫毛じや。道は近きに有。然るを遠きに求む。あまり近ふて見付ざりけり。めつたに辭義する事もない。高でこちら風情。極楽の迎ひを。待てゐる事じや。此方から押かけて往たがよい。又極楽へ往ても朝寢したり片意地言たりする佛様はないほどに。今日から稽古して。隨分行義能う仕ならふたがよい。空鹿〳〵してゐると。ツイ地獄の御迎ひ船に乘てゐるものじや。こはひ事じやぞへ先ヅ極楽とはいづくぞ。西方十萬億土とあれば。又唯心の淨土ともあり。マア近ひ方から吟味して見たがよい。極楽淸淨土といふて。至極正しい淸淨土潔白の所じや。其淸淨土なら所へ此方から屋埃ばつかり持て行ソコデ極楽の住居がならぬ。氣の毒なるものじや勘當は誰がするぞ。親は勘當はしやせぬ。どこの親じやとて勘當せうとて。育あげる親はない。親はよいが上にもよかれがし〳〵。と願ふ淸淨土。夫に皆子の方から。勘當持て行のじや。大な罰あたり。何と勿體ない事じやないか。又牢は誰がこしらへたものじや。御上は淸

淨土で埃塵いやがりてござる。其所へ家尻切りも間男も。獄門も。張付も火あぶりも。皆此方から拵て持て行のじや扨又地獄の施主はどなたじやぞ。目が明と何がほしいかぶほしい。有が上にも積重ね。何といふも金の事じやと棺桶へ眞逆様に杉だち。金を抱へて地獄にぞ入る。或人の興歌に「棺桶へたとへ小判を詰たとて黄金佛になりはせまいぞ。皆餓鬼道引攜て行のじや。餓鬼も畜生も。他國ものじやない。腹の中を能う吟味して置にやならぬ。扨此餓鬼の中でも米一と握りが飯一盃ぐらいで合點する餓鬼はしよひけれど結構な着物着て。大きな家屋敷を構て腹ぶくれの餓鬼がある。こいつが折々惡い事を仕居る或は賣しめ買じめ世界の咽じめと惡い事の一關をする其替りにひどい目にも逢おる。けれど懲もせずしぶとい餓鬼じや。皆地獄の願主じや一切心の建立する地獄じやによつて。造地獄といふ此方の勝手に造るゆへ地獄は手細工。極樂は造極樂といふはない。極樂は生れ付のじや。此又影も形も。目も鼻も。

手足もない心が。其やうに種々様々と姿をあらわし。呵責せらるゝとはどうしたものぞ能う考て御らうじませ。或は主君の大切なる用事。いつ幾日に相勤めよと仰付られた。其用向をとんと忘れてゐた其忘れた咎によつて。刑罪に逢ふではないか。其わすれた心はどんなものじや。又忘れぬ心もどんなものじや。二ツなから影も形もないものなれど形の上では。追放か遠島か。しばり首か。切腹の科は遁れぬ。恐しいものじや。天は生々するばつかりが仕事じやによつてもし一念あやまれば過たなり成長する。其筈じや。影も形もないものなれど。活潑々地生ものじや去によつて日々に新に時々刻々に新に心を付て吟味せにやならぬ。此造地獄のたとへがある。夏向在郷の塵埃の溜りに。くそ竹といふのが出來る。是が奇妙なものでな。一夜さの間に五六尺或は。一丈ほどにもなるものじや。草でもなく木でもなく。其形蘘荷茸のごとく背ばつかり高ふて喰へるものでもなく。役に立ものでもない。仕廻ひは夫なりに腐て又

もとの塵埃となる。何の役にたゝぬものじやけれど是がこれ。天地の仕業のねつからゆるみない事を考て御らうじませ。塵埃場といふものは何やらかやら色々さま〴〵の。悪溜ものばつかりが積重ねてある。夫を天地の晝夜陰陽の蒸籠でむし上け給ふゆへ。其腐もの〻打込が一緒に成て形を顯したものじや。麥でも米でも豆でも小豆でも。其外わけの知れたものはわけの知れた通りに。正しい姿を顯はす。又わけの知れぬものはわけもなふ形を顯はす。油斷はならぬ。是じやによつて腹の中に埃が溜ると。もいやく〳〵してわつけもないくそ蕈が。ぬんぬ〳〵生じて。何の役にたゝぬものじや。一念も麁末にならぬといふは爰の事じや。一切萬物因縁因果果報といふて天地の間に生ずるもの。此行列にはづれるものはない。去によつて一念生ずる其みなもとを吟味して種を下さねば皆くそ竹に成て仕廻ふくそたけに成て一生を過るとは殘念なものじや。どふぞ目を覺して御らうじませ。大切な事じやぞへ

一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛と。釋迦如來も始めて目が覺た。和泉式部の歌に「草も木も佛になると說法のまことあらはす山櫻かな。たつた一ッの誠を見付たのじや。天理に少しも私心はない谷蔭の櫻がらは人の見ぬ所じやととてじだらくにも咲ぬ。操正しいまことあらはす。其誠を顯はすものは。阿の一字。此阿字はいづくに有ぞ腹の中のあたゝかみ。此あたかゝみは萬物一體。それ〴〵の形の上にまことをあらはすちう〳〵かあ〳〵烏や雀の事ばかりじやない。森羅萬象阿字のはたらき阿字はゐなものじや。此やうに私ひとりが自慢したとて役に立事でもない。釋迦如來ば。天上天下唯我獨尊と言てござるも。外じやない。此阿字のあたゝかみ。上は梵天三十三天のまだ上から。下は金輪ならくの底までつらぬいて。壽名の限りない事は。過去久遠劫から盡未來際まで活通しの漢じや。其目から能ウ御らうじませ三千世界といへども。大海の粟一粒じや。況や其中の銘々ども。何程の事ぞ。蜆貝に一ぱいほどの。

分別を潦廻して。どふのかふの〳〵いふたとて埒の明事でもない。けれど此蜆貝の中へ三千世界を入れるものば有けれど三千世界へ蜆貝を入る事が出來憎い。その筈じや。三千世界より蜆貝が大キイものサア爰が大事の所じや。どなたも入て御らうじませぬか。何にもむつかしい事じやない。古の明徳を天下に明らかにするのじや　放之彌六ー合　卷レ之退藏　密とあり此限りもない大きなものをみな銘々の心として居ながら。何がほしいかゞほしいも止たとて何にも不自由な事はない。此先五尺の骸一ッでさへ天は大體御苦勞に思召す事じやない。其譯はどふしたものやら。三世の諸佛梵天帝釋四天王。八百萬の神達水神金神。山の神。木火の神いふに及ばず。世界中から此身一ッを大切に守護してござるなせなれば。則天のものじやさかいに。夫もしらずに。おれがものじや。おれが骸じやおれが身でおれがする事誰が何といふもので。おれが家じや。おれが金じやと。やかましう言言は。目を明て寢ごといふ

てゐるといふものじや。去りとては勿體ない。一向人たるもの〳〵言ふ事ではない。先今日現銀こうに女猫算用にして見たがよい。普天の下卒土の濱。いづれか王土にあらずといふ事なし。然ればあくび一ッくつさめ一ッも皆天の御はからひ。此やうにものいふて。いるものぐるめに天の給ものじや。天何をか。もの言はざるゆへに御上に命せられて天下の萬民を預け給ふ。則御上が天の御名代なれば直に天じや。人は御上のものにして。此身は御上よりの預りものじや。去によつて一世を全ふ勤めあふせ疊の上で臨終しても。御上よりの證人を以て一家親類送らねば。御上より立置るゝ。墓所の御坊が請取らぬじやないか。扨明白に葬禮して。御上より立置るゝ。御上の地面に取納め其後町内の人別を限く。是でこれ此身は御上のかし物なる事慥に得心したがよい。夫から又御上の金銀米錢を以て死者の追福。諸入用を取賄ふといふものじやないか。夫でも合點の惡い人は。我家や我入れものにある金はやつぱ

り我ものゝやうに。染來沈込ふ思ひ詰てゐるものじや。けれど元來御上のものなれば何時召上らるゝといふても仕やうはない。夫でも天道は大慈大悲のあまり。四民といふて役〳〵をわけ。士は不義不道を糺す臣。百姓は農業の臣商人職人は市世の臣といふて夫々の家業の上に御定めあり利益を下さる。夫を天祿として今日を送る。是は言いでも知れた事じや。右申す通りに疊の上で目出たふ順死したのでさへ。皆是御上の御世話じや況や逆死横死のものにおゐては。御檢使を遣はされ。吟味にぎんみして明白に御糺しなさる事是が直に天の御制度といふものじやないか。一ツ〳〵能う味ふて見たがよい。此やうに御上の事を銘々共の口の端に申上るも恐れ多い事なれど。子供衆や女子衆は。是を何とも思はずにゐる。勿體ないことぢや其上何にもしらぬ下賤のものは。女房を呼んで子が出來ると。自身の慰み持あそびこしらへた様に思ふてゐる。たわいもない事じや是も御上より御立置るゝ所の宮寺へつれて參り。此度か

やうのものが。出生いたしましてござりますと御斷申上る。此宮寺は直に天の御出店。其土地を守護なし下さる神佛は則天の御名代なるゆへ。御目見へ致させ其上御上の人別帳へ相記すではないか。去によつて我子ながらもし疵でも付るか殺害でもすると急度其科を御糺しなさる。是で我子も我子にあらず我身も我身にあらぬ事を能う知つたがよい。夫に百姓でも町家でも。少々家内大勢くらし。金銀の貯へもあれば。おれがものじや。おれが金じやと。氣隨氣まゝをいふてホンニ〳〵する其金銀米錢家屋敷諸道具は申に及ばず裏の埃一本までも。皆天のものじや。とんと我ものといふは芥子みぢんもない。我ものではない證據が有。どなたでも寢た時體はどこにあるな。どこへ紛失したぞ。寢た姿は外のものゝ目には見えるけれども寢たものはとんとしらぬ。知らぬ筈じや。本來空の天じや。ふじの白雪朝日でとける。君と我とは寢てとけるどふもせう事がない。嘘なら寢た時覺てゐるかな。本來くう〳〵の息ば

つかり。其鮒といふ事も知りやせぬ夫でも目が明とおれがのじや〳〵と思ふが。其やうに道具が。きる物の様に。二色も三色もあるものじやない。起て此やうに見たり聞たりするも。やつぱり天のかり物じや。夫でかりの世じや。天のかりものならこそ天道様から大切になさつて下さる其天の損料物で憎いの可愛の。ほしいのおしいの何のかのも死では身に隨ふてはいぬが。どこへ行ぞ土體に此慨まで置て行にやならぬじやない。地水火風の四ツも戻して仕廻ひ。殘る一ツは本來の空じや。是も本か。來へ歸して仕廻ひ。何もかもすつぺらぽんと。引たくられてしまひ仕廻ふた所が引殘りて。生涯何のかの〳〵もいやくやいふた。小言の粕ばつかり。脊たら負ふて。死出三途の道中じやけれども虚空でこしらへた咎を。虚空の中へ持て這入てはねつからわかるものじやない。丁ど風の腐たやうなものでどふも仕様はない。所を又天は陰陽の蒸籠でむし上て一厘一毛も違はぬやうに製法なさる。是が能ウしたものじや。少しでもよ

い所があれば。上へ引上て人を治るものとなし。又少しでも悪い所は一生漂泊愁ひ災難病難片輪或は癩禽獣魚鼈虫けらの類ひと種々さまざまに種を仕わけて。又形をこしらへて働らかす。能うしたものじや其中でもわけのしれぬ所は。皆くそ壷と成る是が又天命じや。此天道の算用といふものは中々人間の及ぶ所ではない。天のものじやといふ事を慥に決定したがよい。去によつて此慨を三世諸佛梵天帝釋四天王。八百萬の神達の守護なさるといふ事。上は天子様より下庶人に至るまで。須彌山の圖と同じ事じや。先賤しい銘々どもの身に取りて言ふて見やうなら。蚤は濕氣を吸ひ。虱は死血を喰ひ蚊は人の息りを禁しむ鼠は家宅に住て着虫を喰して人の災害を拂ふ役人なれば。誠に八百萬の神達晝夜此身をなさるといふものじやないか。是が直に天命天の法令といふものじやけれど情ない事が有じやて商人が天命の職分を守りて。一夂取る利を一夂取てゐればよいけれど。人欲の私心といふものが出て。ツイ一夂四五分

もっ。又欲ばりて二匁も利を貪るじやひと成て難義すると同じやうなもので。虱も天命の食分の。濕氣ばかりを吸ふてゐる間は。人の害にもならぬけれどこいつも私心が出て咏ひにふけり。大事の正血をむさぼるじや。ソコデ梵天帝釋いかり給へば右の手の毘沙門天。直に虱を引つまみ。大指の爪でぷちりと刑罰し給ふ。蚊も又其通りで。人の怠りを禁めてゐる間は。自身の役前ゆへ咎にならぬけれど蚊も私心が出て正血を盗むゆへ左リの手の持國天王大手をひろげびしやりと。片手の聲の御制罰じや。是が神佛でも菩薩方でも。殺生のしたい事もなく。罰の當たい事はないけれど。天命の御役目といふものじやによつて。どふも是非がない。其外畜も鼠も犬も猿も狐も狸も一切禽獸同じ事じやおのれ〳〵が。天命の職分を守りてゐる中は皆守護神じやけれど。少しでも私心を出せば直に天命に背ゆへ。御刑罰を遁るゝ事はならぬ。何ぼ神佛は御慈悲深いといふて。夫もよいはは。夫が直に天命に背咎ゆへ。身の災

いふて。御赦しなされて御らうじませ。世界は丸で腐て仕廻ふ。西瓜のたなの落たやうなものじや是でとくと御考なさつて御らうじませ。何と面白い事がむかしからしてあるじや御ざりませぬぞへ。人は一箇の小天地。此身は須彌の四州の雛形で三十三天も。金輪ならくも身に備りてある梵天帝釋も四天も皆天の御分別じや。八百萬の神達も一切天の御作物に違ひはない。夜よふ寢てゐる時。蚤蚊が喰ふ。我も知らずにゐるけれど手足が働いて制止してゐる。皆是天の御功用で。直に天の御分別じや能ウ考て御らうじませ。ねつから天に私心はない寢てゐる時も。起てゐる時も。寤寢合一といふて同じものじや。此やうに御世話なさる天じや程に。迚もの事に。いつそ天まかせにして御らうじませ打任したとて何にも氣遣ひな事は御ざりませぬおれが〳〵を打殺して。たゞ今日の天命にしたがひ敎の通り大切に勤るのじや。其敎とはどふぞ。則今日が道じや銘々どものやうな愚智無智な

ものでも。心安ふ勤るやう。天から書付を以て致てござる。乍恐讀奉る御制札の寫。則天の御言葉天の御聲也いづれも謹で拜聽あれ

一親子兄弟夫婦を始め諸親類にしたしく下人等に至るまでこれをあはれむべし主人有輩はおの〳〵其奉公に情を出すべき事

一家業を專にし懈る事なく萬事其分限に不可過事

一いつわりをなし又は無理をいひ惣じて人の害に成べき事すべからざる事

一博奕の類一切禁制之事

尙此外は略レ之

何と有難ひ無造作な御示しでないか。どふぞ此通りを銘々ともに勤めさしたいばつかりの神道の敎儒道佛道の敎へじや皆是法の御聲なりけり。直に天の御言葉じや此通りを勤めさへすりや。家內安全商賣繁昌子孫長久の御祈禱じや又家內安全子孫長久それ誰が爲になる事ぞい皆銘々其身〳〵の德に成事じやないか。爻を能う御合點なさりませ。此身も心も天のものならこそ。此樣にあはたてなふ。御世話なさる事じやほどに。能う考て御らうじませソシテ是が何ぞむつかしい事か。親子兄弟夫婦を始め諸親類にしたしうして中和で暮すのじや錢銀も入らぬたゞ出來る仕よい事の天上じや。又腹立て喧嘩するほど仕憎い事はなけれど。夫が常くせに成てあるゆへ。和合で暮すを。何ぞかわつた事のやうに思ふて。どふして是が勤まるものでと。勤めても見ずに天窓から退屈してかゝる。其やうな御方々は。マア一日勤めて見たがよい初なる御方余慶は御無用どふぞたつた一日勤めて御らうじませ。今夜から工面して。あすの朝とふから起て手水をつかひ。先ヅ御高札を禮拜し。親孝行の今日が初日。一家親類中和狂言の始り何とぞ今日一日首尾能う勤めさして下さりませと。けふ一日の願をかける。扨親御樣から始めかける親父樣御膳を御あがりなさりませ。御相伴をいたしますす。扨何か用事有てよそへゆく事あらば親御樣の前へ手をつかへ。どこそこへ參りてさんじませう。又戻つ

たら只今歸りましにと。夫も口を尖らかして言ふ事はならぬぞ。隨分にこ〳〵とおとなしうして。母樣是はどふいたしませう。親父樣是を買ましても大事ござりませぬかと。一ツ〳〵親御樣方と相談して。假にも我まゝ氣まゝにする事ならぬ。親父樣もう御休みなされませとマア言ふて御らうじませ。大躰心よいものじや御ござりませぬ。又兄弟の間も其通りに。むつまじうするのじや。其外諸親類の間も少しでも爭事は御法度。忽天下の科人と成事じやと深く恐れ愼み。一家親類よりちつと無理な事いふて來ても。成程左樣御尤。とくと思案いたして御返事致しませふと。にこ〳〵して暮すのじや。マア一日勤めて御らうじませ其寢節の快さ。とんと極樂世界じや。是程の事は出來よかい。何にもむつかしい事じやないもせぬもの。大人は赤子の心を失はずといふて。もとの生れ子に成て勤るのじや。扨翌日も又一日の願かける。どふぞ今日一日勤めさして下さりませ。あすからは芝居も

見に行酒も飲む茶屋へも行。博奕も打ツどふぞけふ一日と思ふて願かける。毎日〳〵其通りに一日ヅヽの願かけて勤める是が退屈せぬまじないじや。どふでも初手の間は。うい〳〵しいけれど。どふぞ辛抱して十日ほど噓しばりて勤て御らうじませ。そふすると御腹の中に快い事を覺ゆる。夫から常癖に成て後々は何ともなふ勤まるものじや。其かわりに。勤めおゝせたら大きなものじや。此行義をさせうばつかりの神道の敎。儒道佛道の敎じや八千余卷も。四書五經も禮儀三百威義三千も此事じや是が勤さしたいばつかりで。天照太神樣も。孔子樣も。釋迦如來樣も。阿彌陀樣も三世の諸佛菩薩も八百萬の神達も惣がゝりに成ての御賴じやどふぞ一日なりと。御勤なされて御らうじませ。直に其日の御祈禱じやわいな。扨下人等に至るまで。是をあはれむべし

「心せよつかふも人の思ひ子ぞ我思ひ子におもひくらべる

主人たる人は家内の者を。どふぞよいものにして。身を立さしてやりた

いといふ。心願を起したがよい。家内の者ども一人も殘さず。立身出世さしてやらずば。我旦那とは言はれじと誓ひを立たがよい。阿彌陀如來と同じ本願を起して見たがよい。御家長久の基じや。又それが出來ずば旦那役をマア斷云て休んだがよい。我勝手ばつかり言ふて人を追ひ廻し少も勞る心のないは。天命に背く各人じや。雪の降夜も闇の夜も搆はずコリヤ長吉八百屋へ往て玉子取てこい。ハイ〳〵丁稚殿横町溫飩屋で。蛸の足喰ふてござる。皆影法師の移るのじや。隱す事ならぬ。隱たるより顯はるゝはなし。主從諸共各人じやぞへ一主人有輩はおの〳〵其奉公に情を出すべき事

天地の間に主君の無いものはない。目上は皆主人じやけれども。爰では先ヅ若い衆や小供衆能う呑込んでもらはにやならぬ。奉公とは。公に奉つるといふことで。奉公に出た日から此身は主人のもの。我身といふは芥子微塵もない。足の小指の先の爪の垢までみな主人のものじや。此事

は奉公に出す親御方が能う言ひ付てやらにやならぬ。我子ながらも世話が出來兼るゆへ。主人を頼みに其子一生の身の納を頼むのじやないか。スリヤ大躰嚴しう言ひ付てやらにやならぬ。又奉公する衆も能う合點したがよい。主人は今日の命の親じや。たとへば一季半季の奉公でも。奉公するからは天命の奉公じや。我身といふものはない。皆主人の骸じやそれに主人のあしらいが。ちつと惡いと頼を脹らし。ぴん〳〵彈廻りモウ暇取て外へ行ふ。爰ばかりは日は照らぬなどゝ。おのれが心の暗闇を知らずどこへ往て立身出世。大きな罰あたり一生不仕合になけりやならぬ。使ひに出せば情斷する。上るり稽古したり三味線習ふたり。身の慰みをかせぐ外道。其骸はどこから盜み出したものじやぞ。女中方奉公の内男暫配すると行〳〵夫の緣にたゝり。皆天命に背事故難義せにやならぬ。いかになればとてアゝまゝい此くらいの事はまゝい〳〵の筒尾が。節鬼と成て來ると。そろ〳〵主人の物を

私するやうになる。こはひものじや。それでも足らぬ。迚もの序にもつと罰あたれ〳〵と。だん〳〵罰が大きう成て。とう〳〵請人呼出し。親兄弟の身上仕廻ひ。さもなくば。欠落身投首くゝり大概御定の行列じや。是がいやさに惣〳〵が寄かゝりて御世話なさるのじや一家業を専にし惰る事なく萬事其分限に過べからざる事　我商賣の外にあれもしたり。是もしたり。不時のもふけを期にして商賣不情でのらくらする事堅く御法度じや其分限に過べからすとは。食物から着る物から合し少しでも奢高ぶる所あるは。皆御法度じや。其上にホンニ〳〵する用はない。夫にちつとでもよい家の普譜を見るか人がよいものきてゐると聞かわかし借銭しても負まい〳〵と力身歸る去とてはわけもない事じや。別して女中方香具屋呉服やが來てもめつたに手を出すものじやない

ぞ。是は我身分に過はせぬか。わしは何ほどの徳あるものぞと。身に立かへりて見ぬと。思ひの外過分に成て有ものじやぞへ。殊に女は夫より外に便りのないものじや。それに此やうにぞべ〳〵として暮してゐるはもし連合の身上をつぶす。祈禱してゐるのではないかと。折々尺を入れて見るがよい。是も女中方の事ばかりじやないぞへ。皆銘々の心得事じや。行末詰らぬ御祈禱でもしてゐやせぬかと。身に立歸りて吟味するのじや

一いつわりをなし又は無理をいひ惣じて人の害に成べき事をすべからざる事。うそつく事かたくならぬぞ。我身の勝手ばかりするのは無理してゐるのじや。無理するは堅く御法度じや。況や人の難義がる事をするは盗賊劫盗の類にして大罪人じや。たとくく僥倖にして暫く幸ひに逢ふとも死人がものいふてゐるやうなもので。天命遁れぬ其身の果愁ひ災難身にまとひ。難病に苦んで。詫言して廻りても叫はぬ。夫が直に天の御刑罰

じや

一博奕の類一切禁制之事子供衆。穴一六道する事かたく御法度じやぞ御法度に背ものは。皆天下の科人の内じやぞ。天命に背ものは行末が不仕合な。子供衆は友達が悪いと所作がらが悪うなりとつけもない。大口言ふたり。あほう口たゝく手柄のやうに思ふてゐる。去りとては氣の毒なものじや。自然と身に取じめがないやうに成て身を持崩さにやならぬ。是は親御様方がとつくり言ひ聞して置ぬと。行末ひよんなものになるぞ其外賭祿勝負事。皆博奕の類御法度じや。折角天から此やうに。片輪でもなく。指も五本揃ふてあろが結構な骸をもらひながら有難いとも思はず。天の此手で博奕打たり。盗みしたり。何の事じやぞい罰が當らにやならぬ。形は人で有ながら。にやん〳〵わん〳〵いふてゐるのじや。勿躰ない事じやないか。終には家を亡ぼし身をやぶり。子孫の難義は何程の事じやぞきつと改め愼まねばならぬ事じや。又天命に背き悪い遊びせ

ぬほどにとて。何ぼもする事があるに。悪いものずきじや天はおほやけなもので罰が忽にあたるものじやないけれど。自然と其身の納め所がない故。終には切るか殺すかして仕廻にやならぬ。此天の網といふは世界に一ぱい張詰てあるけれど。小人の目にはかゝらぬ。其網の目があらひゆへ少々の事は網の目をぬけて知れずに有事が何ぼもあるものじや。是をまぐれさいわいと云。そこで是はうまい〳〵と段々人我の私心增長して。我悪い事我もしらず。うか〳〵としてゐる内に咎が大きうなる。何ぼ網のあらうても。モウぬける事ならぬそこで我手でぴしやりと網にかゝる。能うしたものじや。天のなす災ひは遁るべし。なせる災ひは遁れがたし。天の成す災とは。我不覺悟で人に欺れたり。或は物の掛り合と成て難義する事あれど。我も計ずした事なれば。難義する程して其事相濟ば遁るゝ事もあれど。我と我手にこしらへた咎は。どうも遁やうがない。故に君子は其獨を愼む身に立歸りて吟味せにやならぬ事で御座ます。

五　編

大哉乾元萬物資始乃統レ天雲行雨施品物流レ形乾ー道變化各正ニ性命一天與樂實面白有様哉何を以てかこれを加へん

是は石田先生易の彖傳の辭を引て。都鄙問答の序となされたので御ざります。是まで先生方御説解も多く御ざりますれば。知れました事なれどざつと其大躰を申上ませう。先此大哉とは畢竟かぎりのない事を申たもので。大小にかゝわる大では御ざりませぬ。子供衆女中方の耳に入よいやうには。扨も〳〵大きなといふがよい。又乾元とは天の御徳を名付たもので。道の本躰じや本立て道なる。道といふは。神道佛道。平等一枚隔はない。神道でいへば神の道の本。佛道でいへは佛の道の本。儒道でいへば儒の道のもと。此乾元の天徳で世界中が統ひつくゝりてあるけれど。目には見えぬ。ふしぎなものじや。陰陽昇降して雲行雨施し

乾道變化して。色々様々形地をあらはし。一切萬物人間はいふに及ばず禽獸草木山河大地幽谷砂石の類に至るまで。其形の品々がをの〳〵。其性命を正しうして。天の與ふる樂みは。人には人の道。雀はちう〳〵。烏はかあ〳〵。己々が道を盡し。柳はみどり　花は紅。少しも天命に背くものはない。取わけ人は萬物の中でも。尊ひ天上で五倫五常の天徳が身に備はりてある故。人は人の道を勤め行ふて。おの〳〵其性命を正しうする。自由自在な大安樂を天からあたへ下さる。何を以てか此うへにまし加へん。何をか願ひ求めん。扨々有難く實に面白き有様かなと。故先生の御悦びなされた。序文でござります。天から此やうに結構な靈明の。本心を受得て何不足があるぞ。有難い事じやござりませぬか。孟子の曰人々己に貴き物あり。乍恐上々様方も釋迦も孔子も提婆も盜跖も銘々どもも穢多も乞食も犬も猫も狐も狸も猿も熊も。明徳にかわりはない。萬物一躰じや。其中でも人ばかりに衆理を備へて。萬事に應ずる

知恵がある。此知恵で迷ひが多い。夫ゆへ敎へに寄ねばならぬ。扨此知恵といへば何ぞかわつた物のやうに思ふて居る。何にも別の物じやない此見たり聞たり。覺たり知つたりする。自由自在な天徳を擧た名じや。此徳は天地に貫てある。けれど目に見へるものじやない。たゞ氣有て動くばつかり。影も形もない。是を譬て見れば鏡に物の移るやうなもので物來れば移り。去れば跡も形もなし。物に向ふて移まいといふ事もならず。又物來らぬに移ふといふ事もならぬ。見たら見たばかり。聞たばかりで。取事も捨る事もならぬ。又思ふたも思ふたばつかり。知りたも知りたばかり。誠に片便宜なものじや。いにぞなる物のやうに思ふて居る。別にどふも仕やうのないものじや。夫なら又捕へ所もないものかと思ふてみれば。即今見れば見ゆる。聞ば聞ゆる。是又慥なものしや。衆理を備へて萬事に應ずる本心が備はりて有ゆへじやが。是何者の所爲なるぞや。取らへんとすれど水の月。姿は

見れども手に取られず。どふもならぬ。ふしぎ奇妙といふて啼止ふより外に仕やうはない。是が直に天地はへぬきの功徳じや。といふ事を慥に決定するを。本心を知るといふ。けれど此道理が明らめ惜い所じや。去によつて迷ひが多い。けれど迷ひながらも天徳が備はりて有ゆへ。見聞覺知の自由が出來る。そこで我でに我するやうにおもひ詰て。おれが目で見る。扇じやとおれが心で知る。よし〳〵と我でにちやんと埒明て。我一人前に見たり聞たり。する〳〵と覺へ込だものじや。其覺込だぐるめに天の御徳でして居るとはしらず。やつぱり我する〳〵と。思ふ思惑が迷ひと成て無もせぬ生死を無理ににらみ出し。實に生死といふものがある〳〵と思ふて居る。思惑さへ取てやると。何にも生死するものはないもせぬもの。そこで一休和尚の歌に「我死にはせぬぞどこへも行ぬこゝに居る尋ねはするなものはいはぬぞ。此骸は生滅すれど。心に生滅はない。又此骸も生滅するやうなれど。乾道變化の內なれば實に生滅する

でもない。たゞ迷ひさへせにや。此思惑もねつから悪いものじやない。直に乾道變化の知恵じや。千石船萬石船造るも印籠巾着の細工するも皆天の思惑ではたらひてゐるのじや。たゞ氣有て動くばつかりじや

ほらぬ。井にたまらぬ水の浪立て影もかたちもない人が水汲だり飯焚たり實に面白きありさまかな。何を以てか是に加へん。サア爰が有難い所じやけれど。今一越聞へ憎い。夫で今日の有難い事知れぬ。しれぬはづじやあんまり大きなによつてじや。是をざつといへば乾元とは天の此空な所じや。此空は椽の下でもたばこ盆の中でも明た所はみな空じや。天窓の上の青い所も空じや。御日様の御座る所まで二百七十萬里とやらいふが。まだ其上も空じや。釋迦も孔子も。不可思議といふてござる形あるは斗られる。大地は何ぼどありても形地があるゆへ。天竺でも長崎でも斗れる。形のない所は。どふも斗る事ならぬ。ふかしぎじや。けれど

こゝを何にも無ひと思ふてゐるは間違じや。斯は天氣が滿切て有ゆへ弓射る矢が。しゆ〳〵と鳴る。又水入の穴が二ツある。一ツでは水が這入ぬ天と水と入かわつてぶつ〳〵と。陀羅尼を唱へ〳〵這入。何と能うしたものな。夫でこゝは天の滿てある事を御合點なさりませ。大地は天の塊りたのじや。則天の肉じや。夫で人は天の種じや。去によつて。天地の道を相續するものは人じや。其人が天地の道に背は。たゞ欲が深ひゆへ。目が明と何がほしい。かがほしい春はどふせう秋はどふせう。何をいふも金の事じや。金がなければどふもならぬと。人の難義もかまはずハアスウ〳〵夫から人の道を失ひ。飢落分散狐つき。心中身投首縊。さもなくば愁ひ災難困窮にくるしみ。妻子を失ひ難病業病。癲とまでに成て身を腐す。いづれ天の御刑罰遁るゝ事はならぬ。かゝる淺間敗罪科を作りて。迷ふが故。人ばつかりの敎へじや。外のものに敎へは入らぬ。一切萬物。おのれ〳〵が道の通り。鳶が烏のまねもせず。

犬が猫の身ぶり物まねもせず。春咲花は春さき。朝がほが晝過に咲た事もなく。寒菊は寒に咲く。皆天命に順ふ 各 其性命を正する。其根元は天が統といふて。一切の萬物を天が本〳〵してござる。けれど此肉眼で見へるものじやない。此統といふを讐て見やうなれば。薬をせんじるに。益氣湯の歸脾湯のと。病人相應の薬を調合して煎じ上たる其湯の内に。薬の氣が籠りてあるけれど。目には見へぬ。煮出した粕は形が有ゆへ目に見へる。薬の氣は茶碗の湯の内に統てゐれど。目には見へぬ。たゞ氣ばつかりじや。なれども。陳皮は陳皮の用を勤め。甘草は甘草の用を働き。各々其性命を正しう。勤め行ふゆへそれ〴〵の病に應じて五躰が健固に成て本腹すると同じやうなもので。一天の統といふも。此虚空の内に天氣が詰り切てある故。乾道變化し空即是色光明遍照十方世界念佛衆生と顯はれ給ふ。此念佛衆生とは。一切萬物の事じや。天の御德が光明遍照とあまねく照し給ふ故。一切萬物各形を顯はす。

「時なくに何を種とてうき草の浪のうねゝ〳〵生ひ繁るらん草木生々するは忝くも天の木星天下り。天地の母の胎内にやどり。晝夜御苦勞遊ばされ光明遍照十方世界へホギヤアと梅の花が咲き。栗の木に栗が出來。柿の木に柿が出來る。其外一切萬木千草形をあらわし。春雨のわきてそれとは降ねどもうくる草木はおのがさま〴〵。一切の形あるものは。其道々をつくし切て。各性命を正うし。魚は水に住て水をしらぬ。人は天に住で天をしらぬ。大海の魚が水を心として水をしらぬ。水中を游ぎ廻るは鰭が有ゆへじや。鰭は鳥の羽根じや。鳥が虚空を飛行する時の羽根と同じ事じや。人は天を心として天をしらぬ。知らぬはづじや。天は侃の大海じや爰をさして大哉といふ。此乾元の天の腹から生じた一切萬物なるゆへ四海兄弟。釋迦も孔子も富士の山も湖水も百姓も町人も乞食も穢多も禽獸草木其外江河の鱗類までも。皆天の一腹で出來たものじや。何と大なる哉じやないか。此道理を極める神道儒道佛道

道は近きにあり然るを遠きに求む。神道は睫毛。儒道も佛道も睫毛じや氣を付て考へて御らうじませ。道は天地より先達てある。一切萬物生ずると直にみちはしやんと備りてある。名といふものは跡から付たものじや。又名がなければ通用が出來ぬ。天地といふも題號じや。其名に迷ふて難儀する。其迷ひを取てやる神道儒道佛道の教へ佛といふも神といふも。跡から付た名じや。烏といふ名のないさきから。かあ〳〵いふてゐる。今日は結構な天氣で御ざります。言はぬ先きから結構な天氣じや

「天の戸を開く神代に告そめて今に八聲の時をたがへず
天地はまだ開けざる內に。國家孝行と啼てゐる。どうやら。ふら〳〵寐むたいは。夜前夜がふけた故じや。又夜も更さぬに寐むたいはソリヤ盜人めが屋尻切おるのじや
「天地の開けぬ先に謠らん玉子の中の鷄のこゑ

黑いといふ名のないさきから。烏は黑い。鷺は白いといふ。名のない先から白い。太郎兵衞もおげんも生れた跡から付た名じや。名の本は道。道の本は心。去によつて心は道の躰なり。佛さまの華嚴阿含法等般若。法華涅槃も跡から付た名じや。生た佛道といふは銘々心の事じや。三界唯一心心外無別法と。心の外に別に法はないと。佛さまの御說なされた

「夜もすがら佛の道を尋れば我心にぞたづね入りける
心の外に何が有ぞ。欲さへなければ即心即佛。迷さへ取れば直に丸佛じや。一切經は心の事。あみだ經も大日經も法華經も涅槃經も何にも別のものじやない。心が大事といふ事じや。儒道といふも心の事。書物は心の所書。誠の生た儒道とは。參乎吾道一以貫之と何を貫のじや。本心の靈明の思ひ。邪無心が三千世界を貫ひてゐるといふ事じや。是則心の事一切の書物一字も外の事じやない。皆心のことじや。神道でも。日本紀舊事記故事記本義其外神秘あらゆる書物皆神の事を書た書物じや

誠の神道とは心の事是私に言ふ事でない。神道唯一。天人一致。とは心が大事といふ神の教へ此外に神道はない。或は三教一致の心を歌に

「わけ登る麓の道は多けれど同じ高根の月を見るかな
大山の麓に幾も道がある。どの道からなりと登りて見ればたゞ一ツの月じや。其一ツの月を。所々で色々様々と名を付楽しんでゐる。湖水の月の。田毎の月の。更科の月。武蔵野の月。こちの裏の泉水の月。手水鉢の月水溜りの月。犬の食器の月。小便田子の月までに。しめ繩張てこちのか本真じや〳〵と唯一ツの月かげを爭ふてゐる。マア仰向て見たがよい。蓮師の歌に

「うつむきて案じて見ても寐られねば月を身延と起かへりけり

「雲井なる月は居ながら見るものをわけ登るとは迷ひなりけり

此月とは心の事。釋迦も孔子も石川五右衛門も穢多も乞食も一切萬物禽獣草木に至るまで。天の御徳の満々てある心のたとへじや。取わけ人には靈明の徳が備りてある夫を知らずにゐるとは。可惜事じや。夫を教てもらふ三教の道じや何にも外の事じやない。本心とは我に備りてある道を知るのじや。心を離れて外に道はない國の元は家にあり。家の本は身にあり。身の本は心に有。一人貪戻なれば。一國亂を起す。御地頭様に仁があれば國中が治る。一軒の内の旦那殿の心が大事。上清ければ流れ清し。水上濁れば下は泥界。上に立人は呵りてがないと。こわいものじや。我まゝ氣まゝもしらす。ホンゝゝ

「外からは手もさへられぬ要搆を内からやぶる栗のいがかな

國天下の反覆も主人の心一ツから。たゞ心が大事じや。日々に新に戦々競々。朝夕神佛を禮拜するにも。ただ心の吟味するのじや腹の中に何にも穢たものはないか。先祖の御心に背はせぬか。若得て勝手して人に難義をさせてはいぬかと。たゞ己を責るのじや。己に克て禮に復るが人の道じや。又小人といふものはおのれは我まゝ氣まゝして。わつゝゝゝ